スーパーファミコン冒険ゲームブック
ゼルダの伝説
神々のトライフォース
富沢義彦
双葉文庫　ゲームブックシリーズ

双葉文庫

スーパーファミコン冒険ゲームブック

ゼルダの伝説/神々のトライフォース

富沢義彦／スタジオ・ハード

双葉社

ゼルダの伝説

神々のトライフォース

CONTENTS

プロローグ

雨音で目を覚ました。

確かに目が覚めるほど激しい雨音ではある。空が壊れたみたいだ。

夜中に目を覚ますことは、あまりない。今日はおじさんに早く寝るように言われ、いつもより二刻は早くベッドに入った。そういう時は決まって、おじさんの昔の仲間が家に来て遅くまでお酒を飲む。酔っ払うと、たいがい昔の話が始まる。ぼくが生まれるずっと前の話や不思議な神話を、ぼくは寝たふりをして耳をそばだてている。

力の神、知恵の神、勇気の神が、この世の中を創造し、この地を去る時に残した黄金の聖三角形「トライフォース」のこと。

見つけた人の願いをかなえてくれるトライフォース。それを手にしたのが、魔盗賊のガノンドロフという男だったので世界が滅びかけたこと。

勇者や騎士団と邪悪な力との戦いを話す大人たちの声は興奮に震え、力を悪用するガノンを封印した聖なる賢者の団結を話す大人たちの瞳は光り輝いていた。先祖たちが勝ち取った平和、自分たちが守り続ける安らぎに、みんな誇りを持っていた。

そんな話をドキドキして聞きながら、いつの間にか眠りにつく。

プロローグ

しかし、今夜は違った。誰も来ない。そのうえ、おじさんも早々に床についてしまったのだ。ハイラルの夜は静かで、普段は物音一つしない。早く寝すぎたうえに、激しい雨音では、つい目を覚ますのもしかたがない。再び、眠りにつこうとした時、突然女の人の声が聞こえた。

「助けてください……。私の名はゼルダ……」

なんとも奇妙な感じに、動くことができなかった。どこから聞こえたのか、検討がつかない。頭の中で鳴り響いたような気もする。いや、鳴り響いたというのは少し違う。助けを求めているのに、その声は、とても落ち着いていて、優しく気高い。声はさらに続く。

「……6人の生けにえが捧げられ、私が最後の1人……。闇の世界の封印が解かれようとしています……」

どこか遠くから、声が、言葉が送られているのだ。言葉が伝えるのは、まるで神話のような内容だ。いったい何のことだろう。そして、それが何故ぼくに…。完全に目が冴えてしまった。不思議な空気を振り払うように、毛布を半分めくって上体を起こした。

ふと、暖炉の方を見ると、おじさんが大きな体を丸めて、炭火で温めた苦湯を飲み干すのが見えた。寝巻き姿ではなく作業着に着替えていた。僕が起きたのに気づくと、おじさんは怒ったような険しい表情を作って言った。

⇩1へ

この本の遊び方

1　ゲームの進め方

天地創造の神々が大地に残した聖三角体「トライフォース」。その、黄金の力をめぐり、多くの血が流された「封印戦争」から数百年後――。再び闇の世界の封印を解き、ハイラル王国を、いや、全世界を地獄の底にたたき落とそうとする、邪悪な者が現れた！　そしてついに、魔の手はゼルダ姫のもとにも……。

あなたは勇者となって、ゼルダ姫と6人の少女たちを救い出し、ハイラルに平和を取り戻すために冒険を始めます。

勇者の運命を左右する分かれ道は、文章の終わりにある選択肢。それは単純なルート選択であったり、アイテムの有無、ハートの数などによる振り分けで決まります。そのつど勇者の進むべき道を選んでください。

2　行動記録用紙の使い方

ゲームを進めていくうちに、勇者の冒険の条件はいろいろと変わってきます。アイテムを入手したり、勇者の持つハートや爆弾の数が変化するたびに、巻末の行動記録用紙にチェックしていってください。

●ハート

勇者の生命力は、ハートの数で表されています。最初は3つでスタート。まず、ハートのチェック欄に鉛筆で♡印を3つ書き、その中を塗りつぶします。ゲーム進行中に**「ハートが○個増える」**と指示があった場合、勇者が持っているハートの数が増えることになります。そのつど、チェック欄に♡印を書き込んでいきます。そして、敵との戦闘などによって、勇者がダメージを受け**「ハートを○個 消費」**と指示されるたびに、消費した分の数だけ♡印の中を白く消していきます。ハートがすべて白くなると勇者は死んでしまい、ゲームオーバーとなるのです。逆に**「ハートが○個回復」**とあった場合は、回復した数の分だけ、♡印の中を塗りつぶします。ただし、持っているハートの数の上限を超えて回復することはできません。また、ゲームの進行によっては**「ハートが○個減る」**という指示が出るときもあります。この場合は、減った数の分だけ♡印そのものを消さなくてはなりません。

●アイテム・魔法リスト

ゲームを進めていくうちに、勇者は武器や防具、魔法のほか、様々なアイテムを手に入れることでしょう。それらのアイテムは、いずれも役に立つものばかりです。**「○○入手」**という指示があったら、忘れずにこのスペースにアイテム名や魔法名を記入してください。(爆弾の場合は、使うたびに減っていくので数のチェックも必要です)

この本の遊び方

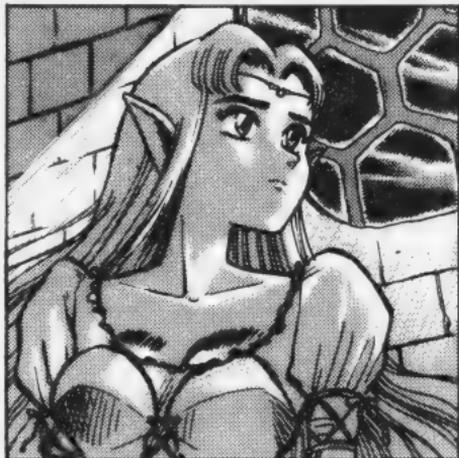
●アルファベットチェック

ゲーム中に**「○をチェック」**など、アルファベットをチェックするという指示があります。その時は、このチェック欄のあてはまるアルファベットにチェックしてください。このチェックの有無によって、冒険が有利に展開することもあれば、不利な状況におちいってしまったりと、勇者の運命が微妙に（あるいは決定的に）変わってくるのです。このチェックは重要なので、必ず忘れないようにしてください。

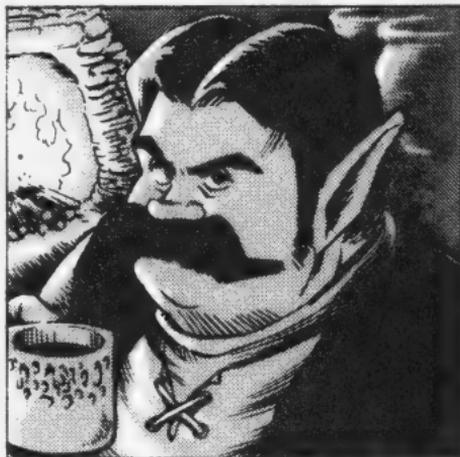
さあ、いよいよ冒険の始まりです。勇者の行く手には、数々の危険と困難が待ちかまえています。それらを乗り切るのは、すべてあなたの判断次第。はたしてあなたは、ハイラルの救世主となることができるでしょうか？　健闘を祈ります。

勇者

激しい雨の夜、ゼルダ姫のメッセージを聞いた運命の少年。彼の勇気ある行動、危機を切り抜ける知恵、困難を跳ね返す力にハイラル国、ひいては光の世界全ての未来が賭けられた。輝かしい冒険譚を人々の胸に刻んだ勇者の血は、リンクという少年に受け継がれる。

キャラクター紹介

PRINCESS ZELDA

ゼルダ姫

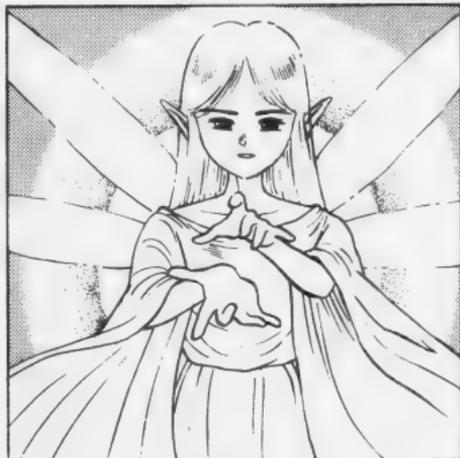
ハイラル王国の慈愛と希望を象徴する美しい姫。囚われの身であった彼女の真摯な願いが勇者を立ち上がらせる。

UNCLE

おじさん

勇者となる少年に、剣と盾、そして使命を与える。「封印戦争」当時は勇猛果敢な戦士として戦場をかけ抜けたであろうことは想像に難くない。

サハスラーラ

聖剣マスターソードの秘密を知るカカリコ村の長老。実は「封印戦争」を終結させた七賢者の末裔で、老いてなお勇気の火は消えていない。

SAHASRAHLA

妖精

勇者の行く先々でハートを癒し、冒険を助けてくれる聖なる生命。神話にゆかりあるハイラル地方では、このような生命が多く見られる。

FAIRY

キャラクター紹介

AGAHNLM

司祭アグニム

妖しげな魔法を使う悪の司祭。ハイラルに起こった原因不明の災いを取りのぞくが、王宮に入り込むや王位を狙って不気味な陰謀を企む。

GANON

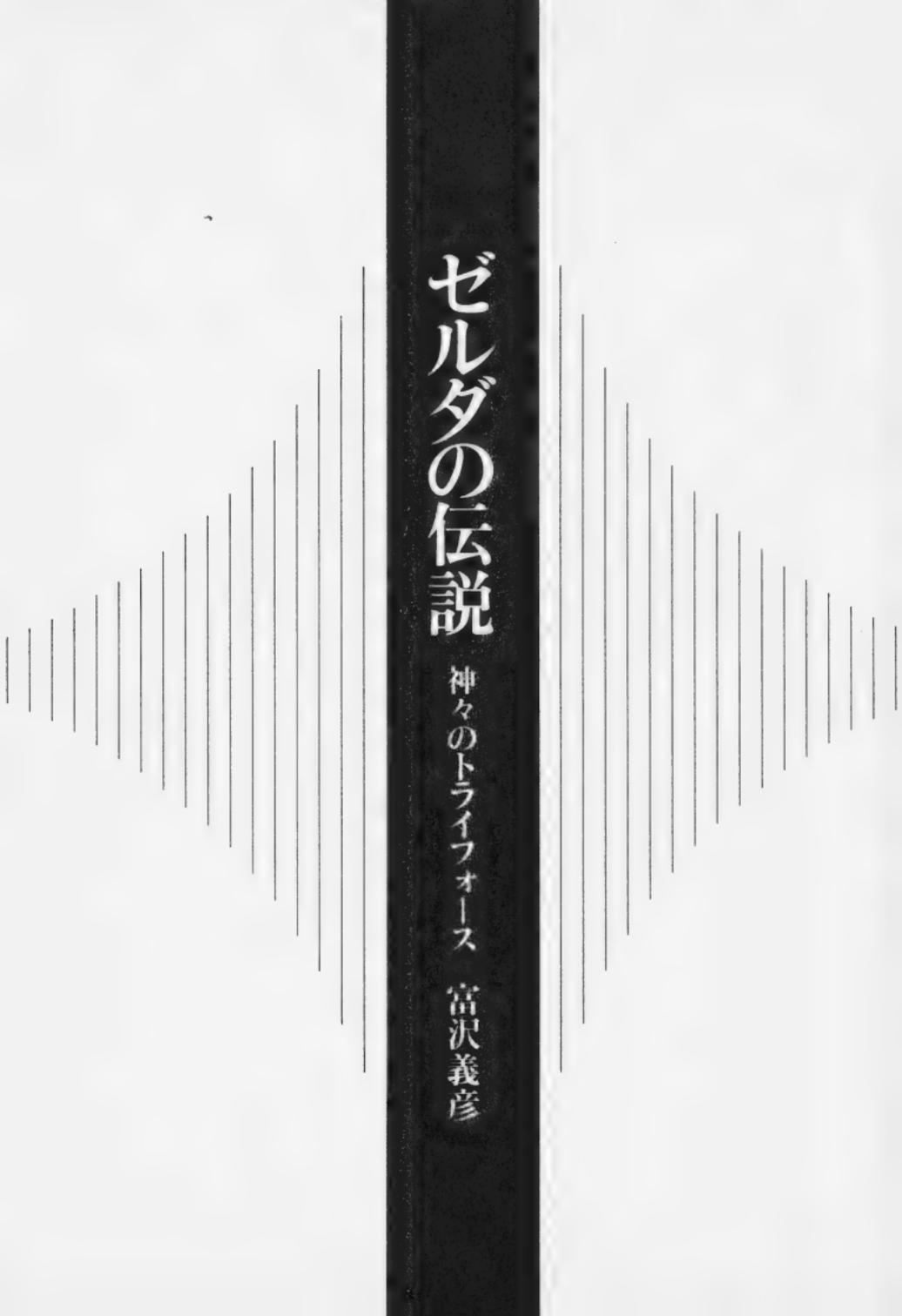
魔王ガノン

盗賊団首領ガノンドロフの変わり果てた姿。血塗られた手でトライフォースを手にし、強烈な邪気を放つ魔の存在としてハイラルを襲った。

ゼルダの伝説

神々のトライフォース

富沢義彦

1

「寝ていろ」
こわい顔のわりに、めったに荒げた声をあげないおじさんが強く言った。自慢のひげがビリビリ揺れた。ちょっとびっくりしたが「どこにいくの？」と聞かずにはいられなかった。
「心配すんな。なぁに、朝までにゃ帰る。ちょっとな。つまらん大人の用事ってやつだ」
今度は急に、いつもの陽気で優しい声に変わり、ほんの少し笑った。ぼくは分かったような仕草を見せると、安心して床についた。
「家から出るなよ」
こんな雨の夜にわざわざ外に出るのは、つまらない用事の大人ぐらいなもんだ。毛布の中から、おじさんの丸っこい後ろ姿を片目を開けて眺めた。ぼくが毛布に入ったのを確認しようとして、おじさんが振り向いた。
カチャリと金属の触れ合う音が聞こえた。同時に、おじさんの手に剣と盾が握られているのが見えた！
「おじさん！」
今度こそ本当にびっくりして飛び起きた。いったい何をしにいくというのだ。こんな夜中に。
その時、また頭の中に、さっきの声が話し掛けてきた。

1

1●こんな夜中におじさんは、どこへいくのだろう。ぼくは暖炉の上のカンテラをつかむと、雨の中に飛び出していった。

「助けてください……。私の名はゼルダ……。お城の地下牢に閉じこめられています」
ゼルダって誰だ？　お城の地下牢……？　疑問が胸に渦巻き、それは次第に不安から、得体の知れない胸騒ぎに変化した。おじさんは、どこへ何をしにいったのだろう。この声と関係があるのだろうか。いてもたってもいられなくなった。ぼくは暖炉の上のカンテラをつかむと雨の中に飛び出していった**（カンテラを入手）**。

⇩141へ

2

扉を開けると、小さな妖精たちが飛び回っていた。ぼくはふぅ〜っと息を吐き出すと座り込んだ。目の前に小妖精が舞い降りてきた。
「ごきげんよう、勇者様。体を直してあげるね」
ぼくの体の中に再び力が蘇ってきた**（ハートを5個回復）**。
「この迷宮の主ゲルドーガは次の部屋よ。小さな目玉は矢で射落とすといいわ」
「ありがとう。もういかなくちゃね」ぼくは立ち上がった。

⇩409へ

3

聖なる力が闇の力を寄せつけない。闇の力で、ぼくを無力な姿に変えようとしたテグテイルの企みは失敗した。すぐさまテグテイルは直接攻撃に切り替え、強烈なアタックを仕

掛けてくる。逃げ場のない板の上、体当たりを食らえば下に落とされる。落とされなくても硬い体のぶちかましは辛い。
　こいつの弱点は、ただ1つ。尻尾の先でクルクル回転している部分だ。突進をかわし、体当たりに耐え、ひたすら弱点を攻撃する。
……数十回は剣を打ち込んだろうか。相手にひるんだようすはなく、またも猛然と突っ込んでくる。いつのまにか隅に追い込まれていた。逃げ場はない。残った力をふり絞り、テグテイルを飛び越えて、弱点を剣で突き刺した。剣は鉄の板もろともテグテイルを串刺しにした。テグテイルは全身から熱い水蒸気を吹き出し動かなくなった。辛い戦いが終わった。心臓が飛び出しそうに鼓動を打っていた（**ハートを3個消費**）。

●ハートは残っている……⇩32へ
●ハートは残っていない……⇩73へ

4

目眩と浮揚感。おなじみの感覚を味わってマジカルミラーで、光の世界のカカリコ村へと戻ってきた。闇の世界にくらべ、日差しは柔らかく、緑も優しいような気がする。
「さあ、ついた。」
　カエル男は人間の姿に戻っていた。金鎚を使うたくましい腕と、ごつごつしたかたい手、黒いあご髭をはやした生粋の鍛冶屋だな。

「ああ、なんと礼をいっていいいやら。そうだ、お礼にあんたの剣を鍛えてあげやしょう。なあに相棒だって同じ心持ちでさあ。俺たちにかかりゃあ、あっという間でさ！　さあさあこっちです、あんた」

「あっ、いや、ぼくは」

強引に引きずられて、カカリコ村の外れの鍛冶屋の仕事場にたどりついた。２人の鍛冶屋の涙の再会をへて、さっそく２人はぼくの剣を鍛えてくれる。

「なあに、あっしらの腕にかかりゃあ一晩ってとこでさぁね、あんたは隣の部屋のベッドで寝てておくんなさい」

その言葉に甘えて、ぼくは休むことにした。ベッドは鍛冶屋の几帳面な性格そのままに清潔なものだった。ベッドにはいると、瞬く間にぼくは眠りの世界へ落ちていった。

「よお、あんた。できたぜ」

その言葉でぼくは目覚めた。さっそく剣を見せてもらう。ちょっと眠そうなぼくの顔が剣に歪みもなく映っている。刃はあくまで冷たく鋭い。剣をふるうと太い薪が真っ二つに切れて、刃こぼれもない。

ぼくは礼をいうと、再び闇の世界へ戻った。

「村の真ん中のガーゴイルの像の下が、ブラインドの住みかですぜ」

最後に鍛冶屋の言っていた言葉どおりに、ぼくは像の前に立った。

⇩275へ

5

通路は地上の階に続いていた。姫がさらに上の階を示した。そうだ。脱出するのではない。アグニムを倒さなければ。

城の2階は、ほとんどアグニムの占領下にあった。異形の魔神の像を左右に配した扉の前に立った。この中にアグニムがいるのだ。

ゼルダ姫を後ろに下がらせ、勢いよく扉を開けた。正面の祭壇の前にアグニムが立っていた。山猫のようにつりあがった目をキラリと光らせ、上目使いにこちらを見た。

「ほほほほ、来たか。勇者とやら」

暗い室内から、月を背にした逆光のぼくを眩しそうに眺めている。アグニムは祭壇に火を灯し、部屋にアグニムの影が大きく広がった。再び、ぼくの方を見るとアグニムは人を小馬鹿にしたような笑顔を作った。

「ん、おまえが勇者か。まだ子供ではないか。子供がわしと戦うというのか。良かろう。手加減はせんぞ」アグニムの表情がグルリと、どう猛な獣のそれに変わった。

●逃げる……⇩457へ　●マスターソードで勝負……⇩235へ
●まずは小手調べ。矢を放つ……⇩104へ

6

べつに水掻きなしじゃ全然泳げないというわけでもないし、ハートと引き換えというのは高すぎる。そう言うと、キングゾーラは不愉快そうな顔をした。もしかして襲われるかと身構えたが、やつは手下をひきつれるとさっさと水中に消えてしまった。うーん、もし戦っていたら、買うより高くついていただろうなあ。しかし問題はなにひとつ解決していないな。しかたない、岸まで泳ごう。

⇩**63へ**

7

少し敵のパターンを眺めていると、6体の動きにパターンがあるのが分かった。安全な位置を測りながら、敵に矢を連射する。1体につき3本で、テグアモスの像は粉々に散った。剣で戦っていたら、こう楽にはすまなかっただろう。少し疲れただけで、わりと楽にテグアモスを倒すことができた**（ハートを1個消費）**。

⇩**167へ**

8

またしても洞窟だ。雨宿りにはちょうどいいけど、洞窟の奥から怪しげな羽音が聞こえてくる。ぼくの五感は入らないほうがよいと告げている。

●**通りすぎる**……………⇩**138へ**
●**少し雨宿りしてみる**……………⇩**94へ**

9

後ろから？　アグニムはグッタリした姫を抱えていた。姫から離れて飛び出したのはうかつだった。
「まだまだ相手には不足だぞ。勇者よ」
アグニムは姫を抱えたまま、軽々と宙に浮き、反転すると再び正面の祭壇の前に立った。片手を地面に叩きつけるようにすると、盛大な煙幕が張られた。煙の中に駆け込んだがアグニムの姿も姫の姿もない。
その時、大勢の兵士が部屋に乱入してきた。立ち籠める煙の中、混戦が始まった。ぼく1人を狙っているつもりが、けっこう同士打ちになっている。地面をはって、部屋の隅に行った。壁に煙が吸い込まれている部分を見つけたのだ。司祭の椅子の裏に抜け道があった。アグニムは、ここから脱出したのだ。

⇩127へ

10

先に進もうとするが、息があがっている。それにおちついてよく見れば、奥に続く道はないらしい。かわりにあるのは……ん？　これは宝箱じゃないか。それもかなり大きい。開けてみると、中に入っていたのは大きなハンマーが1個。何だこれ？　なになに、マジックハンマー？　うーむ、これは使えるかもしれない。もらっておこう。しかしこれが置

いてあるってことは、置いていったやつが来た道があるはず。あたりをもっと注意して探す。ふと目を床に落とすと、黄色い図形が描いてあるじゃないか。もしかして魔法陣か？
すると、コレに乗れば……ぼくは足を図形の中心に踏みだした。

⇩17へ

11

声のした方に向かって駆け出した。敵は、おじさんを傷つけた奴に違いない。許せるものか。
剣に手をかけながら角を曲がった途端、硬い壁に当たって勢いよく押し戻された。壁だと思ったのは、巨大な人間の胸板だった。黄色く光った目が兜の中から、ぼくを見下ろしている。
「まぁた侵入者か。どうも今夜は忙しい……」
衛兵はブツブツ言いながら、ぼくの足ほどもある剣を抜き、上段に振りかざした。
「死ねぇ、小僧ぅ！」
問答無用に振りかざしてくる大剣を、飛びすさって避ける。同時に剣を抜いた。一連の動作は体が覚えている。
二撃は横から来た。かいくぐって衛兵の間合いに入り、脇の下の空きから切り上げる。
「ぐふっ……。やりおるな、小僧。だが、ただでは死なん」

苦悶の声を上げた衛兵は剣を捨てて、ぼくを懐に絞めあげた。すさまじい力が全身の骨に悲鳴をあげさせる。
「離せぇ、この、デカブツ！　化け物！」
思いつくかぎりの罵りの言葉も、衛兵の耳には聞こえていないようだ。罵りながら、太い腕の中で必死に暴れた。と、男は突然体勢を崩し、そのままグラリとなった。
「あわわわわ……、何だ何だ」
衛兵はぼくを離さずに、石畳の床に倒れた。ただでさえ重そうな巨体に鉄の鎧の重量が加わった、とてつもない重さに押しつぶされそうになった。抜け出すのに、軽く四半刻はかかったろう。なんとも情けない始末だが勝ったことは勝った。しかし莫大な疲労は、このたわいもない勝利に見合わない気がする（ハートを1個消費）。

⇩97へ

12

道はまた突き当たった。ぼくの口からため息が漏れる。
その時だった、天井から剣を持った骸骨戦士スタルフォスが降ってきた。こいつの硬い骨には剣が通じない。さて、他の武器は？

●爆弾を使う……………⇩142へ
●弓矢を使う……………⇩47へ

13

はっと気が付くと、あたりは見たこともない妙な風景。空は赤く染まり、血のようでさえある。足元をみると、どうやらピラミッドか何かの上らしい。その下に広がる大地も枯れ果てたような生気のなさ。いったいここはどこなんだ？　途方にくれる間もなく、声が聞こえてくる。サハスラーラの声だ。

「この世界は聖地ハイラルの裏側の闇の世界じゃ。闇の司祭アグニムによって封印が解かれてしまったのだ。だが闇の力の開放は、まだ完全ではない。つまり生けにえとして捕われた娘たち、ゼルダ姫たちはまだ生きているということじゃ。クリスタルの中に閉じこめられているのじゃろう。今のうちに少女たちを助けだし世界を救うのだ。まずは闇の神殿を探せ。東に向かうのじゃ」**（ハートが全部回復）**

⇩220へ

14

慎重に盾をかまえ、熱線の死角を探しながら進んだ。しかし、さすがに警備用の機械だけあって、執拗にぼくの居場所を追ってくる。ついにこっちが角においつめられた。強烈な熱線が襲った。盾によって黒焦げになるのこそまぬがれたものの、ぼくは部屋の反対側の隅に飛ばされ、強く腰を打った**（ハートを1個消費）**。が、幸いそこは扉まで、すぐの距離だ。這うようにして入りこんだのは、小さな狭い部屋だった。

⇩294へ

15

周りはやはり森だが、木々の色も明るく空も青い。光の世界の森だ。やっぱり森は森に繋がっているんだなあ。さて、戻ってきたのはいいが、どこにあるのかを聞き忘れたぞ。
我ながら間抜けな話であきれてしまうな。さて、どこから探すべきか。

●**西を探す**……⇩92へ

●**まずは北から**……⇩251へ

●**東だね**……⇩300へ

16

「イテテテ」
顔から火が出るようだ。痛いし、恥ずかしい。目の前は青く光っている。ん、何だ？
腕立てふせをするようにして、床から顔を離すと、そこには魔法陣が描かれている。次の行動を考える間もなく、辺りの景色が一瞬にして変わった。

⇩475へ

17

もしかしてこれでどこかに……と思う間もなく、辺りの風景が変わった。魔法陣の魔力が発動して、別の場所に運ばれてしまったのだ。見るかぎり、神殿内のどこかには違いないみたいだが……。

足元に動くものの気配がある。視線をおとすと、床に亀みたいなモンスター・バメットがうごめいているのだ。ノソノソと動きは遅いが、あきらかにこっちに向かってくる。剣で切りつけても、甲羅が硬くて全然歯がたたないじゃないか！　そうこうする間にも、バメットが押し寄せてくる。どうしよう？

●マジックハンマーがある……⇩254へ　●マジックハンマーはない……⇩64へ

18

鉄格子越しに初めて見たゼルダ姫の姿は、落ち着いた声から想像したとおり清楚で可憐だった。大きな瞳をしている。まともに見つめると吸い込まれそうだ。

「来てくださると信じていました」

「はい」

「あなたが勇者様ですね」

「は、はい」

「抜け穴があります。そこから逃げましょう。連れていってくださいますか」

「はい」

こういう時に、なんて言っていいのか……。姫が手を差し出した。その手を握ると、ぼくは先に立って駆け出した。

18

18● 「連れていってくださいますか」姫が手を差し出した。ぼくはその手を握ると、先に立って駆けだした。

「そちらではありません」
「はい」
姫の示すほうに、クルリと反転して駆け出した。ぼくの顔は耳まで真っ赤に違いない。

⇩5へ

19

右の扉をぐいと押す。でも、びくともしない。調べてみると固く凍りついているのだ。さて、解かさなけりゃあ、進めないときたもんだ。

●ファイアロッドがある……⇩366へ
●ファイアロッドはない……⇩103へ

20

扉を抜けると広間だった。でかい部屋には、それに見合った大物が……いる。うずくまる極彩色のかたまりが、丸い複眼を光らせていた。赤い目にぼくの姿が幾重にも映りこむ。そして毒々しい色彩の羽をひろげ、はばたくとさまざまな色の粉が舞う。巨大な蛾なのだ、ここのボス・ガモースの正体は！
ガモースのまき起こす風におもわず後ずさると、いきなり背中に激痛が走る。ふりむくと、壁ぞいに棘がびっしり生えている！　文字どおり後がないというわけだ。壁からはな

れて構えようとすると、今度は床が動く！　とっさのことで対応できず、ころんでまた棘にささってしまう。なんとか立ち上がるが、こんどはガモース自身が見かけによらぬ高速で迫ってくる！　剣をつきだして迎撃するが、奴はひらりとかわして避けてしまう。下をくぐりぬけて背後に回ったと思ったら、また床が動いて奴の正面にもっていかれてしまう。別の意味で、まったく「後」がない。せめて、あいつの動きを封じなければ……。

●ファイアロッドがある……⇩423へ　**●ファイアロッド？　なにそれ⇩363へ**

21

目には目を、爆弾には爆弾を、だ。1個取り出して思いっきり投げつける**（爆弾を1個消費）**。やつは自分が爆弾をくらうとは思ってもみなかったにちがいない。足元に落ちた爆弾に目を見開いた刹那、奴は見事にふっとんでいた。あとには奴がもっていたらしい爆弾がとりのこされている。もらっていくことにしよう。ヒノックスには爆弾を使うのが効果的なようだ**（爆弾を4個入手）**。**⇩268へ**

22

女神にクエイクのメダルを示した。満足そうにうなずくと、女神は両手で目に見えない球を捧げ持つような動作で、精神を集中し始めた。

「それでは亀岩まで送りましょう」
その言葉が終わるか終わらないかのうちに、辺りの景色は荒れ果てた山の上に変わった。
ぼくは亀岩の上に立っていた。ありがたいことに、体中の傷が治り、疲れが取れている。
(ハートが全部回復)ぼくは、たくさんの人々に見守られながら、ここまできた。その期待にこたえなければ……。新たな勇気を奮い起こした時、どこからか、女神の声がする。
「時は近づいています。ゼルダ姫を助けてください」
大きくうなずいて、ぼくはクエイクのメダルを天にかかげた。

⇩239へ

23

クリスタルスイッチを押すと、クリスタルの色が変わった。しかし、この部屋の中にはなんの変化もない。音がしたのはとなりの部屋だ。ちょっと不安ではあるが、次の部屋に進むことにする。
次の部屋に入ると、おもしろい光景に出合った。モンスターがいて、こっちに襲いかかってこようとしているんだが、なんと柱に囲まれて出てこれず、くやしそうにもがいている。こういう仕掛けだったのか。いや、物はためしと言うが、なんでもやってみるものだな。悠々と次に進む。

⇩139へ

24

羽を失って墜落し、もがくガモース。とどめを刺すべく剣をかまえてじりじりと近づく。
だが油断はできない。まだ例の弾は吐けるはずだ。そう、思ったとおりガモースは頭をもちあげ、弾を3発たてつづけに吐き出した。だが方向は見当ちがい。もらった！　と思った瞬間、信じられないことがおこった。またも床が動いて、弾の弾道のほうに運ばれていく。そんな！　こうしてはいられない。敵の頭にむけてダッシュする。敵の1発目が後ろで、2発目がすぐ脇で炸裂し、足がにぶる。そして3発目が直撃！　かなりダメージを食らったが、ここで奴に余裕を与えてはいけない！　パワーを振り絞って突撃する。奴が次を撃つ前に勝負を決めねば！
ガモースが口を開く。剣の切っ先が振りおろされる。奴の頭が鮮血を吹くのと、光をはくのはほとんど同時だった**（ハートを3個消費）**。

●ハートが残っていれば……⇩172へ　●ハートが残っていなければ…⇩244へ

25

城に近い地下道の明かりはすべて消されていた。ここから先は直線だ。一気に駆け抜ければ、それほど問題ではないだろう。油断なく剣を構えて、先を急ぐ。

●カンテラを持っていれば……⇩227へ　●カンテラを持ってなければ……⇩5へ

26

右にあるスイッチを押した。しかし反応がない、ダミーだ！　ぐるぐるバーの高熱体が体をかすめた（**ハートを1個消費**）。他のスイッチを試すしかないな。

●手前のスイッチ……………⇩245へ
●奥のスイッチ……………⇩145へ
●左のスイッチ……………⇩400へ

27

こちらが動かないと相手も動かない。弓を引き絞った瞬間、コッピも何かしようとしたが弓の方が速かった。おまけにこっちが飛びのいたのにあわせ、コッピは攻撃せずに飛ぼうとしてしまった。不運なコッピのダブついた腹に2本の矢がつきたった。⇩**307**へ

28

球体に戻った光はアグニムのほうに跳ね返っていった。アグニムの目が大きく開いた。その顔には恐怖の色が浮かんだ。魔法を跳ね返す。それがアグニムに限らず、魔法を使う者にとって一番効果のある撃退方法なのだ。自らの魔法を受けてアグニムの体が真っ青な炎に包まれた。火の粉を巻きちらしながら、アグニムはゆっくり近づいてくる。業火に焼かれながら、アグニムは勝ち誇ったように奇怪な話を始めた。

「んふふふ、ははは、無駄だ。わしが死んでも、あのお方が甦る。あのお方が甦れば、わしも永遠に生き続けることができるのだ……。死んだところで、闇の世界が光の世界を飲み込めば、黄泉こそ光……。同じことよ……」
グラリとアグニムの体が地面に倒れた。同時に塔を支えていた骨がゆらぎ、全体が音を立ててくずれ始めた。
「うわああああぁぁぁぁっ」
ぼくは永遠とも思える長い闇の中をただ落下していった。

END

29

ひっそりとした石積みの小屋が目の前にあった。中に誰かいるのだろうか？　壁に身を寄せて窓から中を伺う。壁のひんやりとした感触が心地よい。しかし、こうしてるとドロボウにでもなった気がするのも妙だな。
「誰だい、窓からのぞいてんのは。のぞいてないで入ってきな」
その声にぼくは呼吸が止まった。しかし、このまま逃げるのもしゃくだ。中に入ろう。
「別に怪しい者ではありません。ぼくは……」
頬に刀傷のある男は鼻で笑った。よく日に焼けた目つきの鋭い男だ。

「へん、笑わせんじゃねえよ、怪しいも怪しくないも、ここは大盗賊ブラインドの隠れ家でい」

なにぃ、ハイラルでは泣く子も黙るというあのブラインドか！　ぼくはその一言だけで剣を抜いた。男は片手を上げて俺を制した。

「慌てんなよ。もう5年の間、親分は姿をくらましたっきりだ。当分、帰ってきやしねえよ。黄金の力がどうとか言ってそれっきりだ。それでおれも休業ってわけさ。まったくお天道様の光の嫌いな親分でよ。どこでどうしているやら」

男は寂しげに笑うと入り口を指差した。それが帰る合図だ。

「愚痴を聞かしちまったな。あんた、旅人のようだから、もし親分に会ったら、あの頃が一番楽しかったと伝えてくれねえか」

ぼくは、きっと伝えると約束してこの家をあとにした。

●西の道を選ぶなら……………⇩434へ

●南に行くなら……………⇩306へ

●東に行くなら……………⇩158へ

30

鎧をはがしてみれば、ワートの本体は空とぶ大ダコ、いやどっちかというと、1つ目大クラゲといったほうがいいシロモノだった。これなら剣で切れるはずだ。今度こそ白兵戦だ！　あらためて剣をにぎりしめ、のばしてきた触手をなぎはらう。敵が触手を引っ込めたそのすきに一気に間合いをつめ、剣を大上段にふりかざす。

敵も必死だ。あわてて触手をのばし、からみつけてくる。締め殺すつもりか？　その力はなかなか強く、首をしめられると目の前が真っ白になる。だが手遅れだ、この剣はもうとまらない。どっちが先に落ちるか（ハートを1個消費）。

●ハートが残っていれば……⇩430へ　●ハートが残っていなければ…⇩244へ

31

こんなところで下っぱの魔術師などにかまっていられるものか。ぼくは光線をよけて走りだした。しかし……。忽然と目の前にウィズローブが現れた。テレポートしたのだ。三日月状の光線をくらいながら、体当たりをかけると、ウィズローブは壁までふっとんだ。

（ハートを1個消費）ぼくは、そのまま奥へと走った。

⇩193へ

32

カチカチカチ。中から小さな音が聞こえたかと思うと、いきなりテグテイルは爆発した。砂粒のように細かく砕けたテグテイルの残骸の中から、知恵の紋章の入ったペンダントを取り出した。これで3つそろったというわけだ。勇気、力のペンダントを取り出し、3つを並べてみた。その時、どこからかサハスラーラ老の声が響いた。
「ついに手に入れたようじゃの。とりあえず、よくやったと言っておこう。勇者になる資格があることを認める」
誇らしい気分に胸を張った。

⇩412へ

33

マスターソードを構えると、城の正門から一気に突進する。すぐに門の辺りは大騒ぎになり、数人の衛兵が集まってくる。おじ直伝の回転斬りで近くの者を、離れた者は刃風でなぎ倒す。大混戦では、こちらも無傷ではいられないが、助けが来たことがゼルダ姫の耳にも届くだろう（**ハートを1個消費**）。剣の音を響かせながら、城の中へと突入する。

⇩341へ

34

ここから災いの池まで歩いたら相当な距離があった。しかし、ぼくにはオカリナがある。今はいない少年への感謝の気持ちをこめて、オカリナを勢いよく吹いた。威勢のいい羽音と共に鳥さんが現れ、ぼくの襟首をくわえると軽々と宙に舞った。この鳥さんにかかったら、ハイラルのどこに行くにも、ほんの一瞬だ。

⇩389へ

35

グラブの裾を引いて手になじませると、一気にフタにかけた指先に力を込めた。上に積まれた幾つもの石をガラガラと崩し、軽々とフタを開けてしまった。さすがはパワーグラブ、伝説の力だ。箱の中には爆弾が入っていた。戦いに使うにも、障害物をどかすにも便利な道具だ**(爆弾を5個入手)**。なんとか装備もさまになってきたな。右手の平を左の拳でパチンと打ち、次の部屋の扉を開いた。

⇩135へ

36

後ろは深淵の闇。前の扉を開けるしかない。おそるおそる次の部屋をのぞきこむと、部屋の中央にボウッと青白く光るクリスタルスイッチがある。天井も床も壁も、黒いしみだらけの布で覆われている。生臭い嫌な匂いが漂っている。黒いしみは血なのだろうか。あ

まり長く居たい場所ではない。左右に２つある扉の右の方は、地面から飛び出た青い四角柱で塞がれている。左はそのまま行ける。柱はクリスタルスイッチで上下させることができるはずだが……。

●スイッチを入れる……⇩154へ　●左へ行く……⇩334へ

37

雨はこぶりになっていた。夜も明けようとしていた。頭上には灰色の雨雲があるが、遠くの空には、だいだい色も見える。直に雨は止むだろう。

教会は城の裏手にある。城外だというのに、そこここに衛兵の姿がある。墓標の陰に隠れながら、教会に近づく。

転がって門の前にたどりつくと急に扉が開き、細い手に襟首をつかまれた。

「うわっ、んぐ」

口を押さえられ、教会の中にひきずりこまれる。色鮮やかなステンドグラスを通して、わずかにそそぐ朝日に、はげあがった頭と丸い眼鏡が浮かんだ。神父様だ。

「静かに……。アグニムに操られた衛兵たちが見張っている」

黙ってうなずくと、神父様は奥に来るよう手招きした。祭壇の前の長椅子に、ぼくたちは腰掛けた。神父様も、いつものおだやかな顔から、どこかたくましい武人の顔をのぞか

37

37●「静かに……。アグニムに操られた衛兵たちが見張っている」
黙ってうなずくぼくに、神父様は奥に来るよう手招きした。

せていた。おじさんといい、神父様といい、ハイラルの大人たちは、何かとてつもない物を背負っていたように感じた。重く低い声で神父様は話し始めた。
「よく、ここまで来た。突然のことで、とまどっていると思う。しかし、動き始めたということが、すでに勇者の資格だ」
「それを聞きたかったんだ。勇者って何のことですか？　ぼくが何の勇者だというのです」
不敵に、そして静かに神父様は笑った。
「ふふ、そうだな。まだ、おまえを勇者と呼ぶのは早すぎた。伝説の剣さえ、まだ、おまえを認めてはいないのにな」
ぼくのことを勝手に勇者と呼んだり、まだ認めていないと言ったり、いったい何のつもりだろう。ちょっと口を尖らせかけた。神父様は、それを見逃さず、話を続けた。
「急なことだったのでな、おまえのおじも話せなかったのだ。それは許せ。これは光と闇の戦いだ。今、闇の中心にいるのはアグニム。奴は秘かに闇の世界を開放する準備を進めている。そんなことをされたら、ハイラルも、いや我々の住む世界全部がおしまいだ。奴らの力はすさまじい。全面対決すれば被害は計り知れないし、闇の世界が開放されつつあるという事実を知れば、平和に慣れたハイラルの人々は恐慌を来すであろう。奴らの気づかぬうちに中心に近づき、人知れず悪の根源を断つ。それが我々の使命なのだ」
「よりによって、なぜぼくが……」

37

「先の封印戦争の記憶を伝承してきた我々は、闇の一族に警戒されている。ゼルダ姫の声は届いておったのだが、わしらが動けば気づかれる。おまえのおじが代表で、アグニムを捕らえにいくはずだったが、やはり警戒されておった。こうなった今、奴らの目をかいくぐって、伝説の力を振るえるのは、おまえ以外にないのだ。どうやら、おまえにもゼルダ姫の声が聞こえたらしいしな」

どちらにしろ、ぼくは選ばれたのだ。偶然、おじを追ってきたこともあるが、それ以前に、ぼくに声が届いていた。本来、まだ未熟な者に届くはずのない声が。

「わかりました、神父様。おじはあなたにサハスラーラという人の居場所を聞くようにいいました。どこに行けば会えますか？」

「東の神殿だ」

神父様は地図の場所に印を付けながら話を続けた。

「彼も封印戦争7賢者の血を色濃く引くもの。辺りは警戒され、会うのは難しかろうが、行ってもらうしかない。できるか」

のどにゴクリとつばを飲み込み、ぼくはうなずいた。神父様は、ぼくの肩に手を置いてギュッとつかんだ。勇気が体に送り込まれた**（ハートが1個増える）**。

⇩257へ

38

扉をあけると氷の部屋だった。柱も彫像も氷でできている。壁の彫刻ももちろん氷だろう。例によって例のセンスだけど……と近づいてみると、彫刻が動いた。壁を抜けて飛びかかってくるぞ。しまった、こいつは彫刻じゃなく、モンスター・タイノンだったのか！

●ファイアロッドがある……⇩224へ　**●とりあえず手持ちの武器で……⇩65へ**

39

扉は音もなく開き、ぼくは招かれるように部屋の中に入った。ここは来客が服を預けるところだったのだろうか。それとも、モンスターに捕まった人が身ぐるみをはがされるところだったのだろうか。どれもボロボロだが、たくさんの服が壁にかけられ、床にも山のように転がっている。そのせいで浮いている細かな布ボコリで喉がつまりそうになった。胸の悪い空気を吐き出そうと咳をした途端、後ろでドンと鈍い音がした。

扉が閉まったのだ。と、前方の壁がクルリと回転して、骸骨の剣士が現れた。スタルフオンという伝説のモンスターだ。

●斬る！……⇩67へ　**●かわして逃げる……⇩271へ**

40

剣は敵の喉を切り裂いていた。地響きのような音をたて、ジークロックの巨体が崩れ落ちていく。ジークロックを倒すと、その背後には大きなクリスタルが隠されていた。中には少女がひとり、封じ込められている。ジークロックはこれを守っていたらしい。だがそのクリスタルもジークロックとともに崩壊し、いまや少女は開放されつつあった。

「ありがとう、勇者様。おかげで……」

少女のお礼はうれしいが、まだやるべき事は山ほど残っているのだ。

「まだゼルダ姫やほかの生けにえの人たちを助けなきゃならない。何か知っていることはありませんか？」

「ゼルダ姫は亀岩というところにいると聞きました。トライフォースはガノンが持っています。それ以上のことはお役にたてません。でも……」

少女がぼくの手を握りしめた。体に力が流れこんでくるようだ。

（ハートが1個増える。ハートが全部回復）

⇩189へ

41

硬そうな扉の模様は炎と氷。2つの紋章がグルグルと互いを食いあっている。永遠に相容れない憎しみを象徴しているのだろうか。

扉が勝手に開き、中に入ると再び閉じた。かつては舞踏会でも催されていたかのような広いホールは一部が凍り、一部が焦げ、破壊の限りを尽くされていた。
奥には巨大な亀のような化け物が待ち構えていた。巨大な牙を生やした頭の脇から、さらに2本の頭がのびる。青い頭は氷の頭、赤い頭は炎の頭。テグロックは炎と氷の地獄の責め苦を象徴し、日照りや寒波などの自然の災害を引き起こすという伝説で語られる。そう簡単に勝たせてはもらえないだろう。

●ファイアロッドとアイスロッドがそろっていれば……………………⇩**288へ**

●どちらかしかない。またはどちらもなければ……………………⇩**368へ**

42

ここは瓦礫の山ばかりだ。物陰で石の崩れる音がした。それだけでぼくは動きだしていた。次の瞬間には、物陰の動く物へと剣を向けている。
「ひゃあ～、お助けを！」
その言葉で、剣が止まった。あと5センチでそいつの首をはね落としていただろう。
「何者だ」それはカエルだった。緑色のカエル男である。
「光の世界で鍛冶屋をやってたんですが、なんか青い魔法陣をふんじまったら、こんな世界へ来ちまったわけでして。おかげでカエルの姿なんで」

闇の世界では、心の形がそのまま姿になるという。ムーンパールをとる前にぼくが兎に変わったように、この男はカエルなのだ。

「あんたみたいな姿の変わらん人は初めて見たですよ。もし、できるんなら私を連れて帰ってください。相棒が心配してるといけない」

●**つれて帰ってあげよう……⇩4へ**　●**無視して少女を探す……⇩199へ**

43

手探りでカンテラを取り出した。わずかでも明かりが灯ると、ずいぶん視界が効くようになる。と、足元で何かが反射しているのに気づいた。しゃがみこんで見ると、それはカギだった（**カギを入手**）。

⇩315へ

44

悪魔の沼は、光の世界のあやしの砂漠の、ちょうど裏側になっているという。ぼくは道を急いだ。しかし、困ったことが起こった。どうしても沼の入り口が見つからないのだ。険しい山に阻まれて、向こう側へはとても行けそうにない。

光と闇の世界の通路が完全に開くまで時間がないというのに！

●**Ｉにチェックがあれば……⇩411へ**　●**Ｉにチェックがなければ……⇩50へ**

45

ポケットからミラーシールドを取り出した。瞬時に銀色の膜が全身に広がった。しかし、これはただの炎ではない。強力なミラーシールドが、ついに耐え切れずに溶けだした。止むなくミラーシールドを放って、炎をかわす。なんとか少し火傷をしただけですんだようだ(**ハートを3個消費**)。まともに受けていたら、今頃、勇者の丸焼きが1つできあがっていただろう。マスターソードを握る手が汗ばんでいる。苦しそうに低くうなり声をあげ、ガノンは矛を低めに構え直した。肩への攻撃がきいたようだ。

⇩**453へ**

46

進んでいくと、向こうから巨人がやってきた。しかも、1つ目の巨人。ヒノックス。光の世界にはいなかった奴だ。爆弾を投げているのは、攻撃のつもりなのか、それとも遊んでいるつもりなのか？　どちらにしろ、爆殺されてやる義理はない。どうやって倒す？

●**剣で戦う**……………⇩**313へ**
●**爆弾には爆弾だ**……………⇩**21へ**

47

矢はスタルフォンの肋骨の間を虚しく通り抜けた。間合いをつめたスタルフォンの剣がぼくの足に赤い筋を作った(**ハートを1個消費**)。やはり爆弾が一番か。

⇩**142へ**

48

アグニムの手前の空間に亀裂が入った。パリン。ガラスの弾けるような音がして、結界が壊れた。

「おのれぇ、こしゃくな……」

アグニムも両手を組んで、頭上に振りあげた。それを振りおろすと、2つの拳の先から青い光が放たれた。光は過たずクリスタルを襲った。

⇩473へ

49

大きな体をブルッと震わせると、テグロックはゴォーンというような咆哮をあげた。するどい牙の生えた真ん中の首が、いきなり伸びて噛みついてきた。肩を噛まれながらも、大きく開けた口の中にマスターソードを突っ込む。テグロックの上顎から鼻先にかけて血の線が走る。テグロックの離れた目が、さらに左右に分かれ、顔が真っ二つに切り裂かれた。鍛えあげられた剣の力は絶大なものがある。勝負は一瞬にして決した（**ハートを1個消費**）。

●ハートが残っていれば……⇩377へ

●ハートが残っていなければ…⇩241へ

50

岩山のふもとを回ってみたがやはり入り口はない。ぼくは途方にくれた。ごつごつとした険しい岩山が忌まわしい。あやしの砂漠なら簡単に入れるのに！
「いや、まてよ」
砂漠に青い魔法陣があれば、悪魔の沼へ行けるかもしれない。ぼくはさっそくマジカルミラーを取り出した。軽い目眩のあと、ぼくは再び光の世界へ戻ってきた。

⇩221へ

51

火をつけようにもカンテラがないんじゃ仕方ない。手探りで調べることにしよう。壁がだめなら、床という手がある。どこかに出入り口とかスイッチとかがないとも限らないからな。撫でたりたたいたりしながら這っていく。しかしこんなとこでモンスターには会いたくないなあ、ぶつぶつ。半ばふてくされているうち、たたく音がほかと違う場所があるのに気づいた。もしかして、ここだけ薄いのでは？　爆弾なら穴があけられるかも知れないぞ（なければやめるしかないが）。

●爆破する……………⇩393へ　**●やめとこう**…………………⇩105へ

52

下手に近寄ることは出来ない。とっさに手にしたブーメランを投げつけた。ジジジという軽い振動音を発しながらブーメランは衛兵の兜に当たった。その一瞬、衛兵の頭がブレて見えた。衝撃波で衛兵は立ったまま気絶したようだ。
「今のうちに……。カギは衛兵が持っています」
ぼくはうなずくと、衛兵の鎧を探ってカギを取り出した。

⇩18へ

53

どうやら、ここが村の中心らしい、ガーゴイルの石像がある。カッと目を見開き、耳まで裂けた口から鋭い牙がのぞく。大きく翼を広げ、三つ又の矛を突き出した姿は、今にも動きだしそうだ。背筋に冷たいものが走る。
なんだ、かすかに何か聞こえるぞ。注意深く耳を澄ますと、少女の啜り泣く声だ。4人目の生けにえの少女はこの下にいるのか！　今までの経験からすれば、どこかに入り口を開けるスイッチがあるはずだ。
はやる気持ちを押さえて慎重に像のまわりを調べる。三つ又の矛が微かに動くようだ。
ぼくは力任せにそれを引き抜いた。
地の底から響くような音を立てて、地下への入り口が開けた。

クリスタルに封じ込められた少女よ。今、ぼくが助けよう!

●勇気を出して階段を下りる…⇩275へ
●準備を整えてからにする……⇩354へ

54

おそるおそる人影に近づいた。
「おじさん!」
どうしたんだろう。おじさんは怪我をしているようだ。息が荒く、顔は土気色だ。
「おじさん、どうしたの」
うっすらと目を開けると、苦しそうにおじさんは言った。
「おまえか。家から出るなと言っておいたのに、しかたのない奴だ」
「心配で来てみたんだ。それにゼルダという人が助けを求めてる声が聞こえた」
「おまえにも聞こえたのか……。ふぅ、やはり血は争えんか。そうであれば、おまえにも話しておくべきだったかなぁ」
「何を、何の話?」
「わしらの一族は次から次へと新しい世代に記憶を伝えていくんだ。ハイラルの歴史を、そしてトライフォースの伝説を……」
おじさんはゴツゴツした手で、ぼくの手を強く握り締めた。

54

54●「ゼルダ姫を助けるんだ……。これを使え」おじさんが差し出したのは、よく手入れされた剣と使い込まれた盾だった。

「よいか。長くは話せん。なんとしてもゼルダ姫を助けだすんだ……。これを使え」
おじさんが差し出したのは、よく手入れされた剣と使い込まれた盾だった。
(剣と盾を入手) ⇩197へ

55

左に向かって走りだした。ふと見ると道端に変わったキノコが生えている。何かの役に立つかもしれない。1本ひっこぬいてポケットに入れた**(キノコを入手)**。 ⇩361へ

56

沼の中程、倒れたまま腐った木の間に祭壇らしき物が見えた。行ってみよう。緑の藻で濁った沼の水におそるおそる足を入れ、沈んでいかないことを確かめながら、ぼくは沼を渡っていく。腐った水がブーツにしみ込み、腐敗臭が体にまとわりついてくる。それで、祭壇にあがったとき正直いってホッとした。
祭壇はコケに広くおおわれて、所々石の地肌がのぞいている。そういう意味じゃ、あまり踏み心地のいいもんじゃない。その床の1か所だけがかすかに黄色いのに気がついた。手でコケを払い除けてみると、そこには古代ハイラルの魔法、エーテルの紋章がくっきりと印されていた。

ここでエーテルの魔法を使うのか？

●魔法を持っている……⇩84へ
●魔法はない……⇩279へ

57

神殿に入ってみる。中には男が1人。しかし動くようすがない。半分が木になっているのだ。その男に話を聞いた。
「黄金の力とは、すなわちトライフォースのこと。最初にふれた者の願いだけをなんでもかなえるのだ。それが悪党ガノンだったから、こんなになってしまったが。実は私も、その力を求めて来た1人だが、ごらんのとおり。この世界をどうにかしたければ、今の持ち主を倒して自分の願いを叶えるしかないよ」
そういうことなのか。話を聞きおわり、外に出た。

⇩46へ

58

右だと見当をつけて分け入ると、泥棒ピックがいる。こいつが口笛を？　いや、違うぞ。などと思っていると、奴は素早く脇をすりぬけていた。いったい何をしたんだ？　げっ、ハートが1個足りないぞ。さては今盗られたか。ちっ**（ハートが1個減る）**。

⇩263へ

59

杭はハンマーで叩くと簡単につぶすことができた。こうして橋をわたると、それらしい建物がすぐ見えてくる。枯れ草色の広場のむこうに、奇怪な像に守られるようにして、入り口らしいのがある。こんどは、扉をあけるのに苦労しなくてすんだ。
しかし中に入ると……なんだこの造りは？　行き止まりだ。壁じゃなく、空堀でとおせんぼ。先に進めない。橋もかかっていないし、そうするとまた仕掛けがあるんだろうか。そういえばサハスラーラが何か言っていたぞ。「水を渡って進め」と言われたんだ。でも今は空堀だから……、どこかに水をはるスイッチがあるんだろう。

⇩１５０へ

60

しばらく森を歩いていく。不気味な木のかげにときどき小さなモンスターらしいのが動く気配がするが、襲ってこないかぎりほうっておく。そのうち、森が開けて、どっかで見たような景色になった。なんだ、もとの場所にでてしまったらしいぞ。３つの穴もちゃんとある。また入り直すしかないようだ。一番手前の穴にしよう。

⇩３１７へ

61

20歩ほどで、部屋を渡りきり次の扉の前までたどりついた。また、扉を蹴り飛ばそうと

したが開かない。入ってきた扉もバタリと閉まった。同時に床のタイルが浮き、こちらに飛んでくる。開かない扉を背にし、次から次へと飛んでくるタイルを剣と盾で防いだ。すべてのタイルを叩き壊すと、背後の扉が開いた。

⇩119へ

62

川を渡ろうにもジャンプできるような幅ではないし、役に立ちそうな道具もない。しかたない、ピラミッドの頂上に戻って他の道を探そう。

⇩438へ

63

泳いでいくと、岸に洞窟があるのが見えてくる。ああいう所に何かないだろうか。魔法陣とか、アイテムとか。ま、あまり大きな期待を抱いてはいけないか。

洞窟に上がってみると、そこは妖精の住みかだったようだ。見慣れた透明の羽をはばたかせながら飛んでいる。これはラッキーだ。まずは体力を回復させてもらおう。

「体力回復ついでに聞くけど、もときた場所にもどる方法を何か知らないかい？」

「そういうものはありませんが、その場所なら私の力で戻せると思いますよ」

否もおうもない。ぜひお願いして、戻してもらおう**（ハートを全部回復）**。

⇩118へ

64

剣が効かないとなれば、もう手のうちようがない。情けないかも知れないが、ここは一番、逃げるに限る！　しかしそう簡単に通してくれる相手じゃなかった。甲羅につまずいたり、かみつかれてもこっちは手のだしようがないんだから。下手なモンスターと戦うより、よっぽど疲れた。それに逃げると決めたのはいいが、いったいどこに？　と、行く手の壁の下のほうに穴があいている。ネズミの穴にしちゃ大きいが、そんなこと気にしてる場合じゃなかった。ええい、ままよ！　覚悟を決めて飛びこむと、意外や穴は結構深かった。もしかして、落ちてるのか、ぼく？**（ハートを1個消費）**

⇩184へ

65

きっと、こういう氷の怪物は熱が効くんだろうけれど、あいにくそんな武器の持ち合わせはない。しかたなく、剣で立ち向かうが……。かっ硬い！　どこぞのボスの仮面じゃないが、キーンと澄んだ音がするだけでなんの効果もないみたいだ。これじゃ倒しようがないぞ！　さいわい動きは速くないらしいので、隙をみてほうほうの体で逃げだした。ああっ、情けない！**（ハートを2個消費）**

⇩316へ

66

そういえば……。入り口の前で出会った少女が弓矢のことを言っていたっけ。よし、弓矢で正しい。しかしどこを狙ってもいいというものじゃないだろう。どっかで見たような1つ目巨人の像だから、こういうときは目を射抜くものと相場が決まっている。狙いを目に定めてぎりぎりと引き絞る。矢が寸分たがわず目の真ん中に突き刺さる。と、像の中でキリキリと音がし、音が音を呼んでいるかのように大きくなっていく。さっき削ったところからは、歯車が回っているのがちらりとみえる。そして、背後で地ひびきのようなものすごい音が。びっくりして振りかえると、さっきの継ぎ目のところで壁がごんごんと音をたてながら動いているじゃないか。なんて大げさな。

壁が動いてしまうと、その後ろに出口が見つかった。見ると下へ下りる階段になっている。武器をしまいなおし、気をひきしめて下りていく。大げさなところってのは、やばいものと決まっているからな。

⇩419へ

67

マスターソードに気を込めた。おじさんの言っていた言葉を思い出したのだ。振り返るように回転し背中を向けると、スタルフォンは好機とばかりに飛びかかってきた。次の瞬間、剣はスタルフォンの背骨を背後から断ち切っている。厚刃の剣に飛ばされたスタルフ

オンの上半身が壁に激突し、壁の仕掛けがクルリと回る。わずかな隙間ができ、奥に細長い通路が見えた。

⇩337へ

68

雨に打たれながら、しばらく門のようすを眺めてみた。普段の見張りの兵士たちと、どうもようすが違う。動きが妙にギクシャクしていて、まるで何かに操られているようだ。緊張感を通り越して、まったく隙がない。

●城の周りを探して、入れるところを見つけよう ……⇩358へ

●戦えば何か分かるかもしれない。やってみよう ……⇩287へ

69

しょせんは蛾の羽だ、爆弾なら一撃さ！　その計算はまちがっていないはずだ。しかし、あてることに注意をはらわなかったのがまずかった。

なげつけようとすると床が動き、ねらいが定まらないのだ。空中にいるガモースは、足場を気にせず高速でうごきまわり、うろたえるぼくに次々と攻撃をかけてくる。だが、床が止まった時を見計らって、なんとか1個をなげつけた。1個でも、あたれば効果はあるはずだ。

だが、投げられた爆弾のスピードなんてたかが知れていた。ガモースは悠々とそれをよけると、また3方向に弾を発射した。とっさにかわそうとした時、またも床が動いた。しまった！　なすすべもなく2発目をくらってしまう。爆弾ではだめだったか。よし、フックショットにすべてをかける！**（ハートを2個消費）**

⇩**450へ**

70

外に出たぼくは沼を渡ろうとして、水が澄んでいることに気がついた。今まで緑の藻と腐敗臭で濁った沼の水が、透明になり始めているのだ。ボコボコと湧き立つガスも少なくなっているようだ。ゲルドーガの魔力から開放された沼が元の姿に戻ろうとしているのだろう。そんな光景を見回しているぼくは、小さな妖精たちが洞窟のまわりに集まって飛んでいるのに気づいた。なんだろう？

⇩**355へ**

71

相手の力を利用する……。アグニムの元に駆け寄りながら、その言葉の意味に気が付いた。ぼくは立ち止まる。アグニムの光球が猛スピードで飛んでくる。マスターソードの平たい面を正面に構え、光の球を受けとめた。ものすごい衝撃だ。刃全体に光が溜り、再び球体に戻る。強引にぼくを押し続けていた

71●アグニムが放った光球を、マスターソードの平たい面を正面に構え、受けとめた。ものすごい衝撃だ。

力が、今度は逆に働いた。同時に凄まじい破壊音が鳴り響く（ハートを2個消費）。

●ハートが残っていれば……⇩376へ　●ハートが残っていなければ……⇩28へ

72

ハイラル湖のほとりにたどりついた。正確には「闇のハイラル湖」というべきかな。水が濁っていて、光の世界の湖とはだいぶ印象が違う。それに、泉の小島も見当たらない。そのあたりに迷宮の入り口があるはずなんだが、泳いでいくしかないんだろうか。

●でも水掻きがあるから大丈夫……………………⇩192へ
●こんなことならさっき買っておくんだった……………⇩258へ

73

精一杯戦ってきたが、どうやら、ぼくの力はここまでのようだ。ゼルダ姫、おじさん、神父様、そしてハイラルの人々。無能な勇者を、どうか許してほしい。サハスラーラ老、ぼくはハイラルを救うことができなかったよ……。

END

74

勝負は一瞬にして決まった。ぼくの横にないだマスターソードは、兵士の剣を折り、緑の鎧を軽々と断ち切った。ぼくは強くなっている、そして敵を倒すことに悩まなくなっている。これが本当の戦士なんだろうか？　それとも狂戦士なのか？

⇩306へ

75

左に向かって走りだした途端、いきなり誰かにぶつかった。

「すみません！」

謝ると、向こうはニヤリと笑って立ち去った。グシャグシャの髪に人相の悪い面構え。ぶつかったのは迷いの森を根城にするドロボウだ。特に何も取られなかったようだが、背中に冷汗が流れた**（ハートが1個減る）**

⇩55へ

76

レバーを引くと、壁の一部がせり上がった。そしてぽっかりと開いた穴には宝箱が見て取れる。ふむ、悪くないな、中は赤い回復薬だ**（ハートを3個回復）**。

ぼくは部屋をでると、正面の扉を押した。

⇩229へ

77

運がいいと言うのかどうか。森を探索したときに拾っておいたキノコが残っていた。まあいいか。これを猿にあげると、うれしそうにキッキッと笑っていた（**Eにチェック**）。
「ごちそうさん！　約束どおり役に立ってみせるよ！」サルキッキがついてくる。
しかし、何を手伝ってくれると言うのだ？

⇩46へ

78

火の付いた爆弾を素早く投げつけた。スタルフォンは足元に転がった爆弾に興味を示さず、ジリジリとこちらに近づこうとした。それぞれの足元で、背後で、爆破が起きた。近くにいたものは、木っ端微塵に吹きとんだ。直撃しなかったものも、爆風でバラバラに崩れた。スタルフォンの１匹が回復薬を持っていた。小さな壺に入っていた赤い液体を飲むと、四肢に力が蘇った（**ハートを5個回復**）。

⇩114へ

79

困惑していると、遠くからラクダに乗った小柄な男がやってきて目の前に下り立った。
「え、辞書ぅ、辞書はいらんかねぇ」
まったくいいタイミングで行商人が現れてくれた。

「すみません。辞書をください」
「辞書？　ほぉ、辞書を欲しがるとは、また奇特なお方だ。でも、まいど」
行商人は営業用の笑顔を巧みに作って、荷の中から辞書を取り出した。
「売れるものは何でも売ります。しかし辞書を何にお使いかな。ま、よろしい。ともかくお渡ししましょう。それで……」
行商人はもみ手をしながら、代金を催促した。

●Aにチェックがある……⇩133へ
●Aにチェックがない……⇩283へ

80

ファンギンは氷の床をすべり攻撃をかけてくる。ぼくは足を取られないように片膝をついて身構えた。膝から氷の冷たさが体に這いのぼってくるようだ。あまり長くは膝をついていられないな。
ドシン。ファンギンの体当たりをまともに盾に受けてよろめいた。くそっ、足場が確かならなんでもない敵なのに！　ぼくは剣をふるった。
体当たりを止めては切る。４度これを繰り返してファンギンを倒した時には、ぼくも少なからずダメージを受けていた**（ハートを３個消費）**。
後ろで音を立てて開いた扉から、元の部屋へ戻ろう。

⇩316へ

81

目の前に宝箱がある。辺りは小動物の骨や壊れた食器、破かれた本などで汚れているのに、この宝箱の周りだけ、それを寄せつけず、きれいになっている。いったい何が入っているのだろう。

●Kにチェックがある……⇩320へ　●Kにチェックがない……⇩176へ

82

この村では珍しく、まだ人の住めそうな家があるぞ。慎重に扉から中をうかがう……。わっ、突然扉が内側に開いて、ぼくはバランスを崩した。

「いらしゃいませ～！」

「？」

「当店は、はぐれ者の村一安い店ですよ。いやあ、お客さんは運がいい。今ならハート全回復の薬と爆弾5個で、ハート7個と交換ですよ」

なんだ、こいつは？　キツネ顔にヒゲをはやした商人が笑っている。ふざけているのか。

「そいつはちょっと高いな。」

と、ぼくは剣を握りなおした。

「おお、お客さん商売上手！　わかりました。損を覚悟で、回復薬か爆弾5個かどちらかをただでお譲りしましょう」

ハート全回復か、爆弾5個をどちらかを選んで記入したら

●東へ……………⇩335へ　●南へ………………⇩219へ

83

ラモネーラの体はサラサラと崩れ、最後には砂の一部となった。近づくと足元に力の紋章の入ったペンダントがあった。手に取ると、それは不思議な光を放ち、ぼくの体に真新しい息吹を吹き込んだ。**（ハートが1個増える。ハートが全部回復）**

さあ、残るは知恵の紋章のみだ。全身にパワーを取り戻したぼくは、一気に砂漠を駆けぬける。ペガサスの靴が、ぼくを再び風に変えた。

⇩346へ

84

祭壇の中央に立ち、エーテルのメダルを大きくかかげて呪文を唱える。青く眩しい光がメダルから八方に広がると、激しく周囲の空気を震わせた。やがて、それが強い風となり、上空にたちこめた黒雲を吹き飛ばしていく。その強風に飛ばされぬように、ぼくは祭壇に伏せるしかなかった。

やがて、風が止み、闇の世界の太陽が上空からこの沼を照らしだした。すると、どうだろう、激しい地鳴りと共に祭壇の一部がせり上がり始めた。そこが地下への入り口だった。ぼくは、そこでやっと立ち上がることができた。さあ、生けにえの少女を助けてゼルダ姫の元へ急がなければ！

⇩89へ

85

敵は大軍団。こちらは1人。まともに突入したら、いくら命があっても足りない。思えば、冒険の始まりだった抜け穴に再び脚を踏み入れる。

「誰だ！」数人の衛兵が、ぼくを取り囲んだ。衛兵の剣先が頬をかすめる。避けた。相手の剣の流れが見えたのだ。今度はぼくの番だ。マスターソードが流れるように敵を倒していく。数回打ち合った末に、敵はついに地に伏した**（ハートを1個消費）**。

⇩25へ

86

渦に巻き込まれて運ばれていく。気がつくと流れはおさまっていたが、周りを半魚人みたいなのに取り囲まれている。みんなうさんくさそうにこっちを見ている。ここはどうやら、ハイラルのゾーラの巣らしい。こんなたくさんのに襲われたらちょっとたいへんだ。どうやら、ゾーラの群れがさっと開いて、その間からひときわ大きなゾーラが現れた。

86●キングゾーラは貫禄たっぷりの重低音で、ぼくに話しかけてきた。「泳げるようになる水掻きはいらんか？」

こいつらの王様のようだ。キングゾーラは貫禄たっぷりの重低音で、ぼくに話しかけてきた。さすがにキングだけあって、言葉をしゃべれるようだ。
「おぼれるとは間抜けなやつめ。いやいや取って喰おうと言ってはいない。それよりどうだ、泳げるようになる水掻きはいらんか？　いまなら特価・ハート2個で交換してやる」
水上販売なんて聞いたことないな。どうする？

●交換に応じる……………⇩472へ　**●ことわる…………………⇩6へ**

87

冒険には深い洞窟や未知の神殿がつきものだ。当然、暗がりも多くある。カンテラを失ったのは、ちょっと大きな痛手のようだ。ぼやいていると、何かにつまずいた。強く膝を打った。しばらく足を引きずって歩くことになるだろう（**ハートを1個消費**）。
それにしても、いったい何だったのだろう。床を手で探ってみると、どうやら石畳のずれに引っかかったようだ。八つ当たりして、床をドンと叩くとチャリンと金属音がした。音のした辺りを探るとカギに触った。
「ハ、転んでみるもんだね」
妙な強がりを言って、なんとか次の扉を探しだし、部屋を抜けた。

⇩315へ

88

森の影が向こうに見えている。しかし、今、足元に見えているのは、ドロリと濁った水の流れ。どうもピラミッドは、グルリと川に取り囲れているらしい。ピラミッドは城と同じ位置にある。つまり、汚れた川は堀の変わり果てた姿だ。光の世界には橋があったはずの位置に行ってみたが、闇の世界は荒れ果てていて、ただ向こう岸にポツンと切り株が残っているだけだ。なんとかして、この川を渡りたいのだが…。

●フックショットがあれば……⇩272へ

●フックショットがなければ……⇩62へ

89

階段を下りた最初の部屋は、薄暗く左右と奥に扉がうっすらと見て取れた。暗やみに目が慣れるのを待って、3つの扉を見比べた。

●左の扉を選ぶ……⇩160へ

●右の扉を選ぶ……⇩468へ

●奥の扉を選ぶ……⇩232へ

90

石盤の文字は辞書で読むことができる。このために辞書が必要だったのだ。一文字一文字調べながら読んでいく。最後の一文字を読み終えると神殿に入り口らしき穴が開いた。

次の紋章を手に入れるために、ぼくは砂漠の神殿に踏み込んだ。

⇩440へ

91

ここから災いの池までは気が遠くなるほどの距離だ。それを往復するだけで、かなりの体力を消費するだろう。それでも、ぼくは行かなければならない。
山を駆け下り、丘を越え、橋を渡り、体力の続くかぎり走った。途中、何人の敵と戦ったか、よく覚えていない。剣を構えてダッシュする、ぼくの前に道はできる。汗と疲労と引き換えに、ついにワザワイの池にたどりついた（Jにチェック）。

⇩389へ

92

森に分け入って探すが、全然それらしいものが見当たらない。あいつ、いったいどこを通ってきたんだ？　ぶつぶつ文句をいいたくもなるが、半分は自分のせいだ。しげみをかき分けて出ると、カラスと目があった。いきなり飛びかかってくるところを見るとただのカラスじゃない、モンスター化している。不意をつかれて最初の一撃はくらってしまったが、もどってきたところを剣でぶったぎる。うーむ、どうせならしゃべれる奴が出てきてくれればよかったのに。しかたない、探す方角を変えよう。（ハートを1個消費）

⇩15へ

93

何か忘れていることがある。確か占い師から、ヘブラ山について何か情報をもらったような気がしたんだが……。何かを探せと言われたような気がするが、何だったろう。

●辺りを探してみる……………⇩200へ
●放っておく……………………⇩426へ

94

疲れた体を引きずってぼくは洞窟へと入った。さきほど受けた傷口がまた開いて、血が流れだしている（**ハートを2個消費**）。座り込みたいけど、休む前に羽音の主を確認しなくちゃいけない。ぼくは、洞窟の奥へと踏み込んだ。何かが暗やみで飛び回っている。あれはチャスパだ！　目玉にコウモリの翼がはえたモンスター、そいつが何百匹といる。ぼくは気付かれないようにそおっと洞窟を後にした。

⇩138へ

95

水がまた流れてきて、階段のところまでが満たされ、上がることができた。どうりでジメジメしてる。床にドクロが落ちてたりするけど、これって水死体なのだろうか。それにしちゃずいぶんある……と思っていると、また同じようにスイッチがあるぞ。

●やっぱり右……………⇩312へ
●今度こそ左……………⇩118へ

96

そうだ。これがガノンを倒す武器なんだ。
引き絞った弓から、女神にもらった銀の矢を放った。矢はガノンの胸に突きささった。しかし次の瞬間、まるで植物が枯れるように矢はボロボロに崩れてしまった。なぜ、効かないんだ。愕然としているところに、巨大な火の玉が襲った**（ハートを4個消費）**。

⇩**289へ**

97

休む間もなく遠くから大勢の衛兵の声がする。騒ぎを聞きつけられたようだ。ゆらゆらと明るい光と、長くのびた影が、すぐ脇の通路を近づいてくる。四、五人はいるようだ。
「しょうがない。ここで引くのは残念だが……」
大きな目的の前では、ちょっとした後戻りも止むを得ない。剣を納めると、ぼくはクルリと元来たほうに引き返した。

⇩**380へ**

98

なんとか入り口まで泳ぎついた。水上にあるだけあってめんどくさい入り口だったけど、潜ったりしながらどうにか中には入れたぞ。しかしこれじゃ、水びたしになりそうな

ものだが……なんて心配はまるで不要だった。なにしろ氷の迷宮というくらいだから、中は一面、凍結した氷の廊下だったのだ。水なんて入ってくるまえに凍るな、こりゃ。しかしこの寒さはまいったぞ。さて、この廊下を突っ切るしかないようだが……。

●一気に駆け抜ける……………⇩405へ
●慎重にいく　………………⇩386へ

99

難なく下の階に着地した。特にどうということのない普通の部屋だ。今まで通ってきた部屋と、造り自体はさほど変わらない。しばらく辺りを調べてみたが、仕掛けらしいものもない。あきらめて、ぼくは壁を足掛かりにして上の部屋に戻った。

⇩139へ

100

洞窟から戻る途中、またもムーンパールが鳴りだす。青い魔法陣だ。これ以上、カカリコ村にいてもしかたがない。敵ははぐれ者の村にいるのだ。さあ、少女を救いだそう。岩の陰の青い魔法陣を見つけ、ぼくはそれに飛び乗った。

⇩275へ

101

神殿の中に入ると、いきなり奥に続く廊下になっていた。正面に見える扉は閉まっている。足元を見ると、石畳のうち左右に2つだけ浮き出ているものがある。これに何か仕掛けがあるようだが1つは罠なんだろうなぁ、この場合。迷っていてもしかたがない。どちらかを踏むことにしよう。

●右を踏む……………………⇩421へ
●左を踏む……………………⇩171へ

102

フォールマスターに放り出されたのは森の中だった。しかし元の入り口ではないらしい。こまったことに、この森の中のことは全然分からない。どっちを向いても似たような景色だ。地下も迷路だけど、地上だって立派な迷路だぞ、これは。

右往左往していると、どこからか物音が聞こえてくる。それも雑音じゃない、一定の調子をもった単純な旋律。笛か、いや、どっちかというと口笛だ。すると、少なくともだれかが近くにいるわけだ。しかし、どこに？

●右から聞こえる…………⇩58へ
●いや左だ、間違いない……⇩394へ

103

氷を解かす道具をぼくは何も持っていない。となると回れ右で、左の扉を調べるしかなさそうだ。

⇩331へ

104

1本、2本。連続して矢を放つ。狙いは正確。アグニムの眉間を、胸を貫いた。矢がさったまま、アグニムはニヤリと笑った。矢は幻のように消え、見当違いなところに現れた。幻を見せられていたのか。目を疑っていると、アグニムの両手から光線が走り、目の前で破裂した。おどしだったが、ぼくをひるませるには十分だった**(ハートを1個消費)**。何にしろ、弓矢はきかないようだ。剣を使うしかない。

⇩235へ

105

爆弾でなくても、もっと穏当にマジックハンマーを使ったらどうだろう。うん、しばらく使ってなかったし、我ながらいいアイデアだと思うんだが。床板も薄いと思うし、うまくいけば一発で撃ち抜けるかも。ハンマーをとりだし、大上段にふりかざす。

⇩325へ

106

他の道を探すうち、遠くに神殿の姿が見えてきた。何とかたどり着けないものかな？　探してみると、堀がとぎれてかわりに生け垣が行く手を阻んでいる。中は迷路みたいだ。なんとかここを通れないかな？　よく見ると中に入れそうな入り口が2つある。

●**右の入り口に入る**……………⇩**110へ**

●**左の入り口に入る**……………⇩**470へ**

107

看板にカカリコ酒場と出ている。雨風に叩かれて古びた扉が、ぼくを迎えてくれた。まだ昼だから、静かだが夜になれば賑わうのだろう。

●**入ってみようか**……………⇩**188へ**

●**入っている暇はない**……………⇩**373へ**

108

ブン。衛兵は再び鉄の球をくりだしてきた。

盾で受けたが、その威力で数歩後ろに下がった。鎖を手繰り寄せる隙をつき、間合いを狭める。近づいてしまえば恐くない。鉄球をあきらめた衛兵は短剣を抜いた。しかし、こちらの方が一瞬早かった。マスターソードの突きが衛兵を倒した（**ハートを1個消費**）。

「いまのうちに……カギは衛兵が持っています」

ぼくはうなずくと、衛兵の鎧を探ってカギを取り出した。

⇩18へ

109

やっとのことで砂漠の外れの洞窟についた。とたんに今まで沈黙したままのムーンパールが光りはじめた。青い魔法陣があるんだ。

「おや、若き勇者が、この世捨て人の洞窟へなんの用じゃな」

ゆったりした白いローブをまとった老人に、ぼくは悪魔の沼へ行くことを説明した。

「ふ～む、ならば、ここにきて正解じゃよ。この奥に青の魔法陣がある」

ぼくは洞窟の奥の青い魔法陣にのった。

⇩318へ

110

思いのほか深い茂みだった。体じゅう葉っぱだらけになったけど、なんとか抜けられたようだ。でも様子が変だ、せっかく抜け出したというのに神殿が見当たらない！　こりゃ、あさっての方に出てしまったのか？　どっかから道がつながっていてくれないものだろうか。とりあえずようすを見るため進んでみる。すると、岩肌にぽっかりと穴が開いているのが見える。洞窟だな。どうしたものか。

●入ってみる……⇩165へ

●ひきかえす……⇩106へ

111

氷の迷路はどうやらここで終わりのようだ。頑丈な扉が目の前に現れたのだ。ぼくは迷わずに扉をグイと押して、用心に剣を突き出した。先の部屋には敵はいないようだ。

⇩164へ

112

思い切って飛び下りた。ヒラリと着地すると、目の前に宝箱があった。
「どうやら正解のようだな、おっ」
宝箱のフタが自分から開き、開けようとしていたぼくを驚かせた。中には夜を固まらせて作ったようなムーンパールがあった(**ムーンパールを入手**)。いったい、どんな力を秘めているのだろう。
ふと見ると宝箱の後ろの床が青く光っている。魔法陣だ。この上に乗ると、強制的に連れていかれる部屋。そこには紋章があるに違いない。そして、そこを守る者も……。

●準備OK。魔法陣に乗る……⇩475へ
●魔法陣には乗らない…………⇩243へ

113

「悪霊退散！」
ムーンパールが淡い光を放った。しかし何も起こらない。やはりマジカルミラーかな。

⇩410へ

114

隣の部屋はガランとした広い部屋だ。部屋の端には叩き壊された楽器が転がっている。なんとも空しい光景だ。美しい音楽や芸術を悪鬼たちは嫌っているのだ。辺りを見回すと右隅に上に上る螺旋階段があった。

●急いで階段に駆け寄る……⇩379へ

●もう少し部屋のようすを探る⇩191へ

115

爆弾が爆発した。しかし、石づみの壁はびくともしなかった。しかたない、先へ進もう。

（爆弾を1個消費）⇩203へ

116

またも木のトンネルがある。これで2つ目だ。

●入って進む…………⇩195へ　●入らずに進む…………⇩454へ

117

「いや、モンスターが襲ってくる前に外に出よう」
そう言うぼくの手を振りきって彼女は階段に膝をついた。
「でも、日の光が眩しすぎて……」
そうだろうか？　他の少女たちは手のひらに乗るくらいのクリスタルに封印されているのだ。なぜこの娘だけは元の姿のままなんだ。もしかしたら罠だろうか。今、目の前に疲れて座っている少女の正体を確かめる手段はないんだろうか？

●マジカルミラーを使う……⇩275へ　●ムーンパールを使う……⇩113へ

118

また半端な階段のあるフロアだ。やっぱりドクロがころがっている。小さなモンスターもたまに見えるけど、いちいち追い掛けるのもめんどくさい。どうせまたスイッチがあるはずだから、さっさと先に進もう。ほら案の定……ちゃんと2つあるじゃないか。

右と左、どっちのスイッチを押す？

●右に違いない……………⇩201へ

●左だと思う………………⇩467へ

119

部屋の中央にビムが立っていた。ビムとは身分の高い人々の家などで警備用に置いてある、侵入者撃退装置だ。頭部が回転して熱線を発する。どうも、この神殿は罠として作られた部屋が多そうだ。さっそくビムが、ぼくの侵入を感知して作動し始めた。

●一気に駆けぬける…………⇩365へ

●熱線を避けながら進む……⇩14へ

120

何世紀も続いた平和な時代。その間、この地下道は一度も使われなかったのだろう。数百年、光も音も知らなかった空間に様々な空気がいり乱れている。古く枯れた植物の匂いが鼻につく。まとわりつくような地下道の雰囲気をかきわけていくと、前方にかすかに明かりが見えた。

⇩380へ

121

「さすが、大将、お目が高い！　いやあぁ、砂漠で会った時から只者じゃないと思ってました よ。そしたら闇の世界でも姿が変わらないんだもん。私、まいっちゃうなあ……」

果てしなく続きそうな魚の商人の話を無理にさえぎって、ぼくは逃げだすように先を急いだ（**エーテルの魔法を入手。ハートが２個減る**）。

⇩56へ

122

スイッチを動かすと、右の扉が開いた。注意深く覗きこみながら、そろそろと中に歩を進める。と、入ったとたん、後ろでバタンと音が。扉が閉じてしまった！　これはワナか？

部屋の奥に目をこらすと、別の扉がある。あれを通れということか？　だが、バリバリと弾けるような音が行く手をはばむ。モンスター・バリが現れたのだ。

●**剣で切り裂け！**……⇩383へ
●**奥の扉にダッシュ！**……⇩343へ

123

剣と盾だけは慎重に構え、あとは一目散にまっすぐ走りだす。足元から神経を逆撫でするサラサラという音が聞こえている。そのうちサラサラが、ガラガラ、ゴロゴロに変わり、床が揺れ始めた。ふと振り向くと、ぼくの走る後から床がドンドン崩れていくではないか。

走っていなければ、今頃地の底だ。無事渡り終えてホッと胸をなでおろした。しかし、後に戻れなくされてしまったのだ。先には何が待っているのだろう。

⇩36へ

124

度胸を決めてとりにいくことにする。とは言っても歩き方はおっかなびっくり、という感じだったけど。

開けてみると、中にはビンが入っていた。ビンの中身は赤い液体。薬だ！　これで体力が回復できるぞ**（ハートが6個回復）**。

と、喜んだのもつかのま、不穏な音が部屋にこだまし、足元がぐらつく。しまった、やっぱり罠だったのか？　まわりの床がくずれおち、空の宝箱が奈落に落ちていく。急いで脱出だ！

●ペガサスの靴でダッシュ……⇩458へ　●フックショットを投げる……⇩298へ

125

「よし、そのカンテラ買った！」

ぼくはカンテラを買うことにした。

「さすが、お兄さん、お目が高い！」

カンテラを受け取り、代償としてのハートを交換した。
「いやあ、商売始めて、お兄さんが最初のお客ですよ」
その言葉にぼくは頭をおさえた。このカンテラ使えるんだろうか。
「おや、頭痛ですか。頭痛薬もありますぜ」
ぼくは、いらないと手を振って答え、その場を立ち去った。
(カンテラを入手。ハートが1個減る)

⇩ 439へ

126

グラリとガノンの炎に包まれた巨体がゆらぐ。既に冥府に飛んだはずのガノンの意志がまだ骸を動かしているのか。
ぼくは弓に銀の矢を番った。
「魔盗賊ガノン、ガノンドルフよ。闇の世界と共に永劫の果てに消えよ……」
指から弦が離れる。弦から矢が離れる。
銀の矢は銀の線を描き、猛り狂う炎の中に蠢くガノンの喉元に突き立ち、まばゆい光を放った。
……それが最後だった。光は総てを白く塗り潰し、ぼくの視界から炎もガノンも消し去ったのだ。

「終わった……」
ガノンドルフの野望と共に、ぼくの初めての戦いに今、幕が降りようとしていた。

●JかPどちらかにチェックがあれば……⇩482へ

●JとP両方チェックがなければ……⇩425へ

127

椅子の下をくぐって抜け道に入っていった。城の壁と壁の間に通路が作ってある。アグニムが勝手に工事して作ったに違いない。この通路はどこに通じているのだろう。横になって進むしかないような狭い通路だ。と、壁の一部に光が漏れている場所がある。爆弾を使えば簡単に崩せそうだ（**爆弾を使う場合は、爆弾1個消費**）。

●**爆弾を使う**……⇩304へ

●**爆弾は使わない**……⇩259へ

128

タイノンが飛び出してきた壁の隅に宝箱があった。宝箱のフタは開いていた。中にはカギが入っていた。何のカギか知らないが、とりあえずポケットに入れた（**Mにチェック**）。先に進む扉は1つしかない。

⇩162へ

129

剣を振り回してぼくは小さな目玉の中に躍り込んでいった。目玉は妙に弾力があって切りにくい。そして、目玉どもの表面についた粘液は酸を含んでいるらしい、皮膚につくたびに熱くただれていく**（ハートを3個消費）**。

しかし、なんとか目玉をすべて切り伏せた。残るは大きな目玉だけだ。

⇩190へ

130

外から見るかぎり、モチーフのセンスを除いてはべつにおかしいところはないみたいだ。手触りもふつうの石みたいだし。叩いても変な音がするわけでも……いや、そんなことはない。中がムクならこんなには響かないぞ。中になにか入っているのかも知れない。ためしに剣で殴ってみた。すると、表面の石がかけて、中に歯車が見える！　すると、やはりこの像がスイッチなのか？　さて、どうすれば動くんだろう？

●**Fにチェックがあれば……⇩66へ**　●**Fにチェックがなければ……⇩385へ**

131

ひどく荒れた石畳を踏みしめて、ぼくは歩いていく。屋根のぬけた家、崩れ去った壁、てんで勝手にのびた草。おやっ、ボサボサの生け垣の向こうに人影だ。ぼくは、剣を握りしめた。敵だろうか。

●通りすぎる……………⇩82へ　●会ってみよう……………⇩441へ

132

マジックハンマーがなくてもマスターソードがある。渾身の力を込めて、剣を叩きつけるが、バメットの甲羅は異常に硬い。ジーンとしびれた腕で、今度は弓を使う。ブスブスと矢が甲羅に突き刺さりはするものの、バメットはいっこうにひるまない。逃げ回りながら、次の攻撃を考えるうちに、バメットはガジガジと足にかみつく。だめだ。倒せる武器がない。

「イテーッ！」

爪先にかじりついたバメットをなんとか蹴り飛ばし、奥の部屋へと転がり込んだ。

(ハートを1個消費)　⇩314へ

133

「おお、これは我が師父の筆跡。私、こう見えても勇者援助道場の門弟なのです。あなたが師父に認められた方なら、この辞書はタダでお譲りしましょう。もっとも、勇者じゃなくとも、こんな御時勢に、神殿に行くなんて方なら……。ま、よろしい。幸運を祈ります」
行商人はわけの分からないことを早口でまくしたてると行ってしまった。ま、辞書がタダで手に入ったからいいか。神殿の前までたどりつくと、そこには見たこともないような文字の書かれた石盤があった。

⇩90へ

134

どうにか通り抜けられそうな穴が開いた。四つんばいになって穴をくぐり、隣の小部屋に移った。この部屋にも上に上る階段があった。階段には気持ちの悪い虫の死骸がビッシリこびりついていた。が、そんなものでひるんではいられない。意を決して階段を上っていった。

⇩276へ

135

1歩中に入ると、足元が砂になっている。床はない。そのまま砂漠の砂だ。例によって背後の扉が閉まった。他に出口はない。どうやら、ここが神殿の最深部らしい。油断なく

135●砂面に３ヶ所くぼみができ、中から巨大なムカデのような化け物・ラモネーラが３体飛び出してきた！

周りを見回す。頑丈そうな石づくりの壁が広い砂地を囲んでいる。と、砂面に3ヶ所くぼみができ、中から巨大なムカデのような化け物が3体飛び出してきた。

「ラモネーラ……」

それは力の神が戦ったという伝説の怪物。3体は、ぼくを威嚇するように長い胴体を持ち上げた……。

●爆弾を持っている……………⇩330へ　●爆弾を持っていない…………⇩206へ

136

壁に爆弾を置き、素早く部屋の隅へさがり盾の陰に体を隠す。爆発音が部屋中を震わせた。

爆発の後にはポッカリと大きな穴が開いている。そして、穴の向こう側から優しい光があふれだした。あれは妖精の輝きだ。穴をくぐり妖精の泉の前で膝をついた。

「勇者よ、旅の疲れを癒しましょう。少しの間、目を閉じて……」

目を閉じたぼくでも、傷がみるみるうちに治っていくのがわかる**（ハートが全部回復）**。

「さあ、勇者よ。この迷宮の主はすぐそこです」

ぼくは元の部屋に戻ると、扉を開いた。

⇩381へ

137

ジークロックの背後で尻尾らしいものがうごめく。いきなり近づくのは危険だ。爆弾をなげつけてやる。だがぼくは奴の力をみくびっていたのかも知れない。爆弾をなげるより先に、奴の尻尾が伸びてふっ飛ばされた。こんなに遠くまで届くとは！　手から爆弾が落ち、床で炸裂する。やはりあの尻尾の死角に潜りこむしかないのか！

（ハートを2個消費。爆弾を1個消費）

●ハンマーだ！……………⇩223へ　**●剣を叩きつけろ！……………⇩401へ**

138

この辺りが沼の反対側にあたるようだ。その中を誰かが歩いてくる。強い雨で視界がきかないので誰かはわからないが、どうもスキップしているようだ。敵ではなさそうだがあんまり会いたくないような……。

「おやぁ～大将、お久しぶり！」

近付いたそいつは魚の頭をしていた。どこかで会っただろうか？

「お忘れですか、大将。ほうら砂漠で、古代文字の辞書を売っていたあの商人ですよ。いやぁ、商売してたらこんなとこまで来ちまいましてねえ。おかげでこんな姿ですよ」

と、えらをパタパタと動かした。

「あ、そうそう、いい売りもんが入りましたで。ほうらエーテルの魔法ですよ。ハート2個と交換でどうですか、ねえ、大将」
ぼくに話す暇も与えず、商人はそうまくしたてた。

●欲しかったので買う……⇩121へ
●まにあっているさ……⇩56へ

139

部屋の床は真新しい銅版のように、きれいに磨かれている。次の部屋へ向かおうとしたが、扉の前には四角い穴が開いている。床をよく見ると、星形のスイッチがあるのに気がついた。踏めば何か起こるのだろうか。

●踏む……⇩336へ
●踏まない……⇩435へ

140

おやっ、道が村の外へ続いている。立て看板には「この先、鍛冶屋」とあるぞ。面白そうだ、行ってみよう。もしかしたらマスターソードを鍛え直してくれるかもしれない。
鍛冶屋の家に近付くにつれて、高く澄んだ金鎚の音が規則正しく響いてくる。そういえばむかし、おじさんに連れていってもらったことがあったような気がする。
「すみません、ぼくは……」

勢い良く扉を開けた。熱気がムンと室内から吹き出す。
「おっ、なんだボーズ、何の用だ？　ほう、いい剣をもってるじゃないか。そいつは誰が鍛えたんだい。ちっと見せてくれんか。」
ぼくは剣を渡すと、この剣を手に入れたあらましを教えた。
「ふーん、こいつが伝説の剣か。長生きはするもんだな。しかし、ちょいとガタがきてるかな。相棒がいれば鍛え直してやれるんだがなあ」
そこで彼はため息をついた。聞けば鍛冶屋の相棒は、ある日行方不明になったきり戻ってこないというのだ。ぼくは、その相棒にあったら、かならず連れて帰ると約束して鍛冶屋の家を出た。彼は親切に扉の前まで送って、こう言った。
「相棒が戻れば、１番で剣を鍛え直してやるぜ」

⇩448へ

141

革のブーツが濡れた草を踏み、細かな雨の粒が体中に跳ねる。横なぐりの風雨からカンテラをかばいながら城への近道を急いだ。
城は家からすぐ。目と鼻の距離だが、森を抜けるさらに近道を選んだ。辺りは真っ暗だが、城までなら目をつぶってでも行ける。問題は草や木に触れるたび、大粒の水滴が降りかかることだ。

びしょぬれの服やブーツの不快な肌触りが、不安な気持ちを逆なでする。時々おじさんたちの酒のみ話に交じっていた怖い話を思い出す。
新しく城に来た司祭様が、夜な夜な不気味な儀式を行っているという噂を誰かが恐ろしげに話す。王様のご病気は、そのせいだとまで言い出す。何年か前の災いを治めた偉い人を悪く言うなと喧嘩になりかけると、おじさんが話を終わらせていた……。
森のはずれの木陰で立ち止まった。目の前に巨大なハイラル城がそそり立っている。真夜中なのに、幾つもの窓から光が漏れている。いつも、こうなのだろうか。
ともかく、城へ入らなければ始まらない。しかし、門には、無表情な鉄兜をかぶり、まがまがしく光る剣を抜いた兵士が守っている。さて、どうしよう。

●戦う……………⇩287へ
●もう少し様子を見てみる………⇩68へ

142

スタルフォンには爆弾を使うのは、前の戦いで経験済みだ。案の定スタルフォンは粉々に吹き飛んだ。それと同時に、氷の壁に亀裂が走った。やばい！　急いで戻ろう。

⇩395へ

143

豚顔した兵士らしい彫像の隊列を1個1個、揺すったりもしながら調べることにした。それにしても、つくりの悪い彫像ばかりだ。職人が手を抜いたとしか思えない。などといらない事を考えてしまうくらい面倒くさいんだが、そうするうち1個がガクンと動いた。台座にきちんと固定されてなかったらしい。やっぱり手抜きだ。像を抱えて、さっきのスイッチの上にドスンと下ろす。

しかし、これをあのスイッチの上に乗せればきっとうまくいくぞ。

すると扉が開き……それっきりだ。開いたまんま。よし、うまくいったぞ。先に進もう。

⇩338へ

144

ここがカカリコ村の中央にあたるようだ。大きな銅製の風見鶏がある。

●オカリナを吹いてみる……⇩477へ
●オカリナがない、または吹かない……⇩407へ

145

奥のスイッチを押した。しかし反応がない、ダミーだ！　ぐるぐるバーの高熱体が体をかすめた**（ハートを1個消費）**。他のスイッチを試すしかないわけだ。

●手前のスイッチ……⇩245へ
●右のスイッチ……⇩26へ
●左のスイッチ……⇩400へ

146

落ちたところは、広くはないが奥行きがある場所だった。いや、これは奥行きなんてのじゃなく、地下道に出たということらしい。となると、どこかに通じているんだろう。歩いていくと、そのうち行き止まりになった。右側に扉がある。素直にここに入るべきだろうか。しかし、正面の壁もそんなに分厚いようには見えない。ためしに耳をつけて、たたいてみる。案の定、壁のむこうも空洞みたいだ。爆弾でふっとばせば、穴があくかも。

●素直に右の扉を開ける……⇩437へ
●爆弾を使う……⇩173へ

147

前後にレーザー光線が走った。目の部分からレーザー光線が発射されたのだ。不定期に撃たれるレーザーをかいくぐるのは容易ではない。2つ目までは通り抜けたが、3つ目の

タイミングがあわず、横っ腹をレーザーが掠めた。全身に寒気が走った。そこから先はヤケだ。一目散に扉の前まで走った。直撃こそ避けたが、あちこちが痛んでいる。

（ハートを2個消費）

⇩41へ

148

「おおお、ね～あん～、で～るたぁぁぁぁる」

占い師は呪文を唱えはじめた。占い師の前の水晶玉がランプの光をあび、妖しい輝きをはなつ。ビクン、占い師の体が一瞬震えたかと思うと、かすれた声が部屋に響いた。

「おおお、見えるぞ見える、あれは大ナマズじゃ、ほ～ほほほほ。ナマズがクエイクを持っておるぞぉぉぉ」

さて、クエイクとはいったいなんだ？　肩で息をしている占い師に、代償のハートを1個渡すと、ぼくは外に出た。今の情報もいつかは役にたつんだろう。

「勇者の進む道に祝福あれ」

後からかけられた言葉に、ぼくは軽く手をあげた。

⇩357へ

149

軽く泥水を跳ねあげてぼくは先を急ぐ。ぼくの腕に激痛が走った**（ハートを1個消費）**。キューネの攻撃だ。強い雨音で、奴のはばたく音が聞こえなかったのだ。ぼくはキューネの第2撃を剣で退けた。

⇩**211へ**

150

水門のスイッチが見つかった。なにしろちゃんと「水門」と書いてあるからまちがいないだろう。ただ困ったことに、左右に2ついているのだ、これが。さて、どっちのスイッチだろう？

●**右を引く**……………⇩**432へ**
●**左を引いてみる**……………⇩**467へ**

151

カーテンをめくって、階段を下りていくと小部屋に出た。1歩、足を踏み入れると、目に見えないほど小さな虫がサーッと壁のすき間に散っていくのを感じた。生きた埃がいるようでいい気分はしない。

が、部屋の奥に宝箱を発見した。すき間に剣のツカを入れ、こじ開けると簡単に開いた。中には小さなカギが1つ入っていた。期待ほどのお宝ではなかったが、別に宝探しに

来たわけじゃない。ポケットにカギを入れ、辺りを見回した。これ以上は進めないような
ので入り口にもどり、左の扉の前に立った。

⇩39へ

152

このままじゃどこにもいきようがない。しかし、そうか、世界が繋がってるんだから、
物は試し。こうなりゃ、一旦光の世界に戻ってみよう。はっきり言って半ばヤケ。でも何
もしないよりはましだろう。マジックミラーを取り出すと……。
しかし、世のなかそんなにうまくいくはずがなかった。戻ったはずが、やっぱり湖の真
ん中だ。そうか、湖の裏はやっぱり湖か。しかもこんどは岩さえない。ああっ、渦に巻き
込まれてしまった！　これじゃ泳いだほうがましだったぞぉぉ……。

⇩86へ

153

突然、後ろからドンと押された。振り返ると、そこにはクリスタルスイッチによく似た
ポーンという化け物がいた。人の頭より大きなクリスタルの固まりが、再び体当たりして
きた。
「うわっ、あ、ああああぁぁぁ」体勢を崩して穴から落ちてしまった。
ビタン。下の階の床に顔面から落ちた**（ハートを1個消費）**。

⇩16へ

154

マスターソードでクリスタルスイッチに触れた。ガチャッという音と共に青い柱は床に引っ込み、かわりに赤い柱が左の扉の前をふさいだ。盾で急襲に用心しながら、右の扉を押し開けた。

「うわっ！」「うわっ！」

始めの声は、ぼくの声。中に太った狐のような化け物コッピがボーッと立っていたのだ。あとの声は、そいつが真似をしたのだ。身構えると、そいつも息を吸い込んで身構えた。右に動くと、そいつも右に動き、前に踏みだすと、間合いを狭めてくる。特に何も仕掛けてこないが、すきもない。どうやって戦おう。

●近づかずに弓で攻撃……⇩27へ

●剣で勝負だ……⇩422へ

155

剣で手がかりが見つかったんだ、繰り返し叩けばどうにかなるかも知れない。そう思って剣を握り締め、たてつづけに殴りつけてみた。しかし、やっぱり表面がかけただけで、なにも起こらない。考えてみりゃ、これで動くようなら最初の1発で動きそうなものだよなあ。別の方法を考えることにする。

●Fにチェックがあれば……⇩66へ

●Fにチェックがなければ……⇩155へ

156●ゼルダ姫がひざまずくと、周りを６人の娘が囲んだ。円の中に風の渦ができた。ぼくは渦の中に飛び込んだ。

156

ピラミッド……。ここから、また長い距離を追わなければならない。いかにペガサスの靴とはいえ、このままではガノンを逃がしてしまう。
いや、走れるだけ走ってみよう。扉に向かって駆け出すと、ゼルダ姫が呼び止めた。
「走っていったのでは、間に合いません。……私たちの力でピラミッドまで転送します」
ゼルダ姫がひざまずくと、周りを6人の娘が囲んだ。円の中に風の渦ができた。
「今です。この中に」
渦の中に飛び込んだ。次の瞬間、遥か下に亀岩の神殿が見えた。宙を飛んでいる。これならピラミッドはすぐだ。だが、ゼルダ姫に負担をかけたようだ。ぼくを転送させたゼルダ姫の顔色がさえなかったのが気になる。……悩んでいてもしかたがない。最大の特効薬はガノンを倒すことだ**（Pにチェック）**。

⇩462へ

157

家に入ると、占い師がぼくの方をじろりとにらんで言った。
「ふむ、おぬし、ヘブラ山に向かっておるか。」そしてじろじろとひとの顔を見る。うーん、変な気分だが、あたるのは確かみたいだな。
「よかろう。最初だけはサービスということでただで見てやろう。ふむ、おぬしが向かう

山にはエーテルの魔法のメダルがあるらしいな。きっと頼ることになる。さがしてみるがよかろう」（Bにチェック）

⇩234へ

158

カカリコ村は花の季節を迎えているようだ。よく手入れされた庭に、赤や黄色の花が咲き乱れている。もし、アグニムさえいなければ、ぼくもおじさんと一緒に庭の花を眺めていたかも知れない。そして、ふとゼルダ姫の顔が浮かんだ。このきれいな花が似合うだろうな。

振り向くと、老婆が立っていた。

「ぼうや、花が好きなのかな」

「すいません。勝手に庭に入りこんじゃって」

ぼくは素直に謝った。老婆はにこやかに笑って、手を振った。

「坊やが悪い子じゃないってのは、すぐにわかったよ。だてに70年も生きちゃいないさ。どうだい、お腹がすいているなら、ちょうどパイが焼けたところだよ。あたしにもねえ、あんたと同じくらいの孫がいるんだよ。よく昔話を聞かせたもんさ。災いの池の大ナマズの話とかねえ。それが今年になって城の兵士にとられてねえ……」

その話にぼくはどきりとした。もしかしたらぼくが倒した兵士の中に……。

「すいません、先を急ぐんです」
ぼくは半ば逃げるように老婆の家を後にした。

⇩233へ

159

壁を爆破し、穴をくぐって入ると部屋になっている。こんどは爆破しなくても次にすすめそうだ。この部屋にあるものは……おっと、宝箱がある。そっと近寄って開けてみる。中にあったのは、杖だ。赤い玉がついている。ファイアロッド？　どうやら魔法のアイテムらしいな。ためしに部屋の隅に向けて振ってみる。たいした期待はしてなかったから、杖から炎の玉が飛び出したときはちょっとおどろいた。こ、これは立派に武器になるぞ。しっかりいただいて、次の部屋に進もう（**ファイアロッドを入手**）。

⇩20へ

160

左の扉は、少し押しただけで簡単に開いた。壁にかけられた燭台が部屋を明るく照らしている。部屋の奥には宝箱が置いてある。ぼくは迷わず部屋の奥へと向かった。
一瞬、影が歪んだような気がした。いや蠟燭のゆれる炎のせいだろう。宝箱には爆弾が入っていた（**爆弾を5個入手**）。
その時、足に痛みを覚えた。なんだ！　あわてて飛び退いたぼくの目に、緑色のスライ

ム・ゾルが映った。そうか、影が歪んだのはこいつのせいか！　戦闘はあっけなく終わった。しかし、足に傷をおってしまったようだ**（ハートを1個消費）**。
元の部屋へ戻って、奥の扉へと向かうことにした。

⇩232へ

161

宝箱はいいがカギを持っていない。何とかならないかと宝箱を持ち上げてみた。軽い。中はからっぽのようだ。入っていたとしても、たいしたものではないだろう。開かない宝箱を気にしていても仕方がない。キッパリとあきらめて、次の部屋に向かうことにした。

⇩276へ

162

扉を出ると通路だ。かなり長い間使われていないらしく、ほとんど壊れかけている。剣で床を叩いてみる。特に崩れる様子はない。壁を叩くと、右も左もかなり薄いようで、爆弾で壊せそうだ。

●**右の壁を爆弾で壊す**……⇩375へ
●**左の壁を爆弾で壊す**……⇩323へ
●**爆弾を使わず、先に進む**……⇩466へ

163

胸にかかえていたカンテラを、そっと抜け穴に下ろした。光は底に届かない。かなり深そうだ。

「飛び降りていたら足をくじくか、カンテラを割るかしていたな……」

カンテラを左右に振ると、コケに覆われてはいるが頑丈そうなハシゴを見つけることができた。カンテラを左手に持ちかえ、ぼくは慎重に抜け穴を下りていく。しばらくすると爪先が冷たい石畳に当たった。

目の前に、意外と広い石造りの通路が広がっていた。

⇩249へ

164

コツン、コツン、氷の階段は終わりをつげ、石の階段に戻った。よし、これで動きやすい。革のブーツで2、3度石段を踏みしめてから、階段を下りていく。突き当たった所が、下の部屋への入り口だ。こんどは扉はない。すばやく、部屋の隅々まで目を走らせて敵を確認する。敵の姿はない、奥に扉、そして左側の壁は爆弾で崩せそうだ。

●爆弾を使って壁を壊す……⇩136へ

●奥の扉をあけて進む（爆弾がない場合）……⇩381へ

165

洞窟に入ってみるが、どうやらどこに繋がっているでもないらしい。あきらめてもときた道を引きかえそうとするが、ふと気が付けば岩盤に何か刻んであるぞ。
「これは秘密だが、ここに印す。水のほこらのスイッチは右・右・左・右・左・左だ。ここで知ったとは誰にも言うな。」
だったら書かなきゃ良さそうなものだが、なにか事情があるのか？　水のほこらってのがどこだか知らないが、知っておいて損はなさそうだ。覚えておこう。

⇩106へ

166

おや、前の方から声が聞こえてくるぞ。
「……へい、いらっしゃい、さあカンテラの大安売りだよ。ここに取り出したカンテラはそんじょそこらの物とは、ちょい～と違う……」
頭が痛い。カンテラの叩き売りだ。ここはガノンが力で支配し、モンスター蠢く闇の世界だってのに、なんでまた……。おまけに客は誰もいない。
「おっと、そこのお兄さん。カンテラどうだい！　丈夫で落としても壊れない。ハート1個と交換でどうでい」と、落としたカンテラは、地面で派手な音を立てて砕け散った。

●買ってみるか……………⇩125へ
●無視する………………………⇩439へ

167

最後のテグアモスの像が崩れた後に、淡く光る何かがあった。細かな砂の中に、金色の鎖が覗いている。引っ張りだすと、それはペンダントだった。

「これが勇気の紋章……」

ペンダントヘッドに、それらしいレリーフがある。これで最初の課題はクリアしたというわけだ **（ハートが1個増える。ハートを全部回復）**。

⇩**350へ**

168

シュアイズの屍の中から青いクリスタルが転がり落ちた。これで5個。

クリスタルが、優しく輝きながら空中に浮かんだ。そして、金色の髪の少女が空に映しだされた。

「ありがとう。あなたの来るのをずうっと待っていました」

ぼくはそれに答えられず、空中のきれいな少女をただ見つめているだけだった。

「お城にできた光と闇をつなぐ通路が完全に開くまでもうあまり時間がありません。ガノンを倒せば、この闇の世界は消え、トライフォースは新たな持ち主が現れるのを待っているはずです。私が今あなたにできることはこのくらいです」その言葉と同時に、傷ついたぼくの体に再び力が戻るのがわかった **（ハートが1個増える。ハートを全部回復）**。

「勇者よ、悪魔の沼に行きなさい。そうすれば、ゼルダ姫の待つ亀岩まではすぐです。勇者の道がトライフォースへと導かれることを祈っています。」
そういうと少女の姿はかき消えていく。
「かならずガノンを倒します」
ぼくに言えた言葉はそれだけだった。彼女に聞こえただろうか。

⇩44へ

169

階段がどんどん細くなり、奇妙にくねっている。人1人しか通れない、容易には逃げだせないような造り。間違いない。この先にゼルダ姫がいる。階段を下りきり、やや広い空間に出た。鉄格子の奥に……。
「危ない！　後ろに兵士が！」
牢の中から、頭の中で響いていた声と同じ声が叫んだ。

⇩374へ

170

「わかったよ、さあ、行くよ」
マジカルミラーをかざした。目眩と体の浮揚感が襲う。その一瞬あとで僕らは光の世界の、カカリコ村に立っていた。

「ははは、やったぜ、あばよ」
「おい、まてよ」
「俺が鍛冶屋だって、おいら火消しでい」
うーん、火事屋ってか。馬鹿言ってんじゃねえよ！

⇩306へ

171

ゴゴゴゴ。狭い廊下全体を震わせて、石のずれるきしんだ音がした。しかし、前方の扉には何の変化も見られない。では、どこが……。
ヒャーッという奇妙な鳴き声と共に、頭上から巨大な口が降ってきた。あわてて避けたが、肩口をするどい牙がかすった。痛みが走る**（ハートを1個消費）**。
地べたにはいつくばった巨大な口には目も鼻もなく、口の周りにたてがみのように生えた太い触手が器用にうごめいている。オクタロットという奴だ。
剣を抜いてオクタロットをたたき切った。嫌な音を立てて、壁にぶち当たったオクタロットは右の石畳の上に落ちた。

⇩421へ

172

ガモースの最後の一撃をくらいながらもなんとか持ちこたえ、その骸から剣をぬく。今度もこいつが少女を捕らえていたはずだ。しかし今度はクリスタルが出てこない。見つかったのは白い絹のカプセルだけ。まてよ？　ガモースは蛾の化け物だったよな。すると？ものはためし、剣でカプセルを慎重に切り裂いていく。思ったとおり、中には3人目の少女がクリスタルごととじこめられていた。カプセルと思ったものは蛾の繭だったんだ。

少女はお礼の言葉につづいて、ガノンと「大いなる災い」について語ってくれた。

「黄金の力で封印をとき、世界を闇につつむ者が現れる。だがそれには選ばれし賢者の娘7人のいけにえが必要。それを阻止できるのは騎士の血をうけつぐ勇者ただ1人」

という予言があるそうだ。そして前の2人がしたように、ぼくに力を与えてくれた。のこるは4人。まだ先は長いぞ（**ハートが1個増える。ハートを全部回復**）。

⇩**255へ**

173

点火！　にぶい爆発音と同時にもうもうと白煙がたちこめ、岩くずが壁や天井に跳ね返って降ってくる（**爆弾を1個消費**）。それをはたき落とし、煙がおさまってみると、やっぱり思ったとおり壁に穴があき、その奥に道がつながっているじゃないか。瓦礫をのりこえて先に進もう。

進んでいくと、奥のほうに何か置いてある。どうやら宝箱らしい。ゆっくり近づいてみると、たしかにそうだ。周りには何もいない。ふたを開けてみると、中には見慣れた黒い球が5個。爆弾5個入りの宝箱だ。ちょうどさっき1個使っちゃったことだし、ここは遠慮なくもらっていくことにする**（爆弾5個入手）**。道はまだ続いているな。

⇩179へ

174

ガランとした部屋に出た。この部屋は、妙に掃除が行きとどいていて、チリ一つない。汚れ、壊され放題の亀岩の迷宮の中で、このきれいさはかえって不気味に感じる。殺風景な部屋の中央に、またしても宝箱があった。

●Mにチェックがあれば……⇩359へ
●Mにチェックがなければ……⇩161へ

175

塔入り口前の空間に、マスターソードを一閃させる。何もないはずの空間に衝撃が走り、火花が飛び散る。反動で剣は後ろに弾かれた。同時にぼくも後ろの壁に飛ばされ、つよく背中を打った**（ハートを1個消費）**。剣が駄目なら、武器はすべて無駄だ。ならば、ペガサスの靴で突破しよう。かかとを3度踏み鳴らすと、次の瞬間ぼくは結界の中にいた。結界の周期よりペガサスの靴の速度が勝ったのだ。

⇩266へ

176

「どうやって開けたらいいんだろう」
カギのような物はもっていない。しばらく開ける努力をしてみたが無駄なようだ。しかたない。時は迫っているのだ。奥の部屋へと向かおう。

⇩174へ

177

次の部屋に踏み込むと、いきなり何かにとびかかられた。モンスターか、しまった！　奇襲をくらってダメージをうけてしまった。剣をぬいて応戦するが、機先を制された不利があってなかなか倒せない。ええい、こんなザコに！**（ハートを1個消費）**

⇩246へ

178

罠のような気がしたので、様子をみることにした。すると不穏な音が部屋にこだまし、足元がぐらつく。見る間に箱のまわりの床が崩れていき、やがて部屋の真ん中がひとつの大穴と化した。やはりこういうことだったのか。行かなくてよかったかも知れない。しかし、なんだか惜しいことをしたような気もする。

⇩277へ

179

しばらく行くと階段だった。しかも上りの。
上っていくが、地下からの上りってことはもしかして……と思ったとたん視界が明るくなった。やっぱりそうだ、外に出てしまったんだ。しかし引き返すのも気がひける。このあたりをしばらく探索することにする。
すこし歩くと、ふらふら歩いているきこりに出会った。闇の世界に人間のきこりだって？追いついて事情をきくと、きこりは話してくれた。
「おら迷いの森のきこりだが、森を歩いてたらへんな魔法陣をふんづけてしまっただよ。そしたらこんな不気味な世界に来てしまっただ。帰る方法をしらんだか？　知ってたらつれて帰ってくんろ」
やっぱり光の世界の人だったか。

●つれて帰る……………⇩352へ
●断る……………………⇩60へ

180

行ってみると、酒場でもあてもの屋でもなかった。店だ。はいってみると、やっぱり動物顔の店主がにこにこしてカウンターに座っている。
「いらっしゃい！　おや見慣れない顔だね。よし、好きなものをひとつだけ売ってやろう。

ひとつだけね。この中から選んでいいよ」

パワーグローブ　ハート2個
カンテラ　ハート1個
水掻き　ハート3個

しかし1個だけとはせこい店だ。それとも警戒されてんのかな。

(買いたい人は1個だけ買えるので、チェックして次へ)

⇩72へ

181

例によって水かさが増えて……増えて……ちょっと増えすぎだぞ！　これはしまったと思う間もなく、べつの小部屋に流し込まれる。はばたきの音がするところをみると、ここは妖精の部屋か？　水かさはまだ増えてくる。よし、また流されるまえに妖精に頼んで、ハートを回復してもらおう。しかし2個回復したところで、水かさが部屋いっぱいになってしまった。妖精は空を飛んで逃げだし、ぼくはまたどこかへ流されてしまった。

(ハートが2個回復)

⇩467へ

182

通路の先は右へと曲がっている。

●**このまま進む**……………⇩**297へ**

●**戻ったほうがよい気がする**…⇩**205へ**

183

鍛えあげたマスターソードの切れ味を見せてやる！

飛んで体当たり攻撃をしかけてくる小さな目玉をすべて切り落としたぼくは、正面の巨大な目玉を見据えた。

どうやらやつは動けないようだ。

⇩**190へ**

184

ドシン。ぶざまにお尻から落ちた。サルキッキそっくりな真っ赤なお尻になっているんだろうなぁ……。かっこわりぃ（**ハートを1個消費**）。さて、助かったのはいいが、ここは神殿の中のどのあたりになるんだろう。ふと見ると上りの階段が見えた。

⇩**406へ**

185

体を左向きに半身にひねり光線をかわすと、体を戻す反動で剣を振り出す。甲高い悲鳴と共にウィズローブは床に崩れ落ちた。しかし、剣で突くと、それは魔術師のローブだけだった。まあ、いい。手応えはあったんだ。

⇩193へ

186

やはり明かりは扉の鍵穴から漏れたものだ。間一髪。レーザーに射たれる前に、扉をくぐり抜けた。転がった時に、床にクリスタルスイッチの柱が引っ込んでいるのが見えた。前にクリスタルスイッチを作動させていなければ、今頃……。自分の判断と幸運の神に感謝しながら、埃を払って立ち上がった。

⇩81へ

187

また水路を何度も泳いで、水のほこらを後にする。スイッチに悩まされたのは来るときだけで、帰りはまだ水が満ちている。この水、いつか引くんだろうか。
さて、次はどこの建物にいけばいいんだ？　と思うと、助言はこうだった。
「建物ではない。次はドクロの森。森の地下迷路なのだ。気を付けろ。」
位置はピラミッドの西。また戻らなくちゃならないな。

⇩438へ

188

酒場の中はガランとしている。アグニムがこの国に現れる以前は、夜通しにぎやかだったに違いない。
ポツンと1人老人が座っていた。どうやら居眠りをしているようだ。
「わしに何か用かね」
居眠りをしていた老人が、ぼくの気配に目を覚ました。

●オカリナを持っている……⇩327へ　●オカリナを持っていない……⇩107へ

189

入るのがたいへんだった分、出るのは楽だった。まあ、そんなものだろう。出るとサハスラーラの声がまた聞こえる。「次に向かうべきは水のほこら。ピラミッドから見て南の方角じゃ。ほこらは水を渡って進まねばならん」南の方角か。すこし戻る必要があるみたいだ。

⇩59へ

190

2メートルの大目玉、ゲルドーガ本体との戦いだ。ゲルドーガは未だに、粘液の中から動こうとしない。何を企んでるのだ。ものを言わないだけに、とても不気味だ。ぼくは右

に盾を構え様子をうかがった。パシッ！　部屋のどろりと淀んだ空気が急にぴりぴりと乾燥しだした。そしてゲルドーガが雷撃を放った。金属の盾は瞬間的に加熱され、ぼくは思わず放り出した（ハートを3個消費）。どうやらやつは動けないかわりに雷撃を使うようだ。

●弓矢を目玉に突き立てる……⇩342へ

●一気に剣でかたをつける……⇩299へ

191

床がタイル張りになっているのに気づいた。同時に、タイルがこちらに飛んできた。盾と剣で防ぎながら階段に向かった。しつこい攻撃を耐えて、階段にたどりついた。腕がしびれていたが、この程度は仕方がない（**ハートを1個消費**）。

ゆっくりと階段を使って上に向かった。⇩334へ

192

きれいとは言い兼ねる水の中を泳いでいくと、湖の水面に渦まいているところがあって、だんだん近づいてるようだ。水掻きがあるから巻き込まれまいとすれば簡単に逃げきれるが、渦は大抵どこかに通じているはずだ。

●しかし、今は迷宮につくことだけを考えるのだ……⇩98へ

●何でもためしてみるべきだ。あえて入るぞ……⇩213へ

193

通路のつきあたりには鉄の扉がある。扉の向こう側ではなにやら重い音が断続的にしているようだ。あまり入りたい部屋ではないのだけど、逃げるわけにはいかない。渾身の力を込めて鉄の扉を引いた。
部屋の中は真っ暗だった。重い何かを打ち出すような音は、さっきよりも大きく不気味に響く。部屋を照らすものはないか？

●カンテラを持っている……⇩369へ
●カンテラを持っていない……⇩248へ

194

「確か、そんな武器があるっていう話を聞いたことがあったなぁ……」
不気味な氷の彫像、タイノンは剣や弓では倒せない。タイノンから逃げ回りながら、おじさんたちの酒のみ話に出てきた伝説の武器を思い出した。そんな便利なものがあれば、あとあとの戦いも楽になるだろうに……。体中に凍傷を作りながら、なんとか、この部屋を通り抜けた（ハートを2個消費）。

⇩128へ

195●台座から抜いた剣を、天にかざした。光が降り注ぐ。マスターソードは、ぼくを勇者と認めてくれたようだ。

195

森の中にポッカリと空間が出来ている。木立の吹き抜けに、青く晴れ上がった空が高い。
思わず日だまりの中に歩を進め、あまりにも平和な太陽の恵みの下で戦いを忘れた。
「平和だなぁ……」
安息な気分は長く続かなかった。平和の素晴らしさを体中に感じた時、この平和が危機にさらされていることを強く意識した。その時、目に強烈な光が入った。
剣の刃が日の光を映しているのだ。剣は、まるで1人の男のように、ぼくの前に立っている。導かれるように剣の前に行き、ツカに手を掛けると、頭の中で声が響いた。
「我が名はマスターソード。古の勇者が手にした退魔の剣。闇を払い、人を救わんというつもりなれば従おう……」力を込めて引き抜く。剣はスルリと台座から抜け、ぼくは剣を天にかざした。光が降り注ぐ。マスターソードは、ぼくを勇者と認めてくれたようだ。
（ハートが2個増える。ハートを全部回復）

⇩384へ

196

ぼくはタコの像の前でオカリナを吹いた。どこか寂しげな澄んだ音色が響きわたる。
しかし、何も起こりはしない。そしてあろうことか……。
「なんだ、今の笛の音は」

「あっちの方だ！」
兵士が集まってきたぞ。これはやばい！
「おっ、手配中の反乱分子だ」
「手柄首だ」
見つかった。多勢に無勢だ。剣を振り回して活路を開いて、ぼくは一目散に逃げることにした。かすり傷はおったが、なんとか逃げ切った。今度は用心しなきゃ。

（ハートを2個消費）

⇩107へ

197

初めて見る、おじさんの戦士としての顔だった。陽気で豪快で、よく笑う明るい顔の下に、おじさんは、こんな表情を持っていたのだ。
「おまえに戦ってもらわにゃならん。剣こそ戦いの基本だ。もっと、しっかり教えておくべきだったが、まったく使えんわけではないだろう。だが、まだおまえは完璧ではない。まずサハスラーラに会え。居場所は教会の神父が知っている。勇気を剣に込め、知恵で道具を使いこなし、自らの力で道を切り開け。おまえの体の奥に、底知れぬ可能性が流れているのだ……。ゼルダ姫を、ハイラルを、頼む」
それだけ言うと、おじさんの姿は霧のように薄くなり消えてしまった。言葉と意志だけ

が、そこに残り、ぼくは、それを受け継いだ。一族とは何か、それは戦っていくうちに分かるだろう。次に為すべきことは何か、ぼくの心は決まっている。

●とにかくゼルダ姫を助けださねば……⇩**324へ**

●ひとまず教会へ向かおう……⇩**120へ**

198

落ちてみると、馴染み深い羽音と輝きが飛び回っている。ここは妖精の部屋らしい。ちょうど疲れていたところだ、体力を回復してもらおう。妖精に頼むと、小さなステッキを振り回してくれる。みるみる戻ってくる活力がはっきりとわかる。さあ、次の部屋へ。まてよ、この部屋もまさか……いや大丈夫、ちゃんと扉があった。こんなとこで爆弾は使いたくないからな**（ハートを全部回復）**。……⇩**20へ**

199

三叉路だ。道は南北、そして東に分かれている。さ〜てどちらに行ったものか。ここは思案のしどころだな。

●北へ……⇩**274へ**　**●南へ**……⇩**42へ**

●東へ……⇩**53へ**

200

そうだ。ぼくは占い師から聞いた情報を思い出した。ヘブラ山のどこかに、エーテルの魔法が隠されているんだ。急いで山のあちこちを駆け回ると、いわくありげな石板を見つけた。辞書を取り出して、石板に書かれた文字を読む。

なんと空間が裂け、そこから1枚のメダルが飛び出してきた。稲妻のようなエーテルのマークが印されている。冷気を操れるエーテルの魔法。これは戦いに役に立ちそうだ。

強力なパワーを手に入れ、ぼくは急いで山を駆け下りた(**Dにチェック**)。　⇩**311へ**

201

適当にモンスターをあしらいながら、こけむしたかわりばえしない通路を歩くと、行き止まりになって階段が頭上に。毎度おなじみのスイッチだな、これは。きっと今回も……ほら、やっぱり2つあるぞ。

●確率からいったら右だ……⇩181へ　●ときには左のこともある……⇩388へ

202

かなり重そうな岩が乗っている。フタの部分に指先をかけ、力を込める。顔が真っ赤になり、汗が玉となって浮かぶ。が、重いフタは、ほんの少しずれただけだ。のぞきこんで

も暗くて見えない。と、中から小さな妖精が飛び出した。
妖精はクルリと目の前で回ると、ぼくの鼻の頭にキスをした。少しだけ、体が軽くなった(**ハートが1個回復**)。なんとなく納得してしまうと、ぼくは箱をあきらめて次の部屋に急ぐことにした。
⇩135へ

203

目の前の空気が突然揺らめいた。なんだ？　次の瞬間、空気の揺らめきが魔術師ウィズローブへと変わった。敵の両手が上がると、指先から三日月状の光線が放たれた。

●**剣を使う**……………⇩185へ
●**よけながら先へ進む**……………⇩31へ

204

なんとかバメットを倒して、ようやく部屋を見回す余裕ができた。よく見れば、また彫像が置いてある。もっともこんどは1つしかないし、豚顔の兵士なんかじゃないようだが……うーん、どっかで見たような顔という気もする。ほかに出口はないか探すが、まるっきり見当たらない。てことは、どっかに何かの仕掛けがあるんじゃないかという気がする。今までだって大抵そうだったからな。

●**像を調べる**……………⇩130へ
●**壁を調べる**……………⇩443へ

205

また、通路は右と前へ分かれている。さあ、どちらへ行こうか。

●右へ進もう……………⇩182へ　●前へ進もう……………⇩215へ

206

とりあえず、剣を抜き、1体目のラモネーラに切り掛かる。と、狙った敵は砂の中にもぐり、背後から新手が岩を飛ばす。なかなか敵のパターンが読めない。戦いは長時間に渡った。こちらも相当のダメージを受けたが、わずかずつ積み重ねた攻撃が、ようやく敵の動きを鈍くした。ようやく剣が冴え、ラモネーラの長い胴体は砂の上に落ち、動かなくなった。同時に、ぼくも危うく倒れそうになるほど疲れ切っていた(ハートを3個消費)。

●ハートが残っていれば……⇩83へ　●ハートが残っていなければ……⇩73へ

207

ガノンの動きは、ずいぶん鈍くなってきている。しかし、こっちのダメージも小さくはない。剣に魂を込めろ、それはおじさんの言葉だ。ぼくの魂に応えて、剣が光を帯びる。知恵と力と勇気、サハスラーラ老に試された勇者の資格。その3つが、ぼくの魂の中に息づいてる。全身全霊は、今、剣の中にある。

ぼくが、剣が、地を走り、宙を飛んだ。ガノンの頭の高さまで飛び上がり、その脳天にマスターソードを叩きこむ。時が止まった。ガノンの目は、もう見開かれたまま。すでに命はない。だが、最後の執念が、ガノンの喉から猛烈な炎を吹き出させた。間近からの爆炎、それを避ける術はない……。

●Nにチェックがあれば……⇩431へ
●Nにチェックがなければ……⇩471へ

208

どうせ他に道がないなら、落ちるまえにさっさと渡ってしまったほうがよさそうだ。ペガサスの靴を取り出して足にはく。万一のことがあっても、これのスピードなら逃げきれるかも知れない。呼吸をととのえ、橋にむかって一気にダッシュする。

と、駆け抜ける後ろから橋がばらばらと崩れ落ちていく。ぼくは必死になってスピードをあげた。

なんとかむこうの岩盤に足がついた瞬間、かかとの下で橋の最後の残骸がぼろりと欠け落ちていった。間一髪！

⇩138へ

209

アグニムの死力を尽くした最後の魔力が、凄まじい執念となって、ぼくらを押しつぶそうと迫った。マスターソードは辛うじて、その熱気と圧力を受けとめた。退魔の剣と闇の力が拮抗した。このバランスを崩すのは、自分の力のみ。剣を片手に持ちかえると、ぼくは自らの拳で光の球をぶち抜いた。拳は焼け、腕にしびれが走る。しかし、光球の進行は止まった。残る力と全体重をマスターソードに預け、体ごとアグニムの魔力を押し返す**（ハートを2個消費）**。

膨れあがるだけ膨れあがったアグニムの魔力は、その持ち主に返っていった。力を振り絞り尽くしたアグニムに、それを受けとめる力は残っていないだろう。

⇩480へ

210

出口へ向けて階段を上がっていく。階段の上から光がこぼれてくる。彼女は何日ぶりで日の光を見るのだろう。他の少女たちも……。いや待てよ、他の少女たちは……。

「ちょっと待ってください。光が眩しくて目が眩みそう」

消え入りそうな声で彼女はそう言った。

●目が慣れるまで待つ……………⇩367へ
●モンスターが心配。外に出る　⇩117へ

211

沼を外界から隔てる岩山のふもとに、岩を使って急いでふさいだような跡がある。なんだろう。ダンジョンの入り口をこうやって、隠したのだろうか。

●爆弾を使ってみるなら………⇩396へ
●無視して通りすぎるなら……⇩416へ

212

カンテラの火を燭台に移していくと、1つともすごとに部屋の一角がぼうっと明るくなる。全部にともすと、全体が闇色から黄色に染め変えられる。そして部屋の奥に、扉が浮き出るように姿を現す。

いままで単に暗かったから見えなかったのか、それともひょっとして、火をつけるまでは本当になかったんじゃあ……今となってはどっちとも言いがたいが、まあ勘繰るのはやめよう。扉を開けて、次に進むぞ。

⇩217へ

213

渦を抜けて這い上がると、ぜんぜん見たことのない場所だ。水辺には違いないけど、湖のどこかだろうか？　きょろきょろとあたりを見回すと立て札がある。

「災いの池　この池にものを投げ込む者に災いあれ」と書いてある。

●**そう言われると、ぜひ投げ込んでみたくなるものだ**……⇩**351へ**

●**よけいな面倒はごめんだ。渦を通って戻るぞ**……⇩**213へ**

214

占い師の家は外とはうって変わって薄暗く、ランプの炎に物の影がゆらゆらと揺れている。ふむ、部屋の真ん中に紫の覆面にガウンをまとった占い師がいる。

「おお、旅の者よ、よく訪れてくれた。ふむ、そなたの顔にはよくない相が出ておるぞ。今なら、お主のハート1個を代償に、未来を占ってしんぜるが？」

●**占ってもらう**……⇩**148へ**

●**冗談じゃない、断る**……⇩**357へ**

215

通路はまっすぐ前へとのびている。

●**前進あるのみ**……⇩**262へ**

●**戻ったほうがよい気がする**……⇩**205へ**

216

中からはアグニムが何やら呪文を唱える声がしていた。盾を構え、肩から扉に突っ込んだ。最初に見えたのは、燐のような青白い光を四隅に浮かべた台。そして、その上に横たえられていたゼルダ姫の姿が……。

「やめろぉぉぉぉっ！」

消えた。駆け寄る間もなく、ゼルダ姫の姿が消されてしまった。アグニムが顔中に勝利の笑みを浮かべて振り向いた。怒りに我を忘れ、ぼくは突進した。またもやアグニムの両手で光の玉が産まれた。

⇩71へ

217

扉を開くと、また行き止まりだった。

あたりを見回すと、こんどは扉はどこにもない。かわりに下に穴があいている。でも、もしかしてまた、と壁を調べてみると、やっぱりそうだ、向こうはまた空洞、つまり壁を隔てて道が続いているのだ。たぶん。今度も壊せそうな気がするが……。

（爆弾がなければ穴に入る）

●今度こそ爆破だ！……………⇩159へ
●やはり穴に入ろう……………⇩198へ

218

残念だが今のぼくには、氷を解かす術がない。いまのぼくにできるのはマスターソードの力を信じて、氷の塊を叩き割ることだ。

●Gにチェックがあれば……⇩256へ

●Gにチェックがなければ……⇩242へ

219

ガサガサ。道の脇の草が揺れた。
「だれだ！」ぼくは盾を突き出し、剣を抜いた。
「わあああ、殺さないでくれよ」それは気弱なトカゲ男だった。
「実はぼくは光の世界では鍛冶屋なんだ。光の世界の相棒に聞かなかったかい。黄金の力にひかれて、闇の世界へ迷いこんじまったんだ。後生だからつれて帰ってくれよ」
両手をあわせて頼むトカゲ男は悪い奴にも見えないようだ。ぼくは肩の力を抜いた。

●つれて帰ってやる……⇩170へ

●放っておく……⇩340へ

220

ここで悩んでいてもはじまらない。ピラミッドを下りて神殿を探すしかないようだ。闇の世界とは言うものの、上から眺めると、この世界の造りはハイラルとよく似ていた。こ

こは城にあたる場所らしい。すると闇の神殿のある場所ってのは東の神殿のことか？ でも下りていくと見慣れない連中がうろうろしているのが見える。豚みたいなのや植物みたいなのやら。モンスターらしいけど。さて、どう行こうか。

●上からまわって東へ……………⇩88へ
●東にいくなら下からだ………⇩399へ

221

さらさらとした乾いた砂に足がめりこみ、焼け付くような日差しが体の水分と気力を奪う。ぼくはマスターソードを杖の代わりにして、とぼとぼあやしの砂漠を歩いていた。

そのぼくの目が、かすかに上空に動くものを捉えた。テンドルが急降下してくるのだ。剣を持ちなおして下から切り上げる。テンドルは砂の上で息絶えた。

ふと、右腕に痛みを覚えた。パックリと皮膚が裂け血が流れている。テンドルのくちばしか爪が当たったのだ（**ハートを1個消費**）。とりあえず布できつく縛り、再び沼への入り口を探して、ぼくは歩きだした。

⇩265へ

222

マジカルミラーを高くかかげた。闇の世界の少し暗い光を受けて鏡が輝いた。

「さあ、光の世界についたよ」

そこには痩せた男が立っていた。
「ああ、ありがとうございます。ありがとうございます」
「気にしなくていいいよ」
3歩ごとに振り返っては頭を下げて去っていく男を眺めながら、ぼくは背伸びをした。
まあ悪い気はしないか。

⇩206へ

223

ジークロックの仮面の奥の目がスーッと細くなる。笑っているのか。なめるなよ……。
ぼくはマジックハンマーを取り出し、相手のでかい体に不似合いな気取った仮面をなぐりつけようと突進した。ところが、ジークロックは、ぼくが突っ込んでいくのに少しも動くようすはない。と、横合いから、何かが襲ってきた。……尻尾だった。ジークロックの尻尾は、まるでそれ自体が別の生物であるかのように。伸び縮みして向かってくる。
「ぼくの相手は尻尾で十分だとでもいうのか……」
ついにぼくの心に火がついた。不精な戦い方をしたのを後悔させてやる！　尻尾の攻撃をかいくぐり、マジックハンマーを振り上げて、ぼくは飛ぶ。狙いは過たず、渾身の一撃が敵の顔面に当たる。仮面が砕け散ると、その下から緑色に光る第三の目が現れた。
その目が見開かれると同時に、ジークロックは口から炎を吐き、尻尾を狂ったように振

223

223●ぼくはマジックハンマーを振り上げ、ジークロックの気取った仮面をなぐりつけようと突進した。

り回しながら猛攻を開始した。ぼくは剣を低くかまえ、突っ込んでくる敵を下から切り上げた。……激突！　敵のものすごい体当たりが、ぼくを壁に叩きつけた（**ハートを2個消費**）。しかし、こっちにも手ごたえはあった……。

⇩**169へ**

224

氷の彫刻になっていたんだから、きっと氷のように硬いんだろうけど、炎にはきっと弱いと見た。ファイアロッドの火の玉をくらえ！
すると思ったとおり、火につつまれたタイノンはもがきながらじゅうじゅうと溶けだし、蒸発してしまった。あっけないものだ。

⇩**316へ**

225

道は最初左へ、そして右へ曲がっている。

⇩**205へ**

226

ペガサスの靴は伝説どおりの素晴らしい靴だった。ほぼハイラルの大地を斜めに横断する長い距離も、ペガサスの靴をはけば半刻ほどで渡ることができた。速さもすごいが、何しろ、これだけの距離を移動しても、たいした疲れが残らない。

「これが、あやかしの砂漠か……。初めて見るな」

ハイラル人は商人などの特定の仕事を持つもの以外あまり遠出をしない。ぼくも噂には聞いていたが、あやかしの砂漠に来るのは初めてだ。だいたい、ここは良くない噂が多すぎる。砂の中に人を引きずり込むゲルドーガや、砂漠で力つきる商人や動物を食らう一つ目蝙蝠の話など、子供をこわがらせるネタが豊富にあり、近づくべきところではないのだ。

神殿は砂漠を越えたところにある。回り道はない。さあ、砂漠に踏み込もうと思った時視界に洞窟が入った……。どうする？

●寄ってみよう……⇩408へ

●神殿へ急ぐ……⇩328へ

227

カンテラを取り出して前方を照らすと、まっすぐ続く道が見えた。待ち伏せはいない。しばらく進むと途中の壁に凹みがあった。宝箱がある。フタは簡単に開いた。中にはブーメランが入っていた**（ブーメランを入手）**。役に立ちそうな新しい武器をしまい、道に戻る

と、先に階段があるのが見えた。

⇩169へ

228

部屋を抜けると、また足場がない。そしてスイッチが2つ。じつにめんどくさい造りをしたほこらだ。さて、ここまで来て流されてはたまらない。こんどはどっちだ?

●**右にかける……………⇩467へ**
●**左だ左!……………⇩397へ**

229

部屋に踏み込むと、むっとする臭いが鼻についた。ブーツには、ねばついた体液のようなものがまとわりついている。そして……。その部屋にいたものは、巨大な目玉たちだった。大きな物は直径がほぼ2メートル。そして、50センチほどの小さな目玉がまわりを守るようにうめている。ぼくは吐き気を覚えた。

●**Gにチェックがあれば……⇩183へ**
●**Gにチェックがなければ……⇩332へ**

230

城の建物のすぐわき、ひときわ大きな木の下にある生け垣を持ち上げると、そこにはポッカリと大きな穴が開いていた。
「これが抜け穴か……」
中は真っ暗で何も見えない。雨混じりの風が穴の上を通りすぎ、ボーッと不気味な音を立てた。

●一気に飛び下りる……⇩460へ　**●調べてみよう……⇩163へ**

231

ペガサスの靴の与えてくれる素晴らしい速さで、ヘブラ山を駆け下りる。転がる岩を追越し、崖の急な斜面を横に駆け、一気に麓につく。
「さて、どう行けば近いかな」
立ち止まって、ハイラルの町並みを見渡した。城まで行くにも幾つかのルートがある。

Bにチェックは？

●ある……⇩93へ　**●ない……⇩311へ**

232

この扉はやけに重いようだ。両腕に力を込めて、グイっと押すとやっと開いた。中は、燭台が置かれて明るい。まるでぼくを待ち受けていることを警告しているようだ。5歩、足を踏み入れたとき、天井から何かが落ちてきた。また骸骨剣士のスタルフォンだ。戦いかたは……。

●剣で一刀両断……⇩295へ

●爆弾で木っ端微塵にする……⇩345へ

233

角を曲がるとバッタリと兵士にあった。緑色の鎧をきた最下級の兵士だ。

●一気に戦ってかたをつける……⇩74へ

●戦いは無益だ。逃げよう……⇩140へ

234

ヘブラ山に登るには、ふもとの洞窟から行くしかないという。洞窟をみつけて入っていくが、こりゃずいぶん長そうだ。

延々洞窟を進んでいくと、中で右往左往している人がいる。老人だ。こんなところでなにをしてるんだろう。もしもし？

「なんじゃ、お前は。人にものをたずねる時はだな……」
やたらと説教くさいので話を要約すると、この人もどうやら賢者の末裔らしい。洞窟の中だというのにカンテラをなくして困っているんだそうだ。賢者にしては間抜けな話だとは思ったけど、言うとまた説教されるに決まっているので、だまって助けることにした。ところが、このひと、困ったというわりには洞窟にくわしく、こちらが逆に案内され、迷うことなく洞窟を抜けることができた。出口につくと、別れようとするぼくを呼びとめて何かをくれた。鏡みたいだが……。
「助けてくれた礼にこれをやろう。これはマジカルミラーというものじゃ。この世界とは別に、闇の世界というのがあってな、青い魔法陣に乗るとそこに行ける。じゃが、こっちに帰ってくるときにはその鏡が必要なのじゃ。でないと行ったきりになってしまうでの」
ぼくは鏡を受け取り、山上の塔へ駆け出した(**マジカルミラーを入手**)。

⇩**301へ**

235

「うおおぉぉ!」マスターソードを抜いてアグニムに斬りかかる。
頭に巻いたターバンの上から一気に斬り下げる。手応えが……、ない。アグニムの姿が消えた。すぐに後ろに気配がした。振り向くより速く、後ろからアグニムの発射した光球が襲った。伝説の剣でも歯がたたないなんて……(**ハートを1個消費**)。

⇩**9へ**

236

鉄格子を蹴り飛ばして、中に入った。部屋の上半分だけが煤けていて、黒い霧が立ちこめている。中央に灯籠のようなものがあり、奥から明かりが漏れている。部屋があるようだ。霧を払いながら、明かりに近づこうとすると、突然ビームに襲われた。あわてて伏せる。灯籠の頭の部分が回転し、侵入者にビームを発しているのだ。グスグスしていると2撃目がくる。ぼくは伏せた姿勢から、明かりの方に飛んだ。

●Lにチェックがある…………⇩433へ

●Lにチェックがない…………⇩186へ

237

次の部屋の扉を開けると、6体の石像が立っていた。顔すべてを覆う兜から2本の角が生え、鎧の魔戦士とでもいった完全武装だ。どこかで見たような姿だが、しかし、所詮は石像。いちいち恐がっていてはもたない。石像を無視して、奥の扉へ向かおうとすると、背後の扉が閉まった。同時に6体の石像が宙に浮き、こちらに迫ってきた。思い出した。この像はテグアモス。ガノンの配下だ……。

●戦士と戦うなら剣だ…………⇩371へ

●弓で効率よく戦う…………⇩7へ

238

階段をゆっくりと下りていく。下に下りるに従い寒さが強まっていくようだ。あまり長くはこのダンジョンにはいられない。階段を下りきると、そこは小ホールになっていた。そしてまたも左右に扉だ。もう1度、どちらかを選べというわけか。

●右の扉を開ける……⇩19へ
●左の扉を開ける……⇩331へ

239

クエイク。それは大地を揺るがす地震の魔法だ。古の力の前では、固く閉じた亀岩の入り口も逆らうことができない。毒を含んだコケ、小動物の血を吸ったツタ、それらが何年もの間、生まれては滅びた蓄積が、鮮やかな原色の粉となって風に舞う。小石が、岩が崩れ落ちた後に、悪魔の喉を思わせる暗く深い通路が開いた。盾を持った右手で、鼻と口を塞ぎながら、中に進むとガノンの顔らしい醜いレリーフのある扉が左右にあった。

●右の扉から入る……⇩418へ
●左の扉から入る……⇩39へ

240

右に走りだすと、正面に倒れた木でできたトンネルがあった。

●くぐって進もう……⇩116へ
●入らず進もう……⇩296へ

241

ガクッと膝をついた。膝をつくつもりはなかった。反射的に剣を杖にした。しかし、剣は軽い音を立てて折れた。ぼくも、剣も力尽きてしまったようだ。こんなところで……。もうふり絞る気力も体力もない。世界は滅びてしまうのだろうか。もっとも、ぼくの方が先に滅びてしまうようだが……。

END

242

気を静め、マスターソードに気をこめていく。ふ～っ、大きく息をすって、吐き出す。寒さはもうあまり感じない。剣を振りかぶり、目を閉じる。

「はあああ」気合いと共にマスターソードを振りおろした。

カシーン。氷にヒビが入ったが、厚い氷に阻まれてシュアイズまでは届かない。ならば、もう一度！　再び剣を構えたが、いくら精神を集中させても部屋の冷気が体の奥にしみ込み、急激に体温が下がっていく。まずい、早く勝負をつけなければ**(ハートを2個消費)**。

再び剣を振りおろすと、細かい氷のつぶてが飛び散り、その中のいくつかの鋭い破片が体に突きささった**(ハートを1個消費)**。だがたいしたダメージじゃない。

やっと、氷の中からシュアイズが姿を現した。

⇩391へ

243

罠かもしれない。ここは慎重に行動しなければ……。ぼくは壁を足掛かりにして上り、上の部屋に戻った。

⇩153へ

244

地響きをたてて敵の巨体が崩れおちる。だが、ぼくにももう立ち上がる力はない。剣から手が勝手に離れ、急速に床が近づいてくる。相討ちだ。
ああ、こんなところで……世界はまだ……ゼルダ姫は……ぼくはまだ何も……。
そして意識は闇となり、闇には静寂がもどった。

END

245

手前のスイッチを選んで押した。カチリと乾いた音が部屋に響き、右側の扉が開いた。
ぼくはぐるぐるバーを避けて、右の部屋に滑りこんだ。
バタン。後ろで扉が閉まる音がした。中にはペンギンに似たファンギンというモンスターが4匹。そして、ぼくの入ってきた扉しか出口がない。トラップか！
床はぼくの姿をはっきり映すくらいのツルツルの氷だ。やばいな。

⇩80へ

246

おちついて対処すれば、たいした敵じゃないはずだ。動きを見切ってから剣を一閃し、モンスターを屠る。やれやれ、こんなことじゃいけないな。

しかし、この部屋の本当の意味を知るのはそのあとだった。次の部屋に通じるはずの入り口の扉が、柱に囲まれていて通れない。柱の隙間はせまく、ぼくよりずっと小さいさっきのようなモンスターでも通れそうにない……ん？

そうか、はじめからこんな造りのわけはない。するとさっきの部屋のスイッチというのは……。前の部屋にもどってクリスタルスイッチを押し、もういちど来てみると、やっぱり柱が移動して、べつの所を囲っている。扉の前には1本もない。うーん、やっぱり何でも試してみたほうがいいのかな。

⇩139へ

247

ファイアロッドから炎が吹き出して、みるみる氷が溶けていく。鈍い咆哮が部屋中響き渡った。シュアイズが炎の熱でもがき苦しんでいるのだ。

「このまま灰になれシュアイズ！」

しかし、シュアイズはたまらず自ら氷を割って飛び出した。これからが本当の戦いだ。

ぼくは剣を抜いた。

⇩391へ

246〜247

247●ファイアロッドから炎が吹き出て、みるみる氷が溶けていく。「このまま灰になれシュアイズ！」

248

暗くて何があるかよくわからない。しかし、ここで引き返すわけにはいかないのだ。ペガサスの靴で一気に走り抜けてやる。ぼくは覚悟を決め走りだした。頬を何かがすごい勢いでかすめていくのがわかる。

ズン。重い衝撃が背中に走り、ぼくは前につんのめる。しかし、倒れるわけにはいかない。ごろごろと転がりながら、やっと反対側の扉にたどりついた(**ハートを4個消費**)。背中の痛みは、ぼくをあえがせた。

⇩409へ

249

夜独特の重たい沈黙、地下特有の冷たい空気、そして雨の日ならではのうっとうしい湿気。不快の三つ巴の中で、濡れた革のブーツがペシャリペシャリと情けない音を立てる。自分の足音以外の音を聞き逃さないよう、耳に神経を集 中させ、先の先の闇に目を凝らす。慎重に慎重にと思うと、呼吸がどんどんゆっくりになっていき、次第に息苦しくなってくる。普段のリズムを取り戻そうと、大きく深呼吸した時だった。

五感が一斉に逆立つ。数歩先に人影がある。誰かが倒れているようだ。

⇩54へ

250

「とはいうものの、こんなので効くのかな」
不安に思いながら、マジックハンマーをバメットに叩きつけた。思い切りの悪さが災いし、バメットはスルリとハンマーの下をかいくぐり、ハンマーはゴツンと床をたたいた。するど、妙なことに石造りの床が波打って振動した。床をはい回っていたバメットは一斉に腹を上にしてひっくりかえる。ジタバタする姿は、もはや敵に値しない。邪魔なバメットをハンマーで叩きつぶしながら、簡単に奥へ進む道が開けた。

⇩314へ

251

木々のあいだを、足元に注意しながら行ったりきたり。しかしそれらしいものは見当たらない。やはりもっと話を聞いてからくるんだったな。
足元ばかり見て注意がお座成りだったのだろうか、いきなり石が飛んできたのにかわしそこねた。こういうことをしてくるのはオクタロックに決まっている。なかなか素早いやつだし、たいてい連れ立って出るやつだ。今回もそうだったのでまた何発かくらったが、近寄って剣で倒してやった。こいつじゃ情報は聞き出せないしなあ。別の方角を探してみるか（ハートを1個消費）。

⇩15へ

252

「次は氷の迷宮。光の世界でいうハイラル湖の真ん中に入り口がある。急げ」
助言にしたがって、何度めかの国内横断だ。はぐれ者の村をあとにして、湖に向かう。ハイラル湖もこっちでは様子が変わっているんだろうなあ、なんてことを考えながら進むと、村からだいぶはずれた所にぽつんと立っている家がある。光の世界で言ったら、そうだな、あてもの屋とか酒場のあたりだろうか。闇の世界にもあるのかな？

⇩180へ

253

さっき取ったばかりの新兵器フックショット。それを取り出し、鎖の強度と長さを確かめるように引っ張ってみる。ああいう手合いにいきなり接近戦はあぶない。しかし、これなら離れたところから攻撃できるはずだ。
ワートが迫ってくるまえに先制攻撃！　鎖の航跡を引きながら槍状の穂先が飛び、岩に突き刺さる。おもいきり引っ張ると岩は外れ、勢いあまって背後の壁にぶつかり、砕け散る。よし、これならいける！
ぼくは勢いに乗り、たてつづけに岩ヨロイを引き剝がしていった。ワートも迫ってくるが、そのたびにひらりとかわし……ん？　気のせいか、敵がだんだん早くなっているようないや、気のせいなんかじゃない。重荷をはがしてるんだ、そのたびに身軽になるのは

あたりまえだ。そして最後の1個になったとき、奴はそれを自ら弾き跳ばした。予想外の攻撃で1発食らってしまったが、これでもうヨロイは完全に取り除いたぞ！

（ハートを1個消費）

⇩30へ

254

「そうだ、マジックハンマーの力なら！」

本当に効くかどうか確信はなかったが、これなら少なくとも剣よりはましだろう。大きく振りかぶって、バメットの背中にハンマーを叩きつける。その一撃でバメットはコロンとあっけなくひっくり返った。まだ生きているが、腹は硬くなさそうだ。これなら倒せる。やわらかい腹を一撃して、バメットを倒した。やっぱりハンマーは役に立つ。さて、先を急ごう。しかし、どう行ったらいいのか全然分からないぞ。

⇩204へ

255

薄暗いどくろの森を出たぼくは、眩しさに目を細めた。ゆっくりと視力がもどってくる。おや、あそこにあるのは占い屋じゃないか。なにか情報が聞けるかもしれないな。

●入ってみる……⇩214へ

●先を急ぐのでパス……⇩302へ

256

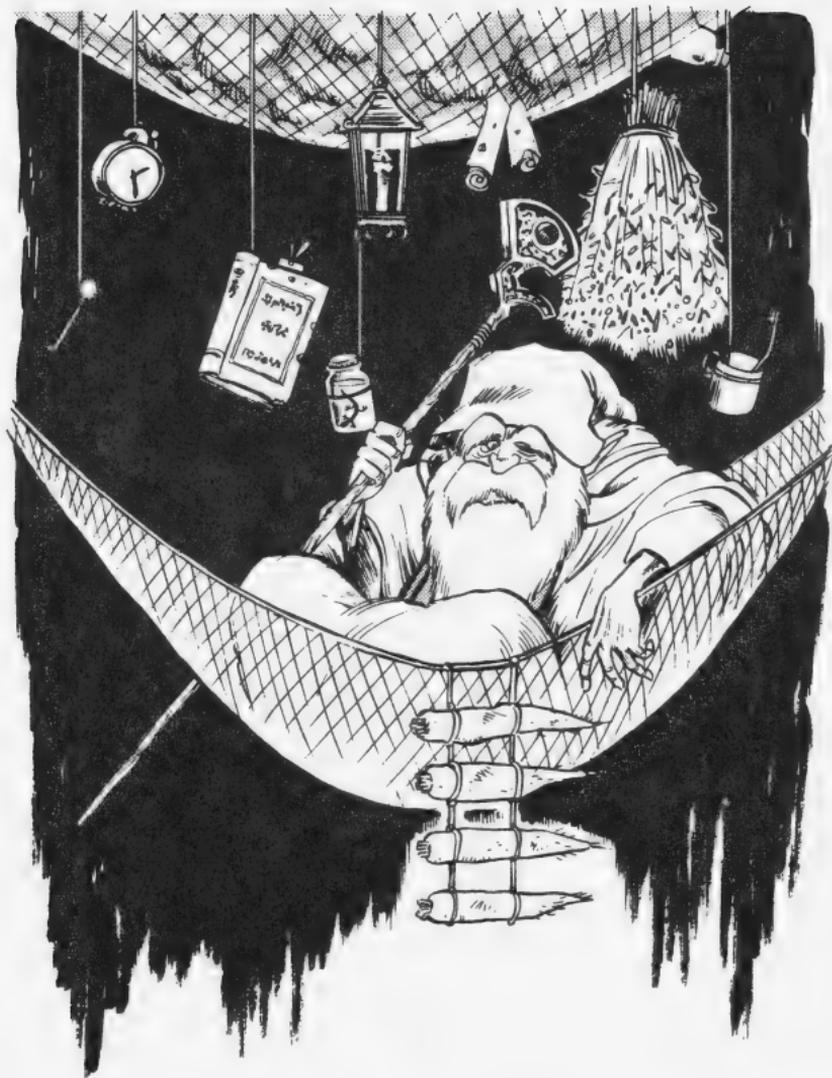
気を静め、マスターソードに気をこめていく。ふ〜っ、大きく息をすって、吐き出す。寒さはもうあまり感じない。剣を振りかぶり、目を閉じる。
「はあああ」気合いと共にマスターソードを振りおろした。
カシーン。氷にヒビが入り砕け散った。細かい氷のつぶてが飛び散り、その中のいくつかの鋭い破片が体に突きささる**（ハートを1個消費）**。だがたいしたダメージじゃない。
氷の中からシュアイズが姿を現した。

⇩391へ

257

教会を出て東の神殿を目指す。雨は止み、空は晴れわたった。夜の間に起こった出来事が全て幻だったようにさえ思える。しかし、腰にさげた剣と、背中にしょった盾の重さがぼくを現実に引き戻す。今ぼくには重大な使命があるのだ。
城はいつものように雄大な姿でハイラルの中心に立っている。野や道には、いつもより衛兵の姿が多いものの、小動物や普通の人々は何も変わらない朝を迎えている。
瑞々しい緑の野を抜けると、神殿の広い敷地に入る。敷地内の警戒は、いっそうきびしくなっている。像のように見せかけた警備機械は、人の気配を感じると急に動きだす。その度に急いで遠ざかりながら、神父様のつけてくれた印を目指して進んでいく。印の場所

256～257

には小さなほこらがあった。扉は開け放たれている。誰もいないようだ。
「違ったかなぁ。こんなところにいるわけないなぁ」
地図を眺めながら、ガランとしたほこらの中に足を踏み込むと、背後に人の気配を感じた。すばやく振り返り、油断なく身構えた。が、後ろからボカッと頭を殴られた。
「イテ……」またクルリと振り返った。誰もいない。
「この程度にひっかかるかのぅ」
頭上で声がした。様々な生活道具が釣り下げられ、中央の網の寝床に大柄な老人が座っていた。老人はクルリと一回転すると、地面に下りた。
「ほほ、土の感触は何ヵ月ぶりかじゃ」
「いつも、そんなところで生活しているんですか」
「天下のサハスラーラ老には油断は禁物じゃでな。そなたが勇者かな」
「はい」
臆せず、自信を持って答えた。白い髭と髪の毛の奥で老人はカカカッと笑って言った。
「なぁにが勇者じゃ。今朝がたまでは、ずいぶん迷っておったくせに。女子の助けを求める声、亡きおじの意志、それだけ条件が整えば、頼まれずとも、意味を考えずとも、立つのが勇者じゃ」
「もう迷ってなどいません。すべきことも分かっています。だから、ここに来ました」

257●頭上で声がした。様々な生活道具が釣り下げられ、中央の綱の寝床に、大柄な老人・サハスラーラが座っていた。

257

手を腰に当てて、大きな体をまげ、ぼくを下からのぞきこんだ。チラリとのぞいた片目を、いたずらっぽく輝かせるとサハスラーラ老は言った。
「まぁだ、信用できんなぁ。じゃが、それほどまでに言うなら試してやろう」
「何でも言ってください」
「威勢がいいのぅ。ふふん、誠の勇者なら3つの紋章を手にできるはずじゃ。力、勇気、知恵の3つの紋章が入ったペンダントを、ここに持ってきてもらおう。1つ目は神殿にある。残りの場所は、その後に教えよう。はてさて、できるかな？」
「できます！　やります！」
「よろしい。それでは神殿におもむく前に、そなたの傷をいやしてやろう」
サハスラーラ老は、しわだらけの手を、ぼくの額のあたりにかざした。みるみるうちに体から疲れが取れ、打ち身や細かなかすり傷が治ってしまった**（ハートが全部回復）**。
「それではゆくがよい」
サハスラーラに一礼し、神殿に向かった。どうも、うまく乗せられたような気がしないでもないが、そんなことはどうだっていい。すべては何事かを成し遂げたあとに分かる。
石段を駆け上り、奇怪な像の前を通りすぎ、古代の建築を思わせる重厚な造りの東の神殿の前に立った。おじからもらった剣と盾を改めて構え直す。本格的な戦いへ、ぼくは最初の一歩を踏み出した。

⇩101へ

258

水掻きなしでもどうにかなるさ、と甘く見たのがまちがいだった。湖の水面に渦ができていたとは。渦から逃げるほどにはうまく泳げないんだ。こうやって毎年夏に事故が起こるんだろうなあ。だめだ、巻き込まれてしまう！**（ハートを2個消費）**

⇩213へ

259

通路から城の別棟に出た。城壁の通路に出ると、下からぼくを呼ぶ声がした。城の外にサハスラーラが来ていた。
「心配してきてみれば……そのざまじゃ。アグニムを倒すにはの、相手の力を利用するんじゃ。ほれ、これは土産じゃ。おっ、兵士が気づきおった……」
サハスラーラが投げてよこしたのは、赤い薬の入ったビンだった。飲み干すと力が湧いた**（ハートが2個回復）**。兵士を引きつけ、サハスラーラは東の神殿の方に逃げていった。相手の力？　何のことだろう。くわしく聞こうと思ったが、サハスラーラの姿はすでに遠い。後ろ姿に感謝の念を送り、ぼくは自分の役目をはたすことにした。

⇩452へ

260

エーテル、それはたしか冷気を使った魔法だ。沼では何がおこるのだろう。⇩478へ

261

部屋の真ん中まで行き、グルリと部屋中を見回した。不審なところはなさそうだ。と、思った瞬間、四方の床のタイルが浮き上がった。中央にいる、ぼく目掛けて幾つものタイルか飛んできた。幾つかは剣と盾で防いだがポジションが悪かった。次の扉へ体当たりしたが開かない。そこに後ろから最後のタイルが直撃した。後頭部にタイル、そのショックで額を扉にぶつけた（**ハートを1個消費**）。タイルが砕けると前の扉が開いた。

⇩119へ

262

通路はまたも右へ曲がる。

●**右へ進む**……………⇩395へ
●**引き返す**……………⇩215へ

263

さて、どうしたものか……。考え事をしていると注意力が散漫になっていけない、ということは経験で分かっている。分かっているけど……。というのが現実のところだ。だから右足が穴にとられるまで、そこが元の入り口だって気づかなかったのだ。いや、迷路みたいな森だから、よく似た別の穴かも知れないけど。足をとられたのは真ん中の穴だった。うーん、やはり改めて入りなおすしかないいんだろうな。さっきとは別の穴にしないと同じ

目にあうだろうし。よし、ここは真ん中の穴に入ろう。

⇩437へ

264

部屋らしき空間に突き当たったが、辺りは真っ暗。自分の手さえ見えないほどだ。この闇は、普通の闇とは違う。真っ黒な液体の中に浸かっているように、本当になにも見えないのだ。壁づたいに部屋の様子を探ってみるが、意外に広く埒が開かない。明かりが欲しいが……。

●カンテラを持っている…………⇩43へ

●カンテラを持っていない……⇩87へ

265

行けども行けども青い魔法陣に反応するはずのムーンパールは沈黙したままだ。遠くに偽りの水を示す蜃気楼がたゆっている。ぼくの気力も尽きかけていた。どこか休む場所はないだろうか……。

そういえば、あやしの砂漠の片隅の洞窟に住む老人がいたはずだ。あの老人なら何かを知っているかもしれない。祈るような気持ちでぼくは洞窟の方角へ歩きだした。

「えっ！」

次の瞬間に地平線がひっくり返った。ぼくは宙に放り出されたのだ。足には砂の魔神ゲ

ルドマンの黄土色の手がしっかりと見える。なんとか剣で振り払ったが、したたか肩を打ちつけてしまった（ハートを1個消費）。

⇩109へ

266

塔の内壁は真っ赤に塗られ、まがまがしい呪文がビッシリ書き込まれている。中央の螺旋階段は人骨をイメージして造られている。もしかしたら、本物の骨でできているのかもしれない。踏むと嫌な音を立ててきしむ階段を2段飛ばしで駆けあがると、塔の最上部に出た。

⇩216へ

267

クリスタルが空中に浮かび、淡い髪の美少女を映しだした。

「あなたのおかげで魔族から逃れることができました。ありがとう。さあ、ゼルダ姫が亀岩で待っています。一緒に行きましょう。」

やっと、ゼルダ姫を助けだすことができる。姫の白く美しい面差しを思い浮かべて心が痛んだ。ぼくにもっと力があれば、ゼルダ姫を、いや7人の少女たちをこんな目にあわせることはなかったんだ。

「自分を責めることはないわ、勇者様。これも運命だと思うの。わたしたちが世界を救う

ための試練なんだわ。それにあなたはちゃんと私たちを助けてくれたじゃない。さあ、元気をだして。あなたの道が、トライフォースへと導かれることを祈っているわ」

（ハートが1個増える。ハートを全部回復）

そして、少女の姿は消え、クリスタルは手の上に落ちてきた。ぼくはゲルドーガの住みかを後にした。

⇩70へ

268

眼前にそびえる神殿の門。ようやくたどりついた。これが闇の神殿だ。ふりかえると、ピラミッドが遠くに見える。なるほど、たしかに「東の神殿」と同じ場所らしい。でも、中まで同じっていうことは、まずないだろう。

入り口の扉に手をかけるが、どういうことだ？　どんなに力をこめても開かない。押してもひいてもダメだ。なにか特別な方法があるんだろうか？　誰かに聞けばわかるんだろうか？

●Eにチェックがあれば……⇩347へ　●Eにチェックがなければ……⇩403へ

269

ブラインドの素早い動きと階段の足場の悪さがぼくを追い詰める。だがぼくの剣は鍛え直したばかりだ！　一太刀決まればブラインドを倒せるはずなのだ。

「うおぉぉぉ！」

ぼくは盾を投げ捨て階段を駆け上がった。ブラインドの目から光線が走る。

パシッ！　剣にあたった光線が、跳ね返ってブラインドを直撃した。今だ！　ぼくはブラインドの脇を駆け抜けた。それで終わりだった。

「があっ！」魂消る咆哮と共にブラインドは階段を転がり落ちていった。

⇩465へ

270

痛む足をひきずって、辺りをうろついていると、宝箱のある部屋に出た。頭やら前足後ろ足をジタバタと使い、箱を開けた。中から真っ黒な球が転げ出た。その球に触れた途端、姿がもとに戻った。剣や盾などの装備ももとどおりだ。

「これはムーンパール……」

聖なる力が宿るといわれる宝玉ムーンパール。ムーンパールは持っている者を闇の力から保護してくれる。これで何とか戦えそうだ。ぼくは大急ぎで魔法陣のある部屋を探し、迷わず青い光の中に身を投じた。

⇩3へ

271

長い戦いになるはずだ。体力は温存したい。一度、後ろにステップを踏んでフェイントをかけると、スタルフォンは簡単に前に呼びよせられた。素早く後ろに回りこみ、回転した壁に肩から体当たり……。が、壁はビクともしない。スタルフォンは、カラカラと乾いた音をさせて攻撃体制に移った。しょうがない、戦うか。

⇩67へ

272

フックショットなら届くんじゃないか？　ワートの鎧だって剥がせる強度も備えているし。よし、ものはためし。フックショットを取り出し、切り株めがけて穂先をなげつける。どうやらうまく引っ掛かったらしい。たぐりよせても切れたり外れたりするようすはない。一気に渡り切る。結局、濡れはしたけど、今さら言ってもねえ。

⇩356へ

273

カンテラが、こんなところで必要になるとは……。後悔しながら地面をはい、辺りを探った。暗闇に手を伸ばすと、指先が腐った木に当たった。扉らしい。手がかりにして立ち上がろうとすると、扉は脆くも崩れ、ぼくは次の部屋に転がりこんだ。

⇩474へ

274

草を踏みしだいていくと石畳がとぎれた。どうやらここで村は終わりだ。そこからは草も腰の辺りまで伸び、やがて深い森へと変わっていく。油断なく辺りを見回すと、腰まである草の波に隠れた洞窟が見える。
「あれがダンジョンの入り口かもしれないな」
1人で旅をしていると独り言が多くなるようだ。用心深く中をうかがう。
「おう、あなたラッキーあるよ！　ハートを2個プレゼント」
「わっ！」
いきなり中からアヒル顔の男が現れた。
「ただし2度目はダメある」（**Hにチェックがなければ、ハートを2個増やす**）
（**Hにチェック**）

⇩199へ

275

階段は地下へと続いている。この先に生けにえの少女がいるんだ。剣を握り直して、注意深く下りていく。湿って冷たくカビ臭い空気が、しばらく誰も訪れていないことを物語っている。さあ、出てこい、ブラインド！
通路の奥に何かがいる。目を凝らすとザーザックとかいうモンスターだ！　鎧を着たド

ラゴンというのがこいつだ。その奥には扉の形がうっすらと見てとれる。

●ザーザックをかわして一気に走り抜ける……………………………⇩348へ

●ぼくの前に立ち塞がるなら切り捨てるまで……………………………⇩309へ

276

縦長の広い部屋に出た。真ん中には長い食卓が置かれ、一定の間隔で燭台が置かれている。正面には肖像画がかかっているが、顔だけオークのように醜く描き変えられている。めまいがするような無茶苦茶な色使いだ。肖像画に目を取られていると、急に燭台が炎を吹き出した。それを合図に5体のスタルフォンか現れた。5体はそろって、自分の肋骨を抜くと、短剣のように構えた。

●爆弾で一気に片をつける……⇩349へ　●マスターソードで戦う……⇩349へ

277

扉をくぐると、また行き止まりになっていた。扉はなく、下にいく穴。壁は例によって、こわせそうな感じだ。これはきっと、作った奴のクセみたいなものなんだろうな。さて、どっちにしよう？（爆弾がなければ穴しかないけど）

●壁を爆破……………⇩159へ　●穴に落ちる……………⇩198へ

278

道などあってないようなものだ。木々の間に1軒の家を見つけた。占い師の家だ。中に入ると、占い師は即座に水晶玉の答えを読んだ。
「そなたが、この森に迷い込んだのは偶然ではない。そなたは、この地で伝説の剣と出会うのです。トンネルを2つくぐりぬけなさい……」
伝説の剣……。マスターソードだ。早速、森の入り口に戻って、剣を探すことにした。
占い師の家を出ようとすると、呼び止められた。
「占い料をいただきましょう」言われるままに占い料を払って、最初の位置に戻った（**ハートが1個減る**）。道は2つに分かれているが……。
●向かって右へ行く……………⇩240へ　●向かって左へ行く……………⇩75へ

279

なんてこった、さっき商人からエーテルの魔法を買っておくんだった。ぼくは急いで沼を渡って岸に戻り、商人を探した。幸運なことに、彼はまださっきの場所でうろうろしていた。
「エーテルの魔法を売ってくれないか！」
商人はにっこりと笑った。

「大将、ハート3個で交換ですなあ」
えっ、さっきは2個っていったじゃないか！　こいつ、人の足元をみやがって！
「どうします。3個じゃなければ、この話はなかったことになりますが、大将！」
ハート3個とエーテルを交換した**（エーテルを入手。ハートが3個減る）**。**⇩56へ**

280

酒場を通りすぎて（ちょっとおしい気もするが）先を急ぐ。するとこんどはべつの家がある。なになに、ここは占い師の家か。なるほど、どうりで普通とちがって怪しいというかなんというか、そんな雰囲気だ。もし腕のいい占い師ならなにかヒントの1つももらえるかも知れないが、時間とお金もくいそうだな。
●それでも見てもらう……⇩157へ　**●やめとく……⇩234へ**

281

「いくぞ、ブラインド！」
マスターソードを敵に叩きつける。
しかし、ブラインドはするりと階段の下へ下がり、剣は空を切った。ぼくは勢い余ってつんのめった。足場も悪く、ぼくの体を支えきれない。

280～281

281●マスターソードをブラインドに叩(たた)きつけた。しかし、ヤツにかわされ剣(けん)は空(くう)を切(き)る。ぼくは勢(いきお)い余(あま)ってつんのめった。

ピシッ！　頬を何かが切り裂いた。ブラインドの目から赤い光線が発射されているのだ。

（ハートを2個消費）

●Gにチェックがある…………⇩269へ　●Gにチェックはない…………⇩360へ

282

おりていくとそこは部屋になっていた。なんにもない殺風景な場所だが、真ん中にひとつだけ何かがある。もしかして……宝箱だ！　しかし状況がなんだかうさんくさいなあ。罠じゃないだろうな？

●それでも取りに行く…………⇩124へ　●やばそうだ、ようすを見よう⇩178へ

283

「この辞書は貴重な商品でして、ちょっと高価です。お金で譲れる代物ではないのです」
「では、何を払えば良いのです」
行商人は悪魔のような笑顔を浮かべると、ぼくの鼻先で何かを摘むような真似をした。
その瞬間、肩にガクンと重い物がのしかかったような、強烈な脱力感に襲われた。
「ハートを1個いただきました。苦労して成長なさることですな、勇者見習い殿」
カラカラと笑うと行商人は砂塵の彼方へ消えていった。高くついたが、辞書がなければ

先へは進めないのだ。止むを得ないだろう。重い体を引きずって神殿の前までたどりつくと、そこにはあいかわらず解読不明の文字が書かれた石盤が待っていた**（辞書を入手。ハートが1個減る）**。

⇩90へ

284

「イテテ……」

したたかに腰を打ったものの、大きな岩の下敷きになって一巻の終わりになることは避けられたようだが……。ゴン。

「イテ……」安心しかけた途端、頭の上にゲンコツ大の石が落ちた。誰かに見られたら笑われそうな失態だ。幸いだかどうだか知らないが、辺りに人はいない。いなそうだ。だいたい真っ暗闇で何も見えやしない。カンテラは持っていただろうか……。

●持っている……………⇩415へ
●持っていない………………⇩273へ

285

石像だったらマジック・ハンマーだろう。なにしろマジックアイテムなんだし。そう考えてハンマーを振りあげ、叩いてみる。しかし期待に反して、カーンと音がしたっきり何の変化もない。うーむ、そうそう1つのアイテムですべてが解決するわけがないってこと

かね。他の方法を考えよう。

●Fにチェックがあれば……⇩66へ　●Fにチェックがなければ……⇩155へ

286

とてもじゃないが、動かせそうなブロックではない。ため息をついて、辺りを眺めていると、壁の一部に亀裂が入っている場所を見つけた。そこから覗くと、隣も同じような小部屋になっているのが見える。迷わず爆弾を取り出し壁にセットした**（爆弾を1個消費）**。

⇩134へ

287

すて身で門番に立ち向かっていった。気づいた門番は大声で怒鳴りながら、ぼくを剣のツカで殴り飛ばした。

「こんな夜中に子供が出歩くんじゃやねえ。帰って寝やがれ」

勝てるはずがない。ただでさえ体力的に劣るうえに、ぼくは何も武器を持っていないのだ。**（ハートを1個消費）**

それにしても門番のようすが気になった。仮にもハイラル国の門番だ。あんな乱暴な口を普段はきかない。剣で切ろうとするのを無理にツカに変えたように見えた。

⇩358へ

288

しかし、2つの魔法のロッドさえ持っていれば、両脇の首は問題ではない。魔力の続くかぎり、氷の頭には灼熱の炎を、炎の頭には極寒の冷気を叩きつける。過度の魔力は体力を消耗させる。ようやく2つの頭を消滅させた時には、肩で息をするほどの疲れが残ってしまった**（ハートを2個消費する）**。ロッドがなかったら、どうなっていただろうか。

●Gにチェックがある……………⇩49へ　●Gにチェックがない……………⇩429へ

289

全身を炎で包まれ息が出来ない。のたうち回るほど苦しい。敵の攻撃もともかく、絶対の武器と信じた銀の矢が通じなかったショックが大きい。と、ダメージで霞む意識にサハスラーラの声が響いた。

「勇者よ。銀の矢は、とどめの武器だ」

そうか。ある程度弱らせないと、これは役に立たないのか。先が見えた。ようやく炎も消えた。今度こそ行ける。ぼくは立ち上がり、マスターソードを抜いた。

⇩353へ

290

奥の扉から次の部屋を覗く。
やはり暗いが、今度は少しようすが違った。広くて、奇怪な彫像がたくさん並んだ部屋なのだ。モンスターがうろついている気配はしない。
彫像のほかにあるものといえば……閉じたままの扉と、あとは下りの階段が1つ脇にあるのが見える。閉じた扉のあたりを調べてみると扉の脇の床に手にふれるものが。さてはこれがスイッチか？　しかし押したとたんに罠やモンスターが出てきちゃたまらないので、少し横にのいてから押してみた。
すると、何の問題もなく扉が開くじゃないか。なんだ、素直に押せばよかったんだ。そう思いながらその奥を覗こうと手をはなしたら、いきなり目の前で扉が閉まってしまった！
そういう仕掛けか。さて、どうしたものか。

●像を調べてみる……………⇩143へ
●あきらめて階段を使う………⇩459へ

291

扉を開けると、氷の通路になっていた。はるか上の地上の光が氷の層をぬけ、この通路で乱反射している。そのために見通しがきかない。それは一種鏡の迷路にも似ていた。

●右へ進もう……………⇩225へ
●奥へ向かおう……………⇩476へ

292

うだうだ考えていたのがいけなかった。足元から橋がばらばらと崩れ落ちていく。あわてて走ったって間に合うわけがない。
「わああぁぁ……」
叫び声をむなしく反響させながら、真っ暗な穴にまっさかさまに落ちていった。

⇩184へ

293

ゼルダ姫はパッチリと目を開けた。何事もなかったかのような、おだやかな顔で、ぼくを見つめた。今度は、ぼくも正面から姫を見つめることができた。
「悪い夢を見ていたようです。あなたが来るまで……」
「ええ。悪い夢だったのです。お忘れください」
「あなたが伝説の勇者なのですね……」
ぼくは黙ってうなずくと、姫は、これ以上ないといった笑顔で応えてくれた。
（ハートが1個増える。ハートを全部回復）

⇩456へ

294

小さな部屋の狭い扉を抜けると、岩盤が剝き出しの部屋に出た。この神殿は岩を切りだして造っているようだ。この部屋は造っている途中らしい。切りだされた石が脇に積まれている。よく見ると一番下に置かれているのは箱になっているようだ。何か役に立つものでも入っていないだろうか。

●パワーグラブを持っている……⇩35へ　**●パワーグラブを持っていない⇩202へ**

295

ガシッ、スタルフォンの剣とマスターソードが火花を散らす。前なら爆弾で倒したかもしれないが、いまのぼくなら剣で切り裂けるはずだ。気合と共に振りおろした剣は、スタルフォンの剣を叩きおって、奴を砕いた。

だが、その時に折れた剣が、ぼくの左腕をかすめて血が流れた**(ハートを1個消費)**。布で縛って、奥へと進もう。

⇩398へ

296

道端に、この森には不似合いな石で出来た台座があった。そして、その中央には、なんと剣が刺さっている。ひょっとして、これは伝説のマスターソード……。勇者の剣か？　そ

の剣を台座から引き抜くことができれば、ぼくは本当に勇者の資格を持っていることになる。剣は人を見るのだ。ツカを持って力を込めると、剣はあっさり引き抜くことができた。やった、と思った途端、剣はサラサラと崩れていった。台座は切り株に変わってしまった。偽物だ。ちっ、ひっかかってしまった。こんなものに関わっていないで先へ進もう。本物の剣は、どこかにあるのだろうか。

⇩361へ

297

この道も行き止まりだ。壁のすみにぼくの腕が入るくらいの小さな穴があるけど、ここからは前には進めない。爆弾を使えば、穴は広がるかもしれないけど、氷のダンジョンごと生き埋めにあいそうだ。しかたがない、戻ろう。

道を引き返そうとしたぼくの足に何かが噛みついた。それはバグース、黒い影のような生きものだ。剣を突き刺すとそれは簡単に死んでしまった。でも幸い、ブーツが奴の牙を防いでくれて傷も浅いようだ**（ハートを1個消費）**。

角を左に折れて、来た道を引き返した。

⇩205へ

298

川と同じだ、フックショットで！　とっさに引き抜いて、次の部屋の扉にむけて投げつける。穂先はうまいことノブにひっかかり、そこに鎖がまきついた。崩れていく床をけり、まき戻しの力で一気に扉の前まで飛び移る。
うまく行ったからよかったけど、足の下で床が崩れていくのは見てて嬉しいものじゃない。一歩まちがったらと思うとぞっとする。もっとも、ただ落ちるだけなら経験はたくさんあるけどね。さ、ショットの鎖をほどき、扉をあけよう。

⇩277へ

299

ぼくは盾を投げ捨てると走りだした。
「死ね〜っゲルドーガ！」電撃が光のムチとなって襲いかかるのにもかまわず、瞳のど真ん中に剣を深々と突き立てた。音にならぬ悲鳴が部屋中の空気を満たした。それがゲルドーガの最後だった。

⇩442へ

300

森の小道にそって歩き回る。いくらなんでも、木の上でなくした訳じゃないだろうからね。もっとも茂みの中なら可能性はある。きょろきょろと見回してみると、おや、下生え

298～300

300●「親父にそれを渡してほしいんだ……」そう言い残すと、彼はぼくの目の前でとうとう完全に木になってしまった。

の中に光るものがある。近寄って掘りだしてみると、青く光るそれはたしかにオカリナだ。きっとこれが彼の落とし物だろう。さあ、早く持って帰ってやろう。さて、闇の世界にはどこで通じているんだろう。彼が通ったなにかが近くにあるはず。探しているうちに、足元の草がなくなった。そこは空間にあいた穴――なるほど、彼もここから「落ちた」わけね、と思っている間に、森の色が再び変わった。闇の世界の森だ。キツネ顔が神妙な顔でこっちを見ている。みごとに元の場所に通じていたらしい。

「みつかったよ、これだろう？」

と、オカリナを差し出すと、彼はうなずきながらも、うれしいような、悲しいような曖昧な表情を浮かべた。そのときぼくははじめて、彼の下半身が足でなくなっていることに気が付いた。それはもう、半分木になりかかっていたのだ。そして上半身もだんだんと……。せっかく見つかったオカリナも、口笛も、もうすぐ吹けなくなってしまうのか。いったいどうしてそんなことに……。

「なあ、せっかく見つけてくれて悪いけど、もう1つ頼まれてくれないか。カカリコ村に寄ったら、酒場で親父にそれを渡してほしいんだ。ぼくはもう会いにいけない……」

そう言い残すと、彼はぼくの目の前でとうとう完全に木になってしまった。ぼくにはどうすることも出来なかった。悲しい気持ちのまま、そこを立ち去るしか出来ることはなかった**（オカリナを入手）**。

⇩263へ

301

山を登ると、目の前にそびえたつ塔があらわれた。これがヘラの塔だという。ここに最後の紋章があるのだ。

入り口に潜りこむ。山の斜面に立っているので、入り口は2階なのだ。入ると大きなフロアになっていて、床から色つきの水晶玉をのせた台が生えている。これは押すように出来た一種のスイッチ、クリスタルスイッチというやつだ。どこに連動しているんだか分からないが……。

●とりあえず押しておく……⇩23へ　●押さないのが無難だ……⇩177へ

302

どうやらここが村のようだ。案内の立て札にもかすれた文字で「はぐれ者の村」とある。しかし、寂れた村だな。家はほとんど崩れているじゃないか。村人の姿も見えない。このどこに七賢者の血を引く少女が囚われているんだろう。

⇩131へ

303

橋のような、真っすぐで長い通路に出た。

通路の先には何か凝った模様の両開きの扉がある。油断なく、扉に向かって歩き始め

る。両脇に描かれた目をかたどった壁画が鈍く光ったような気がする。
●○にチェックがある………⇩420へ　●○にチェックがない………⇩147へ

３０４

狭い通路を爆風が吹き抜けた。ポッカリ開いた穴から顔を出すと、そこは妖精たちの部屋だった。
背後から現れた侵入者に驚く様子もなく、美しい妖精たちは傷ついたぼくを介抱してくれた**（ハートを全部回復）**。ぼくの体に薬を塗ったり、甘い水を飲ませてくれたりしながら、さらに妖精たちは気になることを口にした。
「新しい司祭は魔道師なのよ。魔道には魔道」
「相手の力を利用しなくちゃ」
いったい何のことだろう。くわしく聞こうと思ったが、妖精たちは治療をすますと、どこかに消えた。ま、とりあえず体力は回復したし。アグニムを追うとしよう。　**⇩452へ**

３０５

爆弾は頼りにならない。マスターソードを抜くと、ぼくは敵の真っ只中に突っ込んだ。
スタルフォンは一斉に散らばると、肋骨を投げつけてきた。避けきれない。頭といわず足

といわず痛烈な打撃を受けた(ハートを3個消費)。再び5体の手に肋骨が握られた。これ以上ぶつけられてはたまらない。ぼくは一目散に隣の部屋に逃げだした。

⇩114へ

306

カカリコ村の交差点だ。どちらに行こうか

●北へ行く……⇩29へ　●西へ……⇩144へ
●南へ……⇩448へ　●東へ……⇩233へ

307

長い石造りの通路が続いている。壁には鉄の鎖が打ち込まれ、足枷のついた鉄球がゴロゴロ転がっている。通路は左に折れている。その先には鉄格子の扉があった。

(Lにチェック)

⇩236へ

308

さっきは右を引いたんだ、同じことはそうそう続くまい、と左を引っ張ることにする。一瞬不安がよぎるが、ええい、引いてしまえ!

⇩467へ

309

立ち塞がるなら切り捨てるまで！　ザーザックとの距離は5メートル、一気に懐に飛び込んで勝負をつけてやる！　タイミングを計ってぼくは跳んだ。
「なに！」ザーザックの口から炎が吹き出した。
勢いのついたぼくは避けられない。ならば切るのみ。炎を右腕に受けたまま、剣を薙いだ。ザーザックを真っ二つに切り裂いてぼくは着地した。とたんに右腕に痛みが走る。一瞬のことで火は燃え移らなかったが、高熱は広く火傷の跡を残した**（ハートを2個消費）**。
自分のうかつさに腹が立ち、正面の扉を蹴飛ばした。また、うかつだったか？　ええい、ままよ。

⇩348へ

310

扉を開け中に入ると、がらんとした殺風景な部屋だ。見ると壁の、ちょうど肩の高さ辺りに2個レバーが取り付けられている。さて、トラップだろうか、それとも秘密の入り口でもあるのだろうか？

●**左のレバーを引いてみる**……⇩76へ
●**右のレバーを引き部屋を出る**⇩451へ

311

森を抜けるのが一番早そうだった。ぼくは全速力で森に駆け込んだ。森の中は薄暗く、うっそうと茂った木が方向感覚を失わせる。

そこで、ぼくはハッと気づいた。この森の異名を……。

「迷いの森……」

近道をしたつもりが、かえって時間がかかってしまいそうだ。こうなってしまった以上は、できるだけ早く脱出しなければ……。とりあえず、正面の巨木で道が左右に分かれている。どっちに行こう。

●向かって右へ…………⇩240へ　●向かって左へ…………⇩75へ

312

スイッチを引くと水が流れてくる。いや、これは満ちるなんて生易しいものじゃない。ゴウゴウと音をたててあふれだしている！　しまった！　流されてしまうぞ！　などともがく間もなく、周囲がすこし明るくなった。とっさに目についた足場に手をかけてやっと水から上がれたが……なんてことだ、ここはほこらの外じゃないか！

しかも、あたりは一面の水。いや、湖だ。すると今立っているのは、湖のまん中の小島ってことか！　小島ならまだいい、こりゃただの岩だ。このままほこらまで泳ぎ着く自信

はないが、水掻きがあればなんとか……。

●水掻きなら持っている…………⇩63へ

●なかったな、それは…………⇩174へ

313

ぼくは剣をさっと抜きはらい、巨人に向かっていった。むこうもこっちを敵だと判断したらしく、爆弾を次々と投げてくる。飛んでくる破片をかわしながら近づくのは一苦労だがやっとのことで剣を叩き付ける。しかし図体がでかいだけあってなかなか倒れない。しかし、この距離ではむこうも爆弾はつかえまい！　疲れてはいるけど、一気に叩く！

倒してみると、そいつは爆弾をまだ3つも持っていた。物騒なやつだ。こんなのがたくさんいるのか、この世界は。次はもっと簡単に倒す方法を考えなきゃ身がもたない。

（ハートを2個消費。爆弾を3個入手）　**⇩268へ**

314

長い石造りの通路が続いている。壁には錆びた鉄棒が立てかけられ、腐った革紐が積まれている。拷問に使われていたようだ。通路が右に折れ、その先に鉄格子の扉が見えた。

（Lにチェック）　**⇩236へ**

315

次の部屋は、さっきよりずいぶん明るかった。おまけに宝箱まで目の前にある。拾ったカギを差し込むと宝箱は簡単に開いた。箱が開くとカギはサラサラと砂のように崩れてしまった。箱の中には弓矢があった。飛び道具があると、ずいぶん心強い（**弓矢を入手**）。

⇩237へ

316

ぼくは広い部屋にでた。ぐるりと見回すと、部屋の中央には高熱の回転体（ぼくはぐるぐるバーと名づけた）があり、床の4箇所にスイッチがある。そして扉が左右にある。つまり、どれかのスイッチを押して扉を開けろということだ。

さて、どのスイッチと扉が正解なんだろう。

●手前のスイッチを押す……⇩245へ
●右のスイッチを押す……⇩26へ
●左のスイッチを押す……⇩400へ
●奥のスイッチを押す……⇩145へ

317

穴を落ちていくと、いきなり目の前がひらけて、ドスンと鈍い音とともに薄暗い部屋に着地したようだ。見回してみると、ぼくの落ちてきた音に気づいたのか、全身に包帯をま

いたようなモンスター、ギブドがドクロや柱の陰からわさわさと寄ってきた。うーむ、もうすこしおだやかに来る方法はなかったものか。いや、そんなことより、こいつをどうあしらうかを考えたほうがいい。強いのかどうか全然分からないものな。

●とりあえず戦ってみる……⇩469へ　**●逃げるのも作戦のうちだ……⇩437へ**

318

悪魔の沼は激しい雨の中にあった。だが、それにもまして腐敗した植物や動物から発したガスが水面からとめどなくあふれでて、辺りに悪臭をまき散らしているのがたまらない。

沼のダンジョンへの入り口らしきものはまったく見つからない。悪魔の沼への入り口同様に巧妙に隠されているのだ。よほど臆病なモンスターでも住んでいるのだろうか。とにかく沼のまわりを調べてみよう。びしょ濡れのまま、ぼくは重い足を引きずり歩きだした。

●右回りで沼を調べる……⇩322へ　**●左回りで沼を調べる……⇩149へ**

319

わき目もふらずに神殿をめざす。すると、目の前に何かが現れた。とっさに身構えるが、攻撃する気配はない。みるみるうちに、それは少女の姿になった。少女はクリスタルに封

じ込められていた。すると、これは生けにえの1人？
「早く助けて。でも、私のところへくるには弓矢がいるわ。気を付けて……」
声がどこからか聞こえてくる。この少女がぼくに助けを求めているのか。呆然とする間に、姿も声も消えてしまった（**Fにチェック**）。

⇩268へ

320

「カギがあったんだ」
ポケットからカギを出し、カギ穴に差し込んだ。ピッタリ合う。心地よい音がしてフタが開いた。中には透明なクリスタルが入っていた。手に取ると、それはフワリと広がり、体の周りに銀色の膜を作った。フタがパタリと閉まると、宝箱は急に閃光を発して爆発した。危ない！　と思ったが間に合わない。しかし、衝撃は膜が防いでくれたようだ。
「これが噂に聞くミラーシールド……」
念じればシールドは手の中でクリスタルに変わる。必要な時は取り出せばいい。心強い武器を手に入れ、ぼくは意気揚揚と次の部屋に向かった（**Oにチェック**）。

⇩174へ

321

光球は速度を増してアグニムに逆行した。避ける間もなくアグニムの前で爆発が起き

た。
「馬鹿め。もう、その手は通用しない」
「それはこっちの台詞だな」
閃光が消え去った後に、不敵な笑みを浮かべたアグニムがいた。何もダメージを受けていない。魔法を、そのまま返したはずなのに、なぜだ。
「闇の世界ではアグニムは結界に守られているのです。今から私たちが結界を破ります」
ゼルダ姫は1歩前に出ると、胸の前で手を組んだ。その周りに7つのクリスタルが浮かぶと、一斉に神々しい輝きを発した。

⇩48へ

322

沼のほとりに洞窟があった。ここが入り口なんだろうか。

●洞窟に入ってみる……⇩461へ

●無視して先に進む……⇩478へ

323

爆弾が壁の一部をうがったが、特に何も起こらない。どうやら無駄のようだ。
(爆弾を1個消費)。先を急いだほうが良さそうだ。

⇩466へ

324

迷いはない。心の中にしっかりと決意が生まれた。何が待っているのかは知らないが、とにかく前へ進めだ。
だいぶ衣服やブーツの水気も散ってきた。ぼくの意志を表すような力強い足音が硬い石畳に規則的に響く……。
「なんだぁ、今の足音は……。さっきのジジイか？　今度こそ止めをさしてやる！」
衛兵の声がする。足音を聞かれてしまったのだ。大胆に行動しようとすると、すぐ慎重さを欠いてしまう。どうもうまくバランスが取れない。
このまま進むと敵がいるのは間違いないようだ？

●進む……………………⇩**11へ**
●引き返す……………………⇩**120へ**

325

「せーの！」と気合いをこめてハンマーをうちおろす。バキッという豪快な音とともに破片が飛び散り……そこに落ちてくるのは無残にちぎれたハンマーの頭。とびちった破片もハンマーのもの。なぜだぁ!?　あれほど強かったマジックハンマーのくせに、なんでこんな所でぶっこわれなきゃならないんだ！　床なんかに負けるとは。ハンマーの柄をすてて、その代償となった床のヒビを踏みつける。と、床がぼこっと抜けて穴があく。かろうじて

下にはおりられたけど、これから杭が出てきたらどうすりゃいいんだか。

(マジックハンマーを消す)

⇩282へ

326

辺りは闇に包まれた。どうやら闇の世界に変わってしまったらしい。ふと、自分の手を見ると、兎の前脚に変わっているではないか。顔中にフサフサした毛が生え、頭の上から長い耳が伸びている。剣も盾も、どこかに消えてしまっている。

ガシャガシャと機械音をあげながら、テグテールが突っ込んできた。為すすべもなく、跳ね飛ばされ、遥か下の床に落とされた。2度3度バウンドし、冷たい床に転がされた。

(ハートを1個消費) 身軽な兎の姿に変わっていたため、ダメージは少なかったようだ。

「そうか。闇の世界では姿が変わってしまうのか」ピョンピョン跳ねながら塔の中を駆け回る。このままでは戦えない。どうしたらいいんだろう。

⇩270へ

327

この老人が、闇の世界で会った笛吹きの若者の父親に違いない。しかし、話しにくい。あなたの息子は、闇の世界で木になりましたなんて、どう言えばいい。

「あ、あのぉ、このオカリナを……」

326〜327

326●兎になってしまったぼくめがけ、ガシャガシャと機械音をあげながら、テグテールが突っ込んできた！

「おや、息子にお会いなさったんですか。あの子は「黄金の力」を探して家を飛び出してそれっきりですよ。わしは死んだものと諦めておりましたよ。それであの子は元気でやっとりましたか」
「あっ、いや、それは元気でした。それでこのオカリナを渡してくれと頼まれて……」
歯切れの悪いぼくの言葉に、老人はちょっとだけ目を伏せた。
「いや、あなたが持っていてくれたほうがいいだろう。元気だとわかれば、わしはそれで十分じゃよ。そうそう、この村の鳥の石像の前で、オカリナを吹いてみなされ、伝説によれば、すごいことが起こるはずじゃよ。さあ、若者よ行きなされ」
ぼくはオカリナを受けとった。出口で振り返ったときの老人の背中が何故か小さく泣いているように見えた。

⇩477へ

328

世界に闇の力が働いたせいか、それとも元々伝説が本当だったのか。砂漠にはゲルドマンどころか、地雷まで仕掛けてあった。盾で身を防ぎ、時には敵を斬り、命からがら神殿の前につくと、そこには入り口らしきものなどなく、ただ見たこともない字のかかれた変な石盤があるだけだった。どうしよう。こんな文字を読むには……。

●辞書を持っていれば……⇩90へ　●辞書を持っていなければ……⇩79へ

329

村の南の外れにやってきた。南の砂漠とこの村を隔てる高い岩山がそびえたつ。そのふもとに小さな洞窟が見える。ぼくは好奇心にかられてその洞窟へ足を踏み入れた。水が天井からしたたる洞窟の奥には、古びた宝箱がポツンと置かれている。開けるとハートが1つ入っていた**（ハートが1個増える）**。

⇩100へ

330

ラネモーラは砂の中を自由に行き来し、あちこちから顔を出しては、こちらに襲いかかる。せっかく手に入れた爆弾の威力を試してみよう。導火線に火をつけると、砂の上に3つ爆弾を転がした。ラネモーラは素早く砂の中にもぐった。再び顔を出した時、爆弾が破裂した。ラネモーラは強烈な爆破の中に頭を突っ込んだ形になった。動きの鈍くなった3体のラネモーラを次から次へと斬りつける**（爆弾3個とハート1個を消費）**。

⇩83へ

331

左の扉を押すと、なめらかに扉は開いた。中には何もいない。それを確かめて足を踏み入れた。向かって右に扉がある。そこへ行けというわけだ。

⇩291へ

332

不快な臭いと悪夢のような怪物に一時ひるんだけど、すぐに落ち着いてきた。

(たかが目玉じゃないか。柔らかくて切りやすいってもんだ)

小さな目玉たちが空中に浮かんだ。どんな攻撃を仕掛けてくるんだろうか。

●**弓矢で射ち落とす……⇩424へ**

●**剣で叩き落とす……⇩129へ**

333

神殿の中に入っていく。なんとなく、造りも東の神殿に似ているような気がする。本当に表裏一体なのか。しかし今度は真ん中じゃなく、左右に扉がある。しかも、それぞれにスイッチがついているぞ。開閉スイッチだ。さて、どっちを開けよう?

●**右のスイッチ……⇩122へ**

●**左のスイッチ……⇩445へ**

334

クリスタルスイッチには触れずに、左の扉を押し開け中に入った。薄暗い部屋の中央まで行って、ガサゴソ何かが動き回り、それらがガチガチとぶつかりあっている音がしているのに気づいた。不審に思っていると、鬼火のような明かりが灯籠に点った。照らし出されたのは、数匹のバメットが亀に似た姿のわりに素早い動きで部屋中を走り回っていると

いう、おぞましい光景。完全に囲まれてしまっている。バメットは確かマジックハンマーに弱いはずだが……。

●マジックハンマーがある……⇩250へ　**●マジックハンマーはない……⇩132へ**

335

道の向こうからフラフラとした目つきの悪い男が来る。あの足取りはおおかた酒を飲みすぎたんだろう。まだ日も高いのにのんきなことだ。

そいつは、目の前で足をもつれさせた。思わず支えてあげたぼくの鼻に、プーンと酒の匂いがつく。

「おっと、ごめんよお〜」

「気をつけて」

それで別れたが、妙に荷物が軽いような……。

げっ！　爆弾をすられた。いったいこの村はなんなんだ。振り返ったがもうその男の姿はなかった**（爆弾を2個消費）**。

⇩**340へ**

336

スイッチを踏むと、落とし穴の位置が変わった。扉の前から、今度は、ぼくのすぐ手前

に移った。飛び越えることも回り込むこともできそうにない。あまり意味がなかった。さてそうなると、どうしたものか……。

●**飛び下りる**……………⇩**99へ**　●**下りずに何か考えよう**………⇩**153へ**

337

石壁の隙間を擦り抜けると、そこには真っすぐな通路があった。通路の脇は薄茶けた壁で、壁中に意味不明の文字が書かれているのが、ところどころにあるロウソクの光で分かる。光は弱く足元までは照らされていない。ブーツを通して、ゴツゴツとした床の感触だけが分かる。

●**さっさと駆け抜ける**………⇩**123へ**　●**慎重に進む**　…………………⇩**428へ**

338

扉をくぐると、いきなり目の前は一本橋になっていた。

そしてその下は……真っ暗だ。深い穴がぽっかりと口をあけているだけなのだ。ほかに、むこうに渡れる足場はないかと見回したが、ぜんぜん見つからない。この橋しかないわけだ。しかし今にもくずれそうな怖い橋だ。どうしよう？

●**ペガサスの靴で渡る**………⇩**208へ**　●**様子を見てみる**…………………⇩**292へ**

339

奴もどうやらこっちに気づいた。ぐずぐずしている暇はない。

剣を抜いて白兵戦だ！　敵のふところ（どこがそうなのか分からないが）に飛び込み、岩に剣を打ちつける。硬い！　1度ではとてもじゃないが砕けない。

2度、3度と切り付けるとやっと1個砕けたが、敵もそれ以上悠長ではなかった。砕いたやつの隣の岩がいきなり飛び出し、顎に命中。こらえて次の岩に取りかかるが、1個砕くまでに5回くらい岩で殴られる。3個目にとりかかったとき、だめおしの一撃をくらって床にたたきつけられた。

だめだ、これじゃ全然割りがあわない。敵の手のうちもわからないのに接近戦はやはり無謀だったか。なら、次はフックショットを使ってひんむいてやる（**ハートを3個消費**）。

⇩253へ

340

三叉路だ。道は南北、そして西に分かれている。どれが正しい道だろう。

●北へ……⇩335へ
●南へ……⇩340へ
●東へ……⇩166へ

341

真っ青な煉瓦作りの城内は、各窓の下に灯された明かりのせいで、深海に日がさしたようなボウッとした明るさだ。城の外から引きつれてきた衛兵たちを片付けると、城内から数人の新手が現れた。こちらの勢いは止まらない。強引に中央を割って入り、盾でダメージを軽減しながら突破する**（ハートを1個消費）**。

城の奥に地下へ続く階段を発見した。地下牢は、この先に違いない。

⇩**169へ**

342

キリキリキリ、弓矢を引き絞る。部屋の空気は再び、ちりちりと乾燥しはじめている。パッと矢を放つと、狙い過たずゲルドーガに突き立った。

「フシュシュシュ……」音にならぬ咆哮がゲルドーガから上がった。

それと同時に今までためた電気が無差別に周囲にまき散らされた。その1本がぼくの腕を這い上ってくる。痛みと共に、赤い電気の烙印が腕に印された**（ハートを3個消費する）**。ぼくはガクリと膝を落とした。しかし、やつはまだ生きている。再び、空気が乾くのが肌でわかるのだ。ぼくは膝をついたままで矢をつがえた。

「地獄に落ちろ、ゲルドーガ！」

矢は一直線にゲルドーガの瞳の中心に刺さった。それで終わりだった。

⇩**442へ**

343

扉にとびついたまではいいが、どうしても開けられない。ここもサルキッキに頼む、ってわけにはいかないし、やはり、このモンスターを倒すしか方法はないんだろうか？

敵に背を向けて考え事なんかしたのがいけなかった。バリッという弾けるような音がしたかと思うと、一瞬闇に燭光が走り全身をしびれたような衝撃が襲った。さっきからこいつが出していたのは電撃か！　ダメージを受けながら、あらためて剣を抜く。そう何度も同じ手はくわない**（ハートを1個消費）**。

⇩**479へ**

344

赤いクリスタルの先端をクルリと回転させ、タイノンの前に突き出した。とても意志があるように思えない、凍光の球が、おびえたように遠ざかる。力強くファイアロッドを下りおろすと先端から炎の線がタイノンに向けて走った。一瞬にしてタイノンは蒸発し、この部屋に行く手をさえぎるものはなくなった。

⇩**128へ**

345

スタルフォンには爆弾が一番いい。案の定、轟音と共にスタルフォンは粉々に砕け散った**（爆弾を1個消費）**。手間をかけさせるなよ。さあ、先へ！

⇩**404へ**

346

力の紋章につづいて、次に手に入れるべきは最後の1つ、知恵の紋章だ。そのありかはヘブラ山。この砂漠からはまるっきり反対の方角になる。でも、これがそろえばマスターソードを手にする資格が得られるそうだ。ゼルダ姫の危機も迫っている。先を急ごう。
　ヘブラ山へ行くには国をほぼ渡り切ることになる。途中で村に通りかかった。カカリコ村だって。通り抜けようとすると、行く手にひときわ大きな建物がある。酒場のようだ。

●寄ってみよう……………………⇩414へ

●先を急ごう……………………⇩280へ

347

「そこは力まかせじゃだめなのさ。まかせてくれ。」
サルキッキが扉にとびついた。いったい、どんな仕掛けなのか、見ているほうにはさっぱり分からないが、扉はきしみながらゆっくりと開いた。
「役に立つって言ったろ。」サルキッキは自慢げに言うと、どっかに行ってしまった。
よし、この扉をくぐって、囚われの少女を助けるぞ。

⇩333へ

348

一気に走り、奥の扉を蹴飛ばす！　ゆがんだ悲鳴をあげて扉が吹き飛ぶ。
「誰っ！」
少女の声だ！　ここは牢屋か。鉄格子が目に飛び込む。前にモンスター2匹。
「助けに来ました」
左の骸骨野郎にフェイントをかけひるませ、右のザーザックを切りふせて、返す刀で骸骨をたたき潰す。そして息を吐き出すと、ぼくは牢の前に立った。
「今、出して上げますから、ちょっと下がってください」
牢の鍵を叩き壊し中に入る。そして少女に手を差し出した。振り向いた少女の頬にはくっきりと涙の跡があった。食事も満足に与えられず泣き疲れて痩せた少女に、手を貸して立たせると、ぼくらは出口へと向かった。
「私、助かるのね」少女はそれだけポツリといった。
今にも気を失いそうだな。ぼくは支える手に力をこめた。

⇩210へ

349

爆弾なら1体に1個で十分だろう。革手袋に手をつっこんで、爆弾の数を数えた。

●大丈夫、5個以上ある……⇩78へ
●相手の数より少ない……⇩305へ

350

神殿を出て、一目散にサハスラーラのいるほこらに向かった。途中を邪魔する化け物など物の数ではない。ぼくには勇者の資格がある……、ありそうだ。

勇気の紋章を自信タップリで、サハスラーラの前に差し出した。

「サハスラーラ老、勇気の紋章です！」

「フン、多少はおまえさんに敬意を払わなんといかんようじゃな。が、まだまだ可能性があるということに過ぎん。残り2つの場所を教えてやろう。あやしの砂漠の神殿、そしてヘラの塔じゃ」

「あやしの砂漠？　それにヘラの塔ってヘブラ山の上の？　はぁ、遠いなぁ。ほとんど地の果てだ……」

「自信なさそうじゃな。なるほど、おまえさんは勇気はあるかもしれんが、まだ知恵も力もない、ただの子供じゃったか。それは荷が重かろう。やめてもかまわぬぞ」

「だ、誰がやめるなんて言いました。一度始めたら、最後までやります！」

言ってしまってから、また乗せられたことに気づいた。しかし、サハスラーラは満足そうに笑って、ぼくに変わった靴を放り投げた。

「ペガサスの靴じゃ。これがあれば、千里の道も苦になるまい」それだけ言うと、サハスラーラはスルスルと屋根裏の寝床に潜り込んでしまった。**（ペガサスの靴入手）** ⇩**226へ**

351

こういう忠告ってのは逆効果だと思うな、といいつつ手近な石をひろって投げ込んでみる。ちゃぽん、と波紋をたてて石が沈むと、ゴゴゴッと地鳴りがして足元が揺れる。まさかあんな小さな石でこんな大げさなことが起きるわけがない。池の水面をわって、ぬめっと黒光りするものがあらわれた。長いひげをゆらし、でかい口をあけてこっちをにらむ。大ナマズか！　すると今の地鳴りはこいつが？

「貴様、よくも眠りをさましてくれたな。いい度胸だ」

そう言うから攻撃されるかと思ったら、ナマズは一転、おだやかな口調で言った。

「その度胸に免じて、いいものをやろう。このメダルにはクエイクの魔法が入っている。効果は……今やってみせたろうが、本当はもっとすごいぞ。ついでだ、大サービスでハートもおまけしてやる。ただし今回かぎりだ、また投げ込んだらこんどこそ本当に災いをくれてやるからな」**（クエイクを入手。ハートを1個増やす）**

メダルとハートをおいて、ナマズは水中に潜ってしまった。好奇心がうずいて、もう一度石を手にしたけど、やっぱりやめて戻ることにきめる。渦を通れば戻れるはずだな。

⇩98へ

352

「大丈夫、帰る方法はちゃんとあるさ」マジカルミラーを取り出し、きこりの手をとった。

瞬く間に木々の色が変わり、光の世界の森につく。

「いや、ありがとう、ありがとう。なんもお礼できねえだが、よかったらこれを持っていってけれや」そう言うと、きこりはハートを1個くれた（**ハートを1個増やす**）。

「いや、そんなことしてもらっては……そうだ、あなたが掛かった魔法陣はどこですか？」

「なに、するとあそこに戻るんか？　そうか。魔法陣ならすぐそこだ。それから、戻るってんなら教えてやるが、あの森の入り口のあたりで口笛を聞いたぞ。たしか一番手前の穴のあたりだ。もしかしたら他にもだれかいるのかもしれんな」

きこりはそれだけ教えると、帰っていった。

⇩**60へ**

353

幾多の闘いを共にしてきた退魔の剣マスターソード。頼るべきは、この剣と已れの剣技。

ガノンは素早く三つ又の矛をくりだしてきた。数回斬り結んだ後、三つ又を剣で跳ねのけ、ガノンの懐に飛び込んだ。するどい突きから、反転して回転斬り。遠心力が加わった剣の威力が、ガノンの胸に真っ赤な血の線を描く。

「グガガ、その剣は退魔の剣……。1度ならず、2度までも、オレの肉を裂くか……」
続けて斬りこもうとするとガノンは巨体のわりに身軽く後方に飛んだ。しかし、傷口からは血があふれ、息は荒い。ぼくはマスターソードを握り直し、再びガノンに突進した。

●Gにチェックがあれば……⇩449へ

●Gにチェックがなければ……⇩364へ

354

道が東西にのびる。そして1本、北へ分かれる。さてどちらに行ったものか。

●北へ……⇩53へ

●西へ……⇩42へ

●東へ……⇩439へ

355

キラキラと飛び回る小さな妖精たちの間をすりぬけて、洞窟の中に入ると、普通の洞窟とは違って、暖かな空気に満ちていた。
「なんて心の休まるところなんだ……」
「そりゃそうですわ。ここは女神の洞窟ですもの……」
耳ざとい妖精の1人が、ぼくの独り言に答えた。その言葉と同時に、奥の豊かな水をたたえる四角い池の上に人の姿が浮かんだ。

355●「ここは女神の洞窟ですもの……」その言葉と同時に、奥の豊かな水をたたえる四角い池の上に人の姿が浮かんだ。

「今まで、水が汚れて私は力を封じられていました。やっとこれで……。お礼に銀の矢をお渡ししましょう。これはガノンを倒すのに……」（銀の矢を入手）

6つのクリスタルが輝きだした。

「私たちの力でデスマウンテンまでは送ることができます。亀岩の中に入るには、クエイクの魔法が必要ですが……」

クエイクの魔法のメダルは確か……。

●**大丈夫。持っています**……⇩**22へ**
●**そんなものが必要なの？**……⇩**402へ**

356

森の入り口にたどりついたようだ。たしかに暗くて不気味な森だが、何が「ドクロの森」なんだろう、と思っていると、入り口の脇にでかいドクロが転がっている。これは本物じゃないと思うが、するとわざわざ作ったんだろうか。その奥に、みるからに「落ちろ」といわんばかりの穴があいている。それも3つ！　罠だとしたら誰もひっかからないと思うが、地下にいくとなると……ここに落ちてやるしかないんだろうなあ。どの穴に入る？

●**手前の穴**……⇩**193へ**　●**真ん中の穴**……⇩**437へ**
●**一番奥の穴**……⇩**146へ**

占い師の小屋を出たぼくは、急ぎ足ではぐれ者の村に向かった。まだ日は高い。さあ、急がなければ。

⇩131へ

358

その時、また頭の中で声がした。ゼルダと名のった女の人の声だ。
「城の東の大きな木の脇に抜け穴があるはずです。そこから、城に入ることができます」
抜け穴……。どこか危険そうな響きだなあ。が、それが確実な道だと言うのなら、信じて行ってみるしかない。謎の声と、自分の力とを……。

⇩230へ

359

ポケットからカギを取り出した。カギ穴に差し込むと、勢いよくフタが開いて何かが飛び出した。飛びすさって構えると、それは青い服だった。よく見ると勇気、知恵、力の紋章の縫い取りがある。これは勇者の戦闘服、魔法の服だ。ダメージを吸収し、着ている者を守ってくれるのだ。すごい物を見つけてしまった（**魔法の服を入手**）。
サイズはピッタリ。まるであつらえたようだ。マジックミラーを取り出して、自分の姿を眺めた。たくさんの戦いをくぐりぬけ、少しは勇者らしい顔になったような気がする。

新たな気分で、ぼくは先に進んだ**（Nにチェック）**。

⇩276へ

360

ブラインドの素早い動きと階段の足場の悪さがぼくを追い詰める。だが負けるわけにはいかない。遥かヘブラ山では、ゼルダ姫がぼくを待っているんだ。
「うおぉぉぉぉ！」ぼくは階段を駆け上がった。ブラインドの目から光線が走る。頬や剝き出しの腕を光線がかすめていく。
「ブラインド覚悟！」ぼくは体当たりよろしく剣を突き出し、ブラインドにぶつかった。
「があっ！」ブラインドの腹に深々と剣が突きささった。そしてブラインドの爪がぼくの右肩の肉をえぐりとっていた**（ハートを3個消費）**。魂消る咆哮と共にブラインドは階段を転がり落ちていった。

⇩465へ

361

かなり迷ってしまったようだ。
と、目の前に一軒の家があった。ノックしても、誰も出てこない。扉を軽く押すと簡単に開き、中に男がいるのが見えた。男は振り向くと、気まずそうな笑顔を作って、こっちにやってきた。

「や、や、や、やぁ。ここに来たこと、誰にも言わないでくれないかなぁ。言わないでくれるよね。これ口止め料」ドロボウの隠れ家だったようだ。ドロボウがくれた口止め料はハートだった**（ハートが1個増える）**。

⇩278へ

362

この程度のブロックなど、今のぼくには軽いものだ。あっさりブロックを持ち上げて、後ろに放り投げた。ズンと重い音を立て、ブロックが入ってきた扉の前に落ちた。

階段は細い茨で編まれていた。踏み外せばトゲで傷つく。乱暴に上れば簡単に壊れてしまうだろう。ぼくは慎重に茨の階段を上っていった。

⇩174へ

363

近寄るのがだめなら、離れて攻撃するしかない。

それも、あの羽をねらって。火を放つのがベストに思えるが、あいにくそんなことができる武器やアイテムは持ち合わせがない。するとあとはフックショットで羽をもぎとるか、爆弾でふっとばすかだが……。

●**フックショットを使う**……⇩450へ
●**爆弾を使う**……………⇩69へ

364

激突。巨大なガノンに臆せず、真っ向から突進する。
「グガアアアアア！」マスターソードはガノンの腹に弾かれた。
狙いとは違ったが、しかし肩を切り裂くことができた。ガノンの肩あてが飛び、腕の付け根から……、吹き出したのは炎だった。どういう構造をしているんだろう。
ガノンの体から吹き出た炎は、燃える毒蛇のように床を走り真っすぐこっちに伸びる。

●○にチェックがあれば……⇩45へ　●○にチェックがなければ……⇩471へ

365

ちょっと無謀なような気もするが迷ってはいられない。駆け出すと同時に熱線が発射された。真っ赤な熱線が、すぐ脇を通ったが、ギリギリでかわせた。その勢いのまま、ぼくは次の部屋に転がりこんだ。

⇩417へ

366

ファイアロッドを構えて、意識をロッドの先端に集中する。ゆっくりと空気が熱くなってくるのがわかる。そして臨界点を超えるとロッドの先から炎がほとばしる。
赤い炎は、扉を固める氷を瞬く間に解かしていった。

さあ、これで次の部屋に進める。

⇩455へ

367

外の光に目が慣れるまで待つことにした。少女を階段に腰掛けさせて、ぼくは彼女に背を向けてダンジョンの奥を警戒する。シーンと静まるのが嫌で、彼女に話し掛けてみた。

「生まれはカカリコ村なのかい」

返事がない。気を失ったのだろうか。その時、邪悪な気配にチリチリと毛が逆立った。いったいなんだ！　振り向こうとしたぼくの背中に熱い痛みが走る。

「うわあぁぁ！」

階段を転がり落ち、立ち上がったぼくが見たのは、階段の上に立ちはだかる化けネコだった（**ハートを4個消費**）。

「ひっかかったな小僧。俺が大盗賊ブラインド様だ」

卑怯者め、少女に化けて待っていたのか。背中がズキズキと痛む。

⇩281へ

368

頼みの綱はマスターソードだ。蠢く2つの頭に必殺の斬撃をくりだすが、なかなかしぶとい。真ん中の頭は、不気味に沈黙を保っている。交互に繰りだされる炎と冷気の攻撃を

避けながらの戦いは長時間に渡った。ようやく炎の頭を、次に氷の頭を砕くことができた時には、さすがに立っているのがやっとといった状態だ（ハートを4個消費）。

●Gにチェックがある……………⇩49へ
●Gにチェックがない…………⇩429へ

369

カンテラの光に照らされた部屋――いやまた長い通路だった――。には、左右の壁に鉄の玉を射ちだす砲台が備え付けられていた。その砲台から、ぼくの頭ほどもある弾が射ち出されているのだ。あんなものが当たったら、骨が砕けちまうだろう。

タイミングを慎重に数えて、ぼくはその通路を無事渡り終えた。背中にはびっしょりと汗をかいているのが分かった。

⇩409へ

370

炎を越える炎で攻撃だ。全身全霊を込めたファイアロッドから盛大な炎がガノンを襲った！　ガノンはなんとか耐えたようだ。しかし、避ける力は残っていない。

⇩207へ

371

規則正しく並んだ像の包囲はジワジワと狭くなる。

こちらがどんな風にポジションを変えても、テグアモスは次から次へと波状攻撃を仕掛けてくるのだ。剣は敵にダメージを与えてはいるが、なかなかに固い。1体、また1体と片付け、6体全てを破壊したときには立っているのがやっとだった（**ハートを2個消費**）。

●ハートがまだあれば………⇩167へ　●ハートがなくなってしまえば…⇩73へ

372

アグニムが全生命を叩きこんだ、強烈な圧力と爆発的な熱気。

しかし、鍛えあげられたマスターソードは、その破壊力を軽々と受けとめた。膨れあがるだけ膨れあがったアグニムの魔力は、その持ち主に返っていった。力を振り絞り尽くしたアグニムに、それを受けとめる力は残っていないだろう。

⇩480へ

373

村のはずれの道を歩いていると、荷物の中の何かが鳴っているのに気がついた。調べるとムーンパールだ。どうやら闇の世界に行ける青い魔法陣に反応しているらしい。ムーンパールの反応に従って森に踏み込み、岩を押し退けると案の定、青い魔法陣が現れた。

●**魔法陣で闇の世界へ行く**……………………⇩199へ
●**もう少しカカリコ村を回ってみるなら** ……………⇩144へ

374

ブン。巨大な鉄の球が、すぐ横に打ちつけられた。
「ちっ、外したか」飛びすさって、牢の前に飛び、鉄球を持った兵士と向かいあう。
鎖をたぐって、兵士は再び鉄球をブンブンと振り回しはじめた。

●**ブーメランを持っている**………⇩52へ　●**ブーメランを持っていない**…⇩108へ

375

壁が崩れると、そこに部屋が現れた。中には小さな妖精がいた。閉じこめられていたらしい。妖精は、礼を言うように、ぼくの周りを飛ぶと、ほおにキスをして、どこかに飛んでいってしまった。少しだが疲れが取れた（**ハートが2個回復**）。

⇩466へ

376

球体に戻った光はアグニムの方に跳ね返っていった。アグニムの目が大きく開いた。その顔には恐怖の色が浮かんだ。魔法を跳ね返す。それがアグニムに限らず、魔法を使うものにとって、一番効果のある撃退方法なのだ。自らの魔法を受けて、アグニムの体が真っ青な炎に包まれた。火の粉を巻きちらしながら、アグニムはゆっくり近づいてくる。業火に焼かれながら、アグニムは奇怪な話を始めた。

「んふふふ、ははは、無駄だ。わしが死んでも、あのお方が甦る。あのお方が甦れば、わしも永遠に生き続けることができるのだ……。死んだところで、闇の世界が光の世界を飲み込めば、黄泉こそ光……。同じことよ……」

グラリとアグニムの体が地面に倒れた。同時に塔を支えていた骨がゆらぎ、全体が音を立ててくずれ始めた。

「うわあああああぁぁぁっ」

ぼくは永遠とも思える長い闇の中をただ落下していった。

⇩13へ

377

静寂が戦いの終えた闘場を支配した。聖なる静寂。天井に小さな光の点が現れたかと思うと、その点は幾つにも分かれ、数を増やし、広がり、見る間に小さな光の雲になった。

376〜377

377●クリスタルは、ぼくに近づいてくるうちに薄れ、ぼくの腕の中に、いつの間にかゼルダ姫が抱かれていた。

雲を構成する光の粒は次第に寄り集まり、大きな結晶に変わった。クリスタルの結晶。その透んだ光の壁の中にゼルダ姫がいた。クリスタルは、ゆっくりと、ぼくの前に下りてくる。ぼくに近づいてくるうちに、クリスタルは薄れ、ぼくの腕の中に、いつの間にかゼルダ姫が抱かれていた。

●Jにチェックがあれば……⇩444へ
●Jにチェックがなければ……⇩293へ

378

「残念だけど、持ってないんだ。」
そう言うと、サルキッキはさっさとどこかに行ってしまった。あきらめのいい奴というかなんというか。少し残念な気もするが、仕方ない。
1人で進んでいくと小さな建物が見えてきた。小さいとはいえ、よく見ると一応神殿のようだ。闇の神殿ではないけれど……。

●用はない。先を急ぐ……⇩319へ
●とりあえず、覗いてみる……⇩57へ

379

一刻も早く先に進まねば。ぼくは階段目掛けて部屋を横切った。半ばまで行った時、床のタイルが襲ってきた。かまわず駆け抜ける。背後から来たタイルを階段の陰に回りこん

でやり過ごす。しばらくすると、すべてのタイルが階段に当たってくだけ散った。ヒラリと階段に飛び乗り、上に向かって駆け出した。

⇩334へ

380

少し進むと、透明な水をたたえた四角い池があった。池の上には、壁をうがってロウソクが置かれている。わずかな光が、静かな水面にチラチラと反射していた。不規則な輝きが、ここだけ別な空間のように思わせる。実際、その光の届く範囲は石の壁さえ妙に暖かく見える。

フワリとした雰囲気が、目の前で形になった。ぼくは目を疑った。水の上に、羽の生えた女の人が浮かんでいるのだ。これこそ、噂に聞く妖精という奴なのか。蝶の女王を思わせる、その美しい人は、その美貌に似合った澄んだ声で語り始めた。

「お待ちしていました、勇者様」

「勇者？　ぼくは別に……」

「封印戦争から数世紀。ハイラルは、とても平和でした。しかし、その平和が破れてしまいました。少し前の年、原因不明の災いがハイラルを襲いました。疫病やかんばつ、それらは魔法の力でもどうすることもできません。そこに、あの男が現れたのです。男の名はアグニム……」

「司祭様……」
「災いを不思議な魔法で鎮めたアグニムは、七賢者の再来として王に重用され、城に入りました。城に入るや、アグニムは王にも勝る権力を手に入れ、好き放題に動き始めたのです。アグニムは七賢者の血を引く娘たちを生けにえにし、夜な夜な妖しげな儀式を行っています。何かがハイラルに起ころうとしています。アグニムを捕らえて、その陰謀を阻止しなければなりません」
「アグニムは、どこにいるの？」
「城の奥に、独自の結界を張っています。まだ近づくことはできません。まず力をたくわえるのです。あなたが最後の希望なのですから……」
まっすぐ、ぼくの目を見つめて妖精は言った。ぼくが勇者で、最後の希望？　一度は忘れた疑問が頭をもたげた。不思議そうなぼくを、妖精は満足したように微笑みながら見つめている。ふと気づくと、その姿は薄く消えかかっていた。
「待って。まだ聞きたいことが……」
妖精の姿は光の中に溶けこむように消えてしまった。勝手に言いたいことだけ言って、いなくなってしまった。おじさんの言っていた教会の神父さんやサハスラーラという人なら、何か知っているのだろうか。ぼくは抜け穴を出ると、教会に向かった。

⇩37へ

381

扉を開けたとたん、急激な冷気がぼくの体を凍てつかせた。部屋の中にいたのはシュアイズと呼ばれる、氷のダンジョンの主だ。ぼくはクリスタルの少女たちから、直接頭の中にインプットされたイメージでそれを知っていた。

雲の塊とも、目玉の化け物ともつかぬモンスターが、青く透き通った氷の中でこちらを見ているのだ。そして、急激な冷気が奴を中心に放たれている。長い間、この部屋にいれば多分、凍え死んでしまうだろう。シュアイズ本体は、氷の盾に守られているのだ。奴を倒すには氷をどける必要がある。氷の塊なら……。

●ファイアロッドがある………⇩247へ
●ファイアロッドはない………⇩218へ

382

ズン。足が地面に着いた。

真四角な黒い闘場。四隅に燭台がある。ガノンはここから闇の世界に帰ろうというのか。

反るようにして、戦闘の構えを取る。背中に盾と弓、腰にマスターソードとアイテムの入った革袋。すべて、これまでの戦いで得た物だ。武器、道具そして経験と知識。

奥でブスブスとうずくまっていた黒い炎がブワッと膨れあがる。豚を醜く獰猛にしたよ

382●奥でブスブスとうずくまっていた黒い炎がブワッと膨れあがる。豚を醜く獰猛にしたような顔……。ガノン!!

うな顔。下顎から伸びた牙が頬まで伸びている。顔から下はブクブクと太り、まるで金に狂った富豪王のように着飾っている。
「ガガガガガガガ」怒りか、笑みか。
ガノンは不気味な声を上げ、ドクロのついた三つ又の矛を構えた。
さあ、戦闘開始だ！

●**銀の矢を使え！……………⇩96へ**
●**剣で斬れ！………………⇩427へ**

383

バリバリ言ってるそいつに、えいっと剣をふりおろす。剣はまちがいなく、バリの脳天を撃ち砕いた。手応えあり！
ところがその瞬間、剣を伝わって腕にしびれたような衝撃が上ってきた！　しまった、剣を通して電撃をくらったらしい！　おかげで一瞬目の前が暗くなり、剣から手を離してしまったが、奴を倒したのは確かなようだ。頭をふってめまいを治し、剣をひろう。奥のほうでゴオンと音がする。扉が開いたらしい**（ハートを1個消費）**　⇩290へ

384

マスターソードを腰に差し、かわりに、おじさんからもらった剣を台座に捧げた。これ

で、ぼくも完璧に勇者というわけだ。
頭の中で、ゼルダ姫の声がした。
「急いでください。今日が生けにえにされる日です」
何だって、ずいぶん急じゃないか。ともかく城へ急がなければ。

⇩47へ

385

考えて分かるものでもなさそうだ。ともかく何とかしなければ……。

●剣で殴る……⇩155へ　●弓矢で射る……⇩446へ
●ハンマーで叩く……⇩285へ

386

滑るので慎重に歩いていくと、途中で道がとぎれているのに突き当たった。もし調子にのって走っていたら、いまごろこの下でのびていたかもしれないな。しかし、うまく渡らないと結局そうなってしまうし。でもこんな時のためにフックショットという便利なものがあるんじゃないか。ひっかかる物がみあたらないが、えいっと投げてみる。穂先の鉤の部分ががっちりと氷につきささって、案じたほどのこともなく渡れた。そのむこうには扉が見える。

⇩38へ

387

もうガノンは死んでいる。しかし、ぼくも動くことができない。こちらに向かって、炎を吹き上げたガノンが倒れこんでくる。それを避ける力さえ、ぼくには残っていなかったのだ。紅蓮の炎の中に、ぼくは飲まれる。

ハイラルの平和を守った充足感が、いくらか死の苦痛を和らげてくれてはいたろうか。

END

388

満たされた水を渡り、次のフロアに上がると扉があった。

開けてみると小さな部屋になっている。中にあるものはといえば、宝箱がひとつ。このためだけの部屋らしく、ほかには何にもない。

開けてみると、中には新しいアイテムが入っていた。槍みたいな鉤と握りがあって、それが鎖で繋がっている。それに、引っ張ってみると鎖がのばせるみたいだ。フックショットと言うものだ。これはこれでおもしろいし、使うときもあるだろう。もちろん、もらって行く（**フックショットを入手**）。

部屋の奥には扉がある。さて、次の部屋に進もう。

おや、ここの扉はあたりまえに開くな。

⇩228へ

389

災いの池。その名が示すとおり、池の水は深くよどんで、いかにも何かありそうだった。立て札には「池に物を投げ込むものに災いあり」と書かれている。しかし、女神様は、ここに何か投げ込むようにと言っていた。災いが怖くて、ガノンと戦えるか。ぼくは立て札を引っこ抜くと、池の中央にある石めがけて放り投げた。
立て札は大きな水音をあげて、幾重もの波紋を作った。その中央から、ボコボコという泡と共に、巨大なナマズが現れた。
「こいつが……、災いの正体！」
ぼくは剣を抜いた。
が、ナマズは、寝呆けた顔で大きなアクビをすると、ぼくにポーンとメダルを放ってよこした。クエイクのメダルだ。こ、こんな簡単に手に入るなんて……。
「ふぁぁぁっ、まったく、かなわんなぁ。それを持って、さっさとどこかに行ってくれ」
それだけ言うと、ナマズは再び水中に没し、よどんだ水は何事もなかったかのように静まりかえった。ともかく、これで亀岩の中に入ることができるわけだ。女神のもとへ急いで戻ろう。**（クエイクを入手）**

⇩22へ

390

塔の中に踏み込もうとしたが跳ね返された。結界が張ってあるようだ。なんとかして突破しなければ、考えをめぐらせて結論を出した。

●マスターソードを使う……⇩463へ

●ペガサスの靴を使う…………⇩390へ

391

シュアイズが3匹に分かれた。

空中を滑るようにして3匹のシュアイズは、ぼくのまわりを囲んだ。背後をとられるのはまずい。正面のシュアイズにフェイントをかけて、左のシュアイズを切りつけた。軽い手応えで1匹切りふせて、壁まで走る。そして壁を背にして、残りの2匹と対峙した。

「ぐっ」シュアイズの体当たりを受けてぼくはよろめいた。

シュアイズの体は氷のように冷たく、触った場所の皮膚を凍らせ、そのまま凍った皮膚をひき剝がしていく**(ハートを4個消費)**。右のシュアイズに盾を投げつけると、ぼくは素早く両手切りで、もう1匹を切り捨てた。1対1なら負けはしない。勝負はすぐについた。

シュアイズの断末魔の咆哮が、部屋を震わせた。ぼくが勝ったんだ。

⇩168へ

392

オカリナを吹くまでもなかった。軽やかな羽音と共に鳥が現れた。
（さあ、最後の戦いだ。勇者よ）
鳥も目的を知っていた。いや、鳥だけではない。ハイラルの誰もが陰に日向に応援してくれていたのだ。おじさん、神父さん、サハスラーラ老、サルキッキ、キングゾーラ、盗賊や占い師、鍛冶屋たちも闇が晴れるのを待っている。みんなの祈りが、ぼくの背にある。ガノンを倒せと。光を取り戻せと。
振り向くと、ゼルダ姫と6人の娘たちがいた。姫は、ただ瞳を閉じた。姫の祈りはハイラルを救う広い祈り……。いや、ぼくの幸運を祈ってくれていることにしよう。鳥はひと声力強く鳴くと、ぼくを乗せてガノンを追った。

⇩462へ

393

壁は爆弾でこわすものと決まっている。床だって似たようなものだろう。点火し、さっと伏せると一瞬暗い部屋が赤く照らしだされ、にぶくこもったような爆音に続いて、ガレキの雨が降ってきた。それをはらいのけ、床をのぞきこむ。もとの暗さにもどった室内で、ひときわ暗い穴がぽっかりと開いている。その下は空洞だ。成功！　よし、下におりよう。

（爆弾を1個消費）

⇩282へ

394

左のほうへ分け入ってみると、口笛が近づいているのがわかる。やっぱりこっちでいいのかな。見るとキツネみたいなのがいる。口の動きからすると、こいつが口笛の主であるらしい。口笛が吹けるなら話も出来るんじゃないか？　話し掛けるとちゃんと返事が返ってきた。こんなことをいっている。

「光の世界からきたんだって？　いや実はぼくもそうなんだ。どうすりゃ帰れるのか、さっぱり分からないんで困ってるけど。なんで口笛を吹いてるかって？　よくぞ聞いてくれました。いや本当はオカリナを持ってたんだがね、光の世界に忘れてきちまったんだ。だから代わりに口笛吹いてたんだが、どうもいかんね。そうだ、光の世界にいけるんなら、ちょっと取ってきてもらえないかな」心細いその気持ちはよく分かるが……。

●そんな暇はない。断る……⇩**263へ**
●引き受けよう……⇩**413へ**

395

通路は前に行くか、左に曲がることもできる。どちらを選ぼう。

●左へ行く……⇩**436へ**
●前に進む……⇩**111へ**
●戻ったほうがいい気がする……⇩**262へ**

396

導火線を雨からかばいながら火をつけ、急いで岩の陰に爆弾を押し込んだ。爆発音と共に岩が吹き飛んだ**（爆弾を1個消費）**。

煙や火薬の匂いはすぐに雨が洗い流す。爆発のあとには、ただ岩の壁が立ちはだかるだけだった。ここは崖崩れのなごりなんだろう。

⇩416へ

397

溢れ出た水が作ってくれた道を渡って出たのは静かな広間だった。

左で正解だ！

これは一体？　そう、今広間で目にしているのは、岩塊が寄り集まったものが空中に浮いているという、非常識な光景なのだ。もしかして、これがこのほこらのボス、ワートなのだろうか？　だとすりゃ大当たりってことになる。

よく見ると、岩と岩とは密着しているのではなく、ときどきワサワサと動いている。そうか、岩をヨロイがわりにしているんだ。本体は中にあるというわけだ。ということは、まず岩をひっぺがして奴を剥き出しにしないと倒せないということだな。さて、どうやって剥いてやるか。

●**剣で撃ち砕く**…………⇩339へ
●**フックショットを使う**………⇩253へ

398

薄暗い長い通路に、ぼくの足音だけが響く。おや、左右の壁にヒビが入っているぞ。指でなぞると、かなり深そうだ。爆弾をしかければ向こう側にいけるかもしれない。

●右側に爆弾を置く……⇩115へ

●左側に爆弾を置く……⇩404へ

●爆弾の手持ちがない。または先へ進む……⇩203へ

399

城と同じように、ピラミッドの周りは堀で囲まれていた。橋が1本かかっているけれど、その前に杭みたいなものが邪魔になっていて渡れない。これが引っ込められれば、なんとか渡れそうだが。なにかたたく物が必要だ……。

●マジックハンマーがある……⇩59へ

●マジックハンマーはない……⇩106へ

400

左のスイッチを押すと左の扉が開いた。慌ててぼくは左の扉をくぐり抜けた。奥には下へと下りていく階段が見える。どうやらこの部屋が正解のようだ。

さあ、先へ進もう。

⇩238へ

401

速攻で勝負！　威力はともかく、いちばん手慣れた武器である剣を手に、一気に敵の眼前に肉薄する。ふところに飛び込めば、へたに攻撃できまいと読んでの作戦だ。ジークロックの複眼と至近でにらみあったとき、ぼくは自分の作戦に自信があった。複眼に一蔑くらわすと、仮面に剣を打ち込んだ。その瞬間、自信は畏怖にとってかわられた。カーンと乾いた音がするだけで、仮面には傷ひとつつかない！　予想以上の硬さだ。まさかこいつ、剣が効かないのを知っていたから、手を出してこなかったのか？　真偽を問う間もなく、奴の吐いた炎が体を覆った。くそ、もっと強　力な武器がいる！

●**ハンマーで砕け！**……⇩**223へ**
●**爆弾だ！**……（**ハートを1個消費**）……⇩**137へ**

402

ここまできて、そんな……。なんとかならないだろうかという思いで女神にたずねた。
「それがないと、亀岩の中に入れないのですか？」
「ええ、クエイクの魔法は災いの池にあります。災いの池に何かを投げ込んでください。クエイクの魔法を手に入れたら、もう一度ここに来てください」
女神のせいではない。万全を期さなかった自分のせいだ。しかしクヨクヨ後悔しているより災いの池に急いだ方がいい。

●ーにチェックがある……⇩34へ

●ーにチェックがない……⇩91へ

403

いろいろ試してみたが、やっぱり開かない。しかし、少女は助けなきゃならない。途方にくれているとサルキッキがまた現れた。
「だから助けてやるって言ったろ。」と言って笑う。
「キノコは本当に持ってないんだ、仕方ないだろう。」と答えると、
「じゃあ、ハート1個でいいや」ときた。こいつ、人の足元見やがって！　とは思うものの、背に腹は変えられない。猿の条件をのんで扉をあけてもらう。とんだところで手間をくってしまった**（ハートが1個減る）**。

⇩333へ

404

爆音の後、壁にぽっかりと穴が開いた。おそるおそるのぞき込むと、小さな妖精たちが軽やかに飛び回っていた。ありがたい。体を癒してもらうと、ぼくは先へ進むことにした。
（ハートを4個回復）

⇩203へ

405

一気に走りぬけようとしたが、ああ、この廊下、ずっと一直線だと思ったら途中で途切れているのか！　だがいまさら止まろうにも、廊下は氷でできていたんだった。ブレーキがきかない。止まらないぞ！

そのまま滑って、勢いあまってジャンプ！　ケガの功名、うまく飛び越したと思ったのもつかの間、渡った先には扉が！　今度こそ止まらなければぁぁぁぁ！

結局、扉に激突してようやく止まった。でも痛い**(ハートを1個消費)**。

⇩38へ

406

グルリと部屋を見回す。痛い思いをして到着したわりには、何の収穫もない殺風景な部屋だ。あきらめると、ぼくは上に続く階段を上り始めた。

いいかげん上るのにあきたころ、やっと部屋に行き当たったらしく足元が平らになった。しかし、そのとたん目の前にモンスターがゆく手を阻んでいるのも見えてしまった。剣を抜き、先手必勝！　と切り付けたが、あっさり倒せてしまった。気負ったぶん損したような気分だ。

⇩290へ

407

村のはずれの道を歩いていると、荷物の中でムーンパールが鳴っている。闇の世界に行ける、青い魔法陣に反応しているらしい。ムーンパールの反応に従って森に踏み込み、岩を押し退けると案の定、青い魔法陣が現れた。

●魔法陣で闇世界へ行くなら……⇩354へ

●もう少しカカリコ村を回ってみるなら……⇩268へ

408

洞窟の中にはやせこけた老人がいた。
こんなところでいったい何をしているのだろう。
「こんなところとは失礼な。ここはわしの瞑想室じゃ」
「瞑想？」
「世界が、こんなになってしまったんでな。その理由と対策を考えている」
「何か、分かりましたか？」
突然老人はポンと手を叩いた。
「そなた。勇者じゃな。いや、そうじゃろう。砂漠の神殿に、紋章を取りに来た……」
いったい何なんだ、この老人は。

「そうに違いない。神殿の中に入るにはの、ムドラの書と呼ばれる辞書が必要なんじゃ。そうじゃ。私の紹介でもらえるようにしてやろう。がんばりなされ」
老人はぼくの手に一通の封筒を握らせた。そんな辞書が何の役に立つのだろう。
ともかく、紹介状とやらを手に入れた（**Aをチェック**）。

⇩**79へ**

409

扉を開けて、次の部屋へと転がりこんだ。この部屋は燭台が1本あって、ほのかに明るい。みると左右と正面に扉があった。また選べということか！

●右の扉を選ぶ……⇩**2へ**
●左の扉を選ぶ……⇩**310へ**
●正面の扉を選ぶ……⇩**229へ**

410

取り出したマジカルミラーに偶然、外の光が反射して、少女を捉えた。
「何をするの！」今まで虫の息だった少女が飛び起きた。やはりか！
「正体を現せ！　ガノンの手先め！」
マジカルミラーでしっかりと彼女に光を集めた。その光に苦しむ少女の顔が醜く歪んだ。光が弱点なのか！　となれば正体は……。

「うぐ、今一歩のところで」
少女の姿が蜃気楼のように揺らいだ。そして現れたのは巨大な化けネコだった。口から尖った牙がのぞき、爪はすべてを切り裂くかのように鋭い。
「小細工はここまでだ。ニセ勇者よ、大盗賊ブラインドの力を見せてやる」
ぼくは剣を構えた。

⇩281へ

411

しかたなく高い空を見上げていたぼくの頭にある考えがひらめいた。あの鳥なら沼への入り口を見つけられるかもしれない。
オカリナを取り出して吹いてみる。澄んだ音色が空に吸い込まれていく。しかし、あの鳥は本当に来るんだろうか。このオカリナの音が届くのだろうか。
空の一点に黒いしみが見えた。それがだんだん大きくなる。来たんだ！
（少年よ、私をよんだかね）
ぼくの腕にとまってその鳥は心に話し掛けてくる。ぼくは沼への入り口を見つけて欲しいと頼んだ。
（そんな必要はない、少年よ。沼まで送ってやろう）
そう言うと鳥は空へ飛びたち、みるみるうちにぼくよりも大きくなった。

（体力を消耗するからあまり使えん技だが、おまえの頼みだからな）
鳥はそう言うと、ぼくをつかんで飛び上がった。

⇩109へ

412

しかし、サハスラーラ老は甘くない。次の言葉でピシャリと気のゆるみを正された。
「じゃが、資格があるだけだ。勇者であるかどうかは、ゼルダ姫を助け出せるかどうかにかかっておる。これからが本当の戦いじゃ」
これからが本当の戦い？　今までの戦いだって苦労の連続だったのに……。
「時は近づいている。明日にもゼルダ姫は生けにえにされ、闇の世界が解き放たれるやも知れぬ。改めて頼もう。ハイラルを救えるのは、勇者よ、おまえだけだ」
不思議な力が体を包んだ。気がつくと、ぼくは塔の前に立っていた。さんざん傷ついた体は癒され、疲れも残っていない。ただ、くぐりぬけてきた戦いの記憶が、また1つぼくの中に自信として残った**（ハートが1個増える。ハートを全部回復）**。
さあ、アグニムの待つ城に急ごう。

⇩231へ

413

オカリナは光の世界の森のどこかに、半分埋まっているらしい。キツネ顔からシャベルを借りて、光の世界へ行く。
「なあ、どうやって光の世界に帰るんだ？」と聞かれたので、
「これを使うのさ」とマジカルミラーを取り出し、彼の目の前から消えてみせる。そしてぼくの目の前では、風景が消えた。

⇩15へ

414

村人らしいのが何人かたむろしていた。この辺の人間なら、なにかぼくの知らない事情にくわしいかも知れない。このあたりで変わったことはないか、伝説にあるような事柄について見聞きしたことはないか、訊ねてみよう。すると1人がこんなことを言った。
「ふうん、へんなことに興味をもつんだな。そういえば以前のことだが、迷いの森で本当に迷っちまった時だ。トンネルを2つばかしくぐったとこに、きれいな剣があったんだ。それが、ごたいそうにさしてあってな。あんまりきれいだったんで持っていこうかと思ったが、どんなにひっぱってもびくともしない。で、あきらめて帰ってきたってわけだ」
もしかして、それがマスターソードかも知れない。人の話は聞いてみるものだ。村人にお礼を言い、先を急ぐ。

⇩234へ

415

カンテラを取り出して辺りを照らした。どうやら、ここも何かの部屋らしい。まるで地下牢とでもいった殺風景な造りだ。左右に粗末な扉がある。壊れかけていて、どちらにも行けそうだ。さて、どっちに行こうかな。

●右に行く……………⇩474へ　●左に行く……………⇩114へ

416

どしゃぶりの中を歩くぼくの目に、小さな洞窟が映った。少しだけ雨宿りがしたい、疲れたぼくの体がそう訴えている。痛む腕を押さえて洞窟へ脚を踏み入れた。湿っぽい洞窟の中で比較的乾いた場所をみつけ座り込むと、ぼくはぼんやりと外を眺めた。雨がぼくを憂鬱にするのだ。

「やあ、君イ、元気かな」

ぼくはあわてて飛び起きた。洞窟の奥から大きな熊男が現れたのだ。

「いや、ぼくは怪しい者じゃないんだね。黄金の力を探していたらこんなとこに迷いこんでしまったんだね」どうやら嘘ではないらしい。しかし、その生徒に話しかけるような話し方はなんとかならいないのだろうか。

「それでね、この沼はねゲルドーガの魔力でこうなったんだ。だからね、それを上回る魔

法があれば雨もやむんだ！　分かったら出てってね。君がいるとモンスターが集まってくるから」やれやれだ。ぼくは洞窟をあとにした。

⇩138へ

417

次の部屋は立ち上がることができないほど小さな部屋だった。転がりこんだ先には、宝箱があった。ほとんど宝箱を抱き抱えるようにして座り、箱を調べた。カギはかかっていない。フタは簡単に開いた。中には古びた厚手の手袋が入っていた。おそるおそるはめてみると、指先から肩にかけて、ビーンと力がみなぎった。

「これは伝説のパワーグラブ……」（**パワーグラブを入手**）

ハイラル創造の三神のうちの1人、力の神が神殿を立てた信心深い男に与えたといういいつたえを知っていた。手袋をした男は一夜にして石の神殿を造り上げるのだ。

まさに百人力のパワーを得て、ぼくは自信満々で次の部屋に向かった。

⇩294へ

418

扉の前に立つと、バーンと破裂するような音が響いて扉が消えた。中は宮廷の広間のような、だだっ広い空間だった。妙な位置に立つ柱のすべてに、細かな彫刻がほどこしてある。よく見ると、化け物が人を襲って食べている地獄図だった。ここの主人の趣味の悪さ

がうかがえる。よく見ると奥のカーテンがそよいでいる。近づくと下へ下りる階段を見つけた。

●**虎穴に入らずんば虎児を得ず。行ってみよう**……⇩151へ

●**君子は危うきに近寄らず。戻ろう**……⇩39へ

419

予感は……、当たった。

階段を下りたところは大きな広間になっていた。しかし、そこには巨大なもののうごめく気配がぷんぷんと漂っているのだ。武器をたしかめて広間に躍り出る。

そこにいたのはうずくまる山のように大きな、サソリに似たモンスター・ジークロックだ。大きさからいって、ボス級のやつに違いない。やっぱり、大げさな仕掛けの後ろってのはこういうことになっているらしい。赤い体をしているが、顔だけが仮面を覆っているように見える。なかなか硬そうだ。奴は壁を背にして動きだした。背後にまわる余裕はない。とすると、まずあの仮面を砕くしかないみたいだ。奴はこっちに向かってくる。

迷ってるひまはない。

●**ハンマーで粉砕だ！**……⇩223へ　●**爆弾でふっとばす**……⇩137へ

●**剣でブチ抜く**……⇩401へ

420

突然、目の前の壁面からレーザー光線が射たれた。反射的にポケットの中からミラーシールドを取り出した。一瞬のうちに、体の周りが銀色の膜で覆われた。長くは持たない。レーザー光線の中を駆けぬけ、シールドを元に戻すと、扉は目の前だった。

⇩41へ

421

バーン。勢いよく正面の扉が開いた。乾いた土壁に囲まれた薄暗い通路を、大股で進んでいく。怖いからではない。急いでいるのだ。言い訳ではない。1人で歩いていると、つまらない考えが始終頭の中を去来するのだ。進むにしたがって暗さはドンドン深くなっていき、不安が頭の中を支配しはじめた。

⇩264へ

422

こっちにはマスターソードがある。ダダッと踏み込むと、コッピもダダッと突進してきた。飛び上がって真一文字に頭から切り下げ……ガチン。一瞬遅く飛び上がったコッピは尖った鼻面で剣を受けとめると強烈な炎を吹きつけてきた。

「あちちちち」「あちちちちち」

うそつけ。熱くもないのにコッピは、ぼくの悲鳴と動作を真似して後ろに飛んだ。こっ

ちは軽い火傷をしたというのに、むこうは涼しい顔をしている（ハートを1個消費）。

マスターソードに強い奴もいるのか……。それなら今度は弓だ。

⇩27へ

423

ようし、ファイアロッドだ。見てろよ毒蛾野郎！　新アイテムを手に、ガモースの放つ弾をかわし、下にもぐりこむ。頭上には極彩色の大きな羽がひろがる。これだけ大きければ、目をつぶっていたって当たるぞ。くらえ！

ロッドから火の玉が発射され、ガモースの羽に命中した。火はみるみる燃え広がり、一方の羽を失ったガモースは失速して部屋のすみに墜落した。それでも足で立ち上がり、のこった羽をばたばたとはばたかせる。しかし、もうさっきまでのようには動けないはずだ。剣でとどめを刺す！

⇩24へ

424

目玉が攻撃に移る前に、矢をつがえて片っ端から小さな目玉を射ち落としていく。しかし、半分程で目玉どもとの距離はつまり、剣を使わなければならなくなった。ぼくは剣をとり、剣を振り回して小さな目玉の中に躍り込んでいった。目玉は妙に弾力があって切りにくい。そして、目玉どもの表面についた粘液は酸を含んでいるらしい、皮膚につくたび

に熱くただれていく（ハートを2個消費）。
しかし、なんとか目玉をすべて切り伏せた。残るは大きな目玉だけだ。
⇩190へ

425

雲間から日が差し込む。日はピラミッドの頂上に開いた穴から、激しい戦いを終えた、この部屋の闇も払った。と、封鎖された空間だと思っていた部屋の奥に、続き部屋があるのが見えた。そこから、この世の物とは思えない輝きが漏れている。いったい何だろう。ぼくは疲れた体にムチ打って、奥の部屋に入っていった。
⇩481へ

426

確かにエーテルの魔法は強力かもしれない。しかし、ぼくは魔法の力を探すより、一刻も早く、姫を助けだそうと思った。後々の戦いで後悔することになるかもしれない。しかし、それはそれで運がなかったのだ。ぼくが本当に勇者なら、天は見捨てないことだろう。
⇩311へ

427

三つ又の矛を剣で跳ねのけ、ガノンの懐に飛び込んだ。するどい突きから、反転して回

転斬り。遠心力が加わった剣の威力が、ガノンの胸に真っ赤な血の線を描く。
「グガガ、その剣は退魔の剣……。1度ならず、2度までも、オレの肉を裂くか……」
続けて斬りこもうとしたが、ガノンは巨体のわりに身軽く後方に飛んだ。
傷口から血があふれ、息が荒くなっている**（ハートを2個消費）**。
ぼくはマスターソードを握り直し、必殺の突きを繰りだした。
●Gにチェックがあれば……⇩449へ
●Gにチェックがなければ……⇩364へ

428

どうにも気になる。床の感触をブーツでなぞっていると、床下からサラサラという音がするのに気づいた。
「やっぱり、何か仕掛けがあるな……」
少し、先へ足を伸ばして床を踏んだ。床下の音はゴロゴロと大きくなっている。何かが崩れていくような音だ。崩れる……？
「まずい！　床が崩れる」
気づいて走りだしたが遅かった。足元の床は大きく傾き、ぼくは大小の岩と共に暗闇の中に落ちていった**（ハートを1個消費）**。
⇩284へ

429

大きな体をブルッと震わせると、テグロックはゴォーンというような咆哮をあげた。するどい牙の生えた真ん中の首が、いきなり伸びて噛みついてきた。肩を噛まれながらも、大きく開けた口の中にマスターソードを突っ込む。剣の硬度とテグロックの皮膚の硬さは、ほぼ同じらしい。残るは気力のみ。ついに、テグロックの上顎から鼻先にかけて血色の線が走る。テグロックの離れた目が、さらに左右に分かれ、顔面が真っ二つに切り裂かれた。

（ハートを2個消費）

●ハートが残っていれば……⇩377へ　●ハートが残っていなければ…⇩241へ

430

剣は倒れるように、ワートの脳天を切り裂いていく。その光景が、ぼやけた視界の中をストップモーションのようにゆっくりと見えた。そのままワートのやわらかい体はまっぷたつに割れ、からみついていた触手から力が抜ける。一緒にぼくの体からもドッと力が抜けてしまい、触手の束といっしょに膝をつく。しかし、肩で息をしながらでも立ち上がらなくては。敵を倒すだけじゃなく、助けなきゃならない人たちがいるんだから。

ここに囚われた少女も、やはりクリスタルに封じ込められ、ワートの死とともに開放されていた。

「助けてくださってありがとう。でもまだゼルダ姫がとらわれているはず。あの方を助けてさしあげて。それが出来るのはハイラル騎士の血統を継ぐ勇者、すなわち、あなただけなのです。」そう言って彼女もまたぼくの手を握り締めてくれた。
また力と勇気が注がれてくるのがわかる。さすがは賢者の娘ということか、それとも人が本当にその気になれば、だれでもできる事なのか。さあ、次はどこにいけばいい？
（ハートが1個増える。ハートを全部回復）
⇩187へ

431

剣を引き抜くと、そこからも炎が吹き出した。炎の直撃を避け、ガノンの顔面を蹴り、後方に飛ぶ。肩から、腹から、爪先から、ガノンの体中から炎が吹き上げる。まるで人間の形をした火山のようだ。血のように熱い溶岩が流れ、怒気のように炎を吹き出した。大小の溶岩が、ぼくを襲い、炎が地を這い迫る。凄まじい熱気の中、ガノンは火の魔神となって、ぼくに迫る（ハートを5個消費）。
●ハートが残っていれば……⇩126へ
●ハートが残っていなければ…⇩387へ

432

スイッチを引くと、とうとうと水が流れだし、みるみるうちに水かさがふえていく。そ

して足元まで満ちると、とまってしまったようだった。なるほど、「水のほこら」とはこういう事だったんだ。これなら泳げば渡れそうだ。濡れるけど、まあ仕方ないだろうな、これは。泳いでむこうに渡ってからしばらく行くと、こんどは頭上から階段が下りている。でも、どういうことか高さが半端でここからじゃ届かない。どうやって上れというんだろう。まてよ、ここも水を満たせば上れるはずだ。

するとまた水門が……やっぱりあった。しかしまた2つあるぞ。

●やっぱり右だ……………⇩95へ　●今度は左だ……………⇩308へ

433

やはり明かりは扉の鍵穴から漏れたものだ。1回転して、その前に立ったが、扉の前を赤い柱が塞いでいる。クリスタルスイッチの柱だ。さっきのクリスタルスイッチが、こんなところに作用しているとは……。愕然としている背後から、ビームが直撃し、背中に熱い痛みが走った**(ハートを2個消費)**。もどってスイッチを入れなおさなければ、先に進めないようだ。くそぅ! **(Lのチェックを消す)**　**⇩334へ**

434

こんなところにタコの石像がある。近くに海もないのに何を考えているんだろう。どう

もわざとらしいけど？　なに？　オカリナを吹いてみろって書いてあるぞ。

●**オカリナを吹いてみる**……………………⇩**196へ**

●**オカリナがない、または吹かない**……………⇩**107へ**

435

星形スイッチを避けて、穴の手前まで行ってみた。どうがんばって手を伸ばしても扉に届かない。ここから、どこかに移動するとすれば、この穴から下に下りるぐらいしか無さそうだ。別に飛び下りられない高さではない。

●**飛び下りる**……………⇩**112へ**　●**下りずに何か考えよう**……………⇩**153へ**

436

通路はまっすぐ前へとのびている。

●**前進あるのみ**……………⇩**12へ**　●**戻る**……………⇩**395へ**

437

やってきた部屋はひときわ暗かった。おかげで様子がいまひとつ分からない。なんとなく不安になってくる。道を誤ったかな？　しかし手探りで調べると、燭台が４つあるらし

い。蠟の手触りもするから、明かりをつけるのは可能みたいだ。さて、すると口火が必要になるが？

●カンテラをもっている……⇩212へ
●カンテラはなくした…………⇩51へ

438

闇の世界のスタート地点、ピラミッドの上に戻ってきた。なまあたたかい風が、ぼくの頬をなでて通りすぎていった。不安が黒雲のように、ぼくの胸にわいた。⇩220へ

439

「あのお、あなたが噂の勇者様で……」
「なっ」
いきなり後ろから話し掛けられて、慌てて振り向いた。立っていたのは気弱そうなヤモリである。といっても赤と黒のまだらがやはり気持ち悪い。
「勇者様に会えば、光の世界へ連れて帰ってくれるとお聞きしたもので、厚かましくもお願いに上がった次第でございます。はい」

●連れて帰ってあげよう……⇩222へ
●今はそんな暇がない…………⇩354へ

440

太陽が照りつける下は、皮膚を焦がすような暑さだが、日陰に入ると涼しくなる。それが砂漠の気候なはずだった。が、神殿内部は、まるで炉の中にいるような熱気で、乾燥しきっていた。正面に扉がある。把手に触れようとしたが、熱くて触れない。力いっぱい蹴飛ばすと扉が開いた。中はタイルが敷きつめられた明るい部屋だった。正面に扉がある。

●無視して急ごう……………⇩61へ　●一応、ようすを見よう………⇩261へ

441

「すいません」目つきの悪い男が振り向いた。いやな気配がする。これはただものじゃないな。ぼくは気づかれぬ程度に身構えた。

「すいません、ここら辺に地下に下りるような場所はありませんか」

「ああ、なんだ。ブラインドの隠れ家を探しているのかい」

と、男は満面に笑みを浮かべた。どうやら悪いやつでもないようだ。

「こっちですよ」

と、指差した方を向いたとたんだった。ぼくは突き飛ばされた**（ハートが1個減る）**。

「何をするんだ」

男は速足で逃げさったあとだった。ペガサスの靴より速いとは！

⇩82へ

442

不快な粘液の中に、大きな目玉の中身がドロリと流れていく。それはもうどこからがゲルドーガの体だったのか分かりはしないだろう。その中にクリスタルの澄んだ輝きが見えた。ぼくはそれを拾いあげた。

⇩267へ

443

手探りに壁を調べ、ときどきは剣のツカでたたいてみたりするけれど、どうも変わったところはなさそうだ。いや、ちょっとまて。指にひっかかる所がある。よく見てみると、そこだけ壁が割れて継ぎ目みたいになっているところがある。もしかして、ここが開くんだろうか？　しかし手で引いても押しても動かないし、剣をこじ入れてみてもだめだ。どうもスイッチか何かがいるようだ。像のほうを調べてみよう。

⇩130へ

444

しかし、ゼルダ姫の意識が戻らない。時間が経ちすぎたのだろうか。

「ゼルダ姫。ゼルダ姫」

いくら呼び掛けても意識が戻らない。間に合わなかったのか。不覚にも涙がこみあげてきた。ぼくの目からこぼれ落ちた涙が、姫のほおに落ちた。

「勇者様が泣いてはおかしいですわ」
「ああっ、ひ、姫え……」
　情けない声を上げてしまった。でも、嬉しかったのだから仕方がない。うっすらと目を開けた姫は、とり乱したぼくの様子を見て、にこやかに笑った。その笑顔が見れれば、ぼくはもう何もいらない**（ハートを全部回復）**。

⇩456へ

445

　スイッチを動かすと、左の扉が開いた。注意しながら中に入るが、何もいる様子はない。ほっと一息ついたが、まだ気は抜けない。部屋の中を見回して観察するが、他に扉はないし、特にこれといったものは……いや、足元に何か描いてある。黄色い線で書かれた図形……魔法陣だ。

⇩17へ

446

　1つ目巨人の像……。そういう場合はたいがい目を射抜くってことになっている。ぼくは弓を取り出して、像の目を狙った。その中心に矢が突き立つと、何か歯車の回るような音が聞こえはじめた。音は次第に大きくなり、ついにゴゴゴという巨大な振動音を立てながら、背後の扉が開いた。下に下りる階段がある。弓で正解だったね。

⇩419へ

447

日がかなり西に傾き、辺りは燃えるような赤に染まっている。森の木々が、カカリコ村が、墓場が、ものすごいスピードで視界をよぎっていく。全速力で城にたどりついたのは、ちょうど日が落ちた時だ。さあ、城へはどこから入ろうか。

●抜け穴から入ろう……………⇩**85へ**
●正面から斬り込むぞ…………⇩**33へ**

448

三つ又の道に出た。道の両脇はよく手入れされた生け垣に囲まれてはいるが、人の姿は少ない。南は村外れらしく道がない。さて、どっちに行こうか。

●東へ……………⇩**140へ**
●西へ……………⇩**407へ**
●北へ……………⇩**306へ**

449

激突。巨大なガノンに臆せず、真っ向から突進する。「グガアアアアアア！」マスターソードはガノンの腹に深々と突きささった。ガノンは矛を振りあげ、ぼくに叩きこもうとするが動けない。腹を蹴って、反動で剣を抜き、また元の位置に帰る。今頃、ガノンは矛を地面に撃ちつける。床が割れた。まだまだ力は衰えていない。

⇩**207へ**

450

狙いをさだめてフックショット発射！　穂先が銀色の閃光となって宙を裂く。ガモースはあざわらうかのように避けた……つもりだろう。だが、この武器は投げたら投げっぱなしじゃあない。敵の移動方向にむけて、握りをぐっとひっぱる。鎖にひかれ、穂先は大きく弧をえがくようにガモースを横から襲った。鉤が羽をとらえ、切り裂く。ガモースは空中でふらついた。よし、この手でいけるぞ！

だが調子にのって2発目をくりだした時、いまいましい床がまた動きだした。しまった！ぼくの足元がふらついた瞬間をねらって、ガモースが弾を吐き出した。3発中1発が直撃！**（ハートを1個消費）**しかしこっちの武器もまだ空中にある。足場の移動のおかげで、鎖は空中のガモースをとりかこむ形になっていた。いまだ！　一気にひっぱると、鎖は一方の羽にからみつき、ひきちぎった。羽をもがれた敵は失速し、ふらふらと落ちていく。よし、剣でとどめを！

⇩24へ

451

レバーを引くと、天井から爆弾が降り注いだ。やっぱりトラップだったか。煙でかすむ目をこすりながら、ぼくは元の部屋へもどり、奥の扉に手をかけた**（ハートを1個消費）**。

⇩229へ

452

通路を出ると、そこにあった見張りの塔は奇妙な装飾を施され、奇怪な悪魔の塔に変わっていた。城壁に沿ってグルリと回って、塔の前に着いた。

⇩390へ

453

すばやくガノンは矛をくりだしてきた。避けながら、ぼくは次の攻撃に思いを巡らす。

●アイスロッドで攻撃だ！……⇩464へ　●ファイアロッドで攻撃だ！…⇩370へ

454

木陰から突然体中刺だらけのクロウリーが飛び出した。剣で弾き飛ばしたが、いつのまにか足を刺されていたようだ。ヒリヒリ痛むが、今は我慢しよう**（ハートを1個消費）**。

⇩55へ

455

中に入ると、最初に宝箱が目についた。あたりを見回すと下へと下りる階段があるだけだ。もっと下へ行けということか。その前にとりあえず宝箱を開けておこう。

冷たい宝箱を、手が凍りつかないように注意して開けると、中にはアイスロッドが入っ

ていた（**アイスロッドを入手**）。精神を集中することで、先端の青い宝石が冷気を放つ伝説のロッドなのだ。
さて階段を下りようか。来いと言うなら、誘いにのろう、氷の迷宮の化け物よ。

⇩164へ

456

束の間の和やかな雰囲気は、突然の真っ青な光の出現によって破られた。数条の光の線が部屋中を取り巻いた。その内の2本の間に、見覚えのある男の姿が浮かび上がる。
黒焦げの砂漠風の衣服から、焼けただれた皮膚が見えている。山猫の目を持ち、直立した爬虫類のような姿。アグニムが地獄の底から甦ったのか……。
「闇の世界が光の世界を侵食し始めた時、私に2つ目の命が与えられたのだ……」
ゼルダ姫を後ろに下がらせて、ぼくはアグニムの前に立ちはだかった。アグニムは両手を前に差し出した。手の平に青白い光の球体が産まれる。アグニムが気合を込めると、球体が真っすぐこちらに飛んできた。しかし、この魔法は見切っているのだ。マスターソードを握り直し、アグニムに向かって光球を跳ね返した……。

⇩321へ

457

「姫、相手が悪いです。ここは退却……」
　クルリときびすをかえし、姫に向かいあった。姫は、その場を動かない。責めるような悲しそうな目で、ぼくをにらんだ。そんな目をされては逃げられない。
　バシッ。背中に強烈な衝撃をくらった。アグニムは両手の先から光の球を発射した。激痛が走る**（ハートを1個消費）**。しかし、おかげで目が覚めた。
「待っていてください。ぼくは逃げません」こうなったら、戦うしかないぞ。

●マスターソードを抜く……**⇩235へ**

●弓矢で勝負する……………**⇩104へ**

458

　とっさにペガサスの靴をはいてダッシュ！　このスピードなら間に合うはず……間に合うと思う……間に合ってくれ！
　しかしとうとう足元の床が崩れた。あと少しだというのに！　必死の思いで落ちていく床を蹴った。同時に手をいっぱいにのばす。指にたしかな手応えを感じる。間一髪、助かった！　しかしまだ安心するのは早い。よじ登るのにせっかく回復した体力が……いや、助かるのにせこい事は言うまい。ハート1個分で上ることができた。次の部屋までは、残った部分を歩いていけそうだ**（ハートを1個 消費）**。

⇩277へ

459

かなり長い間、ぼくは階段を下りていった。そうとう深そうだ。これはかなり目的の場所に近づいているぞ。そう思った瞬間、階段を踏み外した。ゴロゴロ転がりながら、ぼくは部屋に転がりこんだ。

⇩406へ

460

なるようになるさ。真っ暗闇の中に、ぼくの体が浮いた。すぐに後悔した。ポンと下りられる高さじゃない。こらえたつもりの悲鳴が石造りの空洞に小さくこだまする。

「ああああああぁぁぁぁ……」

ズル。ベタン。ガシャン。

コケの生えた石畳に雨が吹き込み、すべるったらありゃしない。着地の瞬間、引っ繰り返り、カンテラを壁に叩きつけてしまった。情けない音の連続が、自分の無鉄砲さを笑っているように聞こえた。**(カンテラを消す)**

「ハハハ、ま、なんとかなるか」

カンテラの残骸がジジジと最後の明かりで行く手を照らす。目の前には意外と広い石造りの通路が広がっていた。

⇩249へ

461

洞窟の中は、暖かな光に満ちていた。妖精の洞窟だ。雨に打たれて冷えた体には、この光は心地よく沁みわたるようだ（ハートを5個回復）。
「勇者よ、険しい山を越えよくこの地にたどりつきました。この濁った水の中では、私もあまり長くはいられません。ですからよくお聞きなさい。沼のダンジョンは巧妙に隠されています。それを見つけるにはエーテルの魔法が必要です」
その言葉と共に妖精は消え去った。

⇩260へ

462

ぼくはピラミッドの上空にいた。遥か下に真っ黒な炎がこり固まったコウモリが見える。コウモリがピラミッドの頂上に突っ込んだ。
ズガーン！　盛大な爆煙が上がった。煙が晴れると、そこにポッカリと巨大な穴が開いた。それを追って、自由落下を始める。強い風が、頬をなぶり、髪をはためかせる。ぼくは最後の戦いの待つ深淵に飲み込まれていく。

⇩382へ

463

結界の厚さなど知れている。ペガサスの靴でなら、多少のダメージはあっても一瞬だ。かかとを3度踏み鳴らすと、次の瞬間ぼくは結界の中にいた。どうやら結界の周期にペガサスの靴の速度が勝ったようだ。

⇩266へ

464

炎には氷だ。全身全霊を込めたアイスロッドから、凍気がガノンに直撃！⇩207へ

465

階段を下りて、ぼくは倒れたブラインドの横に用心深く立った。ブラインドが弱々しく片手を上げた。まだやる気なのか？

「お、おれは、ガノンからトライフォースを盗んで……おいはぎ上がりのガノンより腕が上だって証明したかっただけ……だ。それが、あいつの手先になっちまって……情けねえ。……勇者よ、あんたとの勝負、悪くなかったよな……」

ブラインドの体がすうっと消えてなくなった。そして、その場所には1個のクリスタルが残った。そのクリスタルはまばゆいばかりに輝き、1人の少女を映しだした。

「勇者さま、あなたのおかげで助かりました。」そして話は続いていく。

「七賢者が闇の世界からの通路を封じるとき、魔族から賢者たちを守ったのがナイトの一族なのです。そしてたぶんあなたがその最後の1人……。その中から「勇者」が生まれるなんて不思議なことですね。
さあ、氷のダンジョンがあなたを待っています。勇者の行く道がトライフォースへと導かれますように」祝福の言葉にぼくの体に再び力が戻ってくる。
（ハートが1個増える。ハートを全部回復） ⇩252へ

466

小部屋に突き当たった。木の床には泥で汚れた獣の足跡が幾つもあった。足跡の先に階段があるが、その前を大きなブロックが塞いでいる。
●パワーグラブがあれば……⇩362へ　●パワーグラブがなければ……⇩286へ

467

スイッチを引くと、とうとうと水が流れだし、みるみるうちに水かさがふえていく。そして足元まで満ちたところで止まってくれれば……止まって……ゲゲッ、止まらない！　それどころかさらに水かさはふえ、いきおいをつけてあふれだしていく。ああ、流されてしまうぞ！　**（ハートを1個消費）** ⇩150へ

468

右の扉はわずかにきしんで開いた。用心深く中の様子を探ったが、敵はいないようだ。部屋の中央には、これ見よがしに宝箱が置いてあった。まあ、トラップということもないだろう。宝箱を開けると、中には爆弾が入っていた（**爆弾を5個入手**）。

ぼくは、元の部屋へ戻ると奥の扉へと歩をすすめた。

⇩232へ

469

どんな攻撃をかけてくるか分からないにしても、剣で切って切れない相手ではないはずだ。そう判断して切りかかったが、どうして、なかなか倒れてくれない。ぐるぐる巻きになった包帯が鎧のかわりなんだろうか、これが結構硬くて刃が芯に届かないのだ。

なんとか勝ちはしたが、なんだかんだ言って結構疲れる。

そのとき、倒した敵から爆弾がこぼれるのが見えた。なんでこんな奴が爆弾なんか持ってるんだ？　まあいい、このさいもらっておこう、と手を出したそのときだ。

頭上に奇妙な音がするのに気づくのが遅れたのは、はたして疲れのせいだけだろうか。いきなり巨大な手とおぼしきものが降ってきて、むんずと掴まれてしまったのだ。

どんなにもがいても外れない。ぼくを掴んだままどこかへと飛んでいく。この手には体はない。手だけの怪物フォールマスター。そいつはぼくを外に放り出すと、さっさと消え

てしまった。かくてふりだしに戻る、か？　冗談じゃない。気が付くと、爆弾3つはそれでもしっかりと握っていた（**爆弾を3個入手**）。　⇩**102へ**

470

生け垣の奥はけっこう深い茂みだった。それでも、なんとか道をつたって抜けられたようだ。ところが、いったいいつの間に現れたんだろう？　後から猿が1匹ついてくるじゃないか。猿が話し掛けてきた。

「おれサルキッキ。キノコおくれよ、困ってるんだろ？　くれたら手伝ってあげるよ」

困ってるのは確かだが、さてキノコなんて、持っていたっけ？

●キノコならある……⇩77へ　**●そんなものない……⇩38へ**

471

なんとか避けようとしたが、炎は途中から速度を増し、さらに意志があるがごとく、ぼくを追った。今度の炎はただの炎とは違った。まず盾が、次に剣が強烈な熱で溶かされた。鉄どころか、伝説の剣まで溶かす高熱に耐えられるわけがない。ぼくは悲鳴をあげる間もなく、魔の炎に焼かれた。

END

472

キングゾーラにハートを支払って、水掻きをもらった。ゾーラはハートをうけとると、さっさと巣に引っ込んでしまったようだ。あたりに1匹もいなくなる。
ためしに履いてみる。なるほど泳げるぞ。これで湖は出られるめどがついたけど、根本的なところは解決していない。いったい、どうやって闇の世界の水のほこらに戻ればいいんだろうか。まさかもう1度アグニムに喧嘩売るわけにもいかないし……いや、水中で考えていても間抜けなだけだ。とりあえずどこかの岸に上がってからにしよう。

（ハートを2個消費。水掻きを入手）

⇩63へ

473

再び、ゼルダ姫の前に飛び出し、盾で光を受けた。光は盾を弾き飛ばし軌道を変えた。天井を直撃した光は、そこに巨大な穴を開けた。前よりはるかにパワーアップしている。
「今度は負けん、ん、んがあぁぁ」アグニムは両手を組むと、手前に引き寄せ力をためた。耳までさけた口が、限界まで力を振り絞った苦しい息を吐き出した。アグニムの全力が込められた巨大な光の球が、胸元でドンドン膨れあがる。息を吹きだすと同時に、酒樽より大きく膨れた光の球が、こちらに発射された。

●Gにチェックがあれば……⇩372へ　●Gにチェックがなければ……⇩209へ

474

中に入った途端、急に寒気を感じた。何かいるのだろうか。寒気は恐怖をつのらせる。勇気を出して、1歩進むと、ブーツがツルリと滑った。寒いわけだ。床が凍っている。寒さの正体が知れ、少し油断したところに、壁から冷たく光る球が飛び出した。寒いところで出る敵といえばピッタリの武器はファイアロッドだが……。

●ファイアロッドがある………⇩344へ
●ファイアロッドはない………⇩194へ

475

ぼくの体を包んだ青い光が消えた時、ぼくは宙に浮かんだ鉄板の上だった。遥か下に床が見える。落ちたら命はなさそうだ。鉄板の広さは、普通の家の居間程度。そんな狭い板の上に、ぼくの他に、もう1人、いや1個、大きな銀色の球が乗っている。

「何だろう」

近づこうとすると、球はグルリと回転して、こちらを向いた。2つの飛び出した目がこちらを睨んだ。尻尾のように、さらに幾つかの球が連なっている。知恵の神の伝説に登場する、この世を破壊し尽くそうとした悪魔の機械、テグテイルだ。

テグテイルの先頭の球体が、突然、強烈な光を発した。

●ムーンパールを持っている………⇩3へ
●ムーンパールを持っていない ⇩326へ

476

この通路は行き止まりだ。ちっ、ついていない。今来た道を引きかえそう。⇩291へ

477

ぼくは笛吹きの少年からもらったオカリナを吹いた。澄んだ高い音色が響きわたる。ハイラルに古くからある童謡だ。あの少年もこんな曲を吹いていたのだろうか。

青い空の彼方から、大きな鳥が一羽飛んできた。そしてぼくのまわりを飛び回る。ぼくはオカリナを吹くのをやめて、片手を差し出した。その鳥は、ぼくの腕に止まり、2、3度羽をバタつかせた。

（私が必要な時はオカリナを吹くといい。あの笛吹きの少年には良くしてもっらったからな。ブラインドは闇の世界のこの場所のダンジョンだ）

鳥は直接頭の中にそう話しかけると、大空にはばたいた。

そして、ぼくの出番だ。青い魔法陣から闇の世界へ戻り、闇の世界のこの場所、ガーゴイルの石像の前に立つ。4人目の少女はこの中だ。さあ、戦いの中へ。⇩275へ

478

軽く泥水を跳ねあげてぼくは先を急ぐ。と、沼の方角で何かが跳ねた。激しい水飛沫があがる。モルドアームとよばれる、鋭い顎と硬いキチン質の鎧を持った水棲モンスターだ。水飛沫のため、ぼくは一瞬敵のすがたを見失った。そのため防御が遅れた。「うわああ」モルドアームの巨大な顎が、ぼくの肩にがっちりと食い込んだ。**（ハートを1個消費）**なんとかその顎を外したものの、攻撃どころではない。ぼくは痛む傷口を押さえて駆け出した。

⇩8へ

479

そうそうやられてばかりはいない。しかし、電撃があると分かったからって、かわし方まで分かったわけじゃない。放電の音がやむのを待って、剣を撃ちこむ。ところがその瞬間、剣を伝わって腕にしびれたような衝撃が上ってきた！　しまった、タイミングを読みそこねたか？　おかげで一瞬目の前が暗くなったが、しかし確かにバリを倒したはずだ。奥のほうでゴオンと音がする。扉が開いたらしい**（ハートを1個消費）**。

⇩290へ

４８０

「うぎゃあああああぁぁ！」
断末魔と共に、アグニムの全身から真っ黒な炎が上がった。逆行した光球が、激突した瞬間の姿でアグニムは固まっていた。黒い炎は生物のようにくねり、衣服をなめ、皮膚を焦がし、ついには人の形を失わせた。かつてアグニムだった人形が地に崩れても、炎はまだ宙にいた。
ガガガガガガガ……。足元から響くような低い声が響いた。笑い声とも取れる、その声と共に黒い炎はコウモリの形に変わった。コウモリははばたくと、アグニムの開けた天井の穴から飛び去った。
「あれがガノンです……」ゼルダ姫が言った。
「ガノンはどこに？」
「ピラミッドに行ったのです。再び、闇の力を蓄えて巻き返しを図るつもりです。今、逃がしては、悲劇が再び起こります！」

●Ｉにチェックがある……⇩３９２へ　●Ｉにチェックがない……⇩１５６へ

481

光の正体は、黄金色をした3つの三角形の板だった。サハスラーラ老に言われて集めた勇気、知恵、力の紋章と同じ紋章が輝く板に彫られている。これがトライフォースというものなのだろうか。

トライフォースは部屋の中央に浮いていた。

ぼくは吸い込まれるように、その三角形に手を触れた。冷たい金属の感触、それが次第に暖かな生物のような温度を帯びる。そして3つの三角形は交互に輝き始める。そのリズムと同調した声が、ぼくの頭の中で響いた。

(天下る何処かに黄金の力あり。触れそめし者の望み神に届かん……)

(汝、望むもの有らば、我もまた、それを望む……)

(運命と伝説に導かれし者よ、汝の望みを唱えよ……)

「ぼくの願いは……」

祈りよ。時を超えよ。

⇩エピローグAへ

482

ヨロヨロと歩き始めた。
マスターソードを杖にし、ピラミッドの出口にたどりついた。
夜が明けていくように、闇が退いていく。
ゆっくりと、ハイラルの新しい、本当に新しい1日が始まろうとしている。
ようやく心の中に勝利の感触が芽生え始めていた。

●JとP両方にチェックがあれば……⇩エピローグBへ
●JとP片方だけにチェックがあれば……⇩エピローグCへ

エピローグA

「ほら、右足の踏み出しが甘い。違う。こうだ」
「こう？」
言いながら剣を交わす。
思わず力が入り、尻餅を突いたのは、おじさんの方だった。
「ごめんなさい」
手を差し伸べると、おじさんは豪快に笑いだした。
「ぬははははは、おまえの剣に負かされる時が来たか」
おじさんとぼくの住む家の庭で、ぼくらは笑いあった。神父様とサハスラーラ老が傍らに来ていた。
「しかたがあるまい。世代は交代する……」
「ちょっと、さびしい気もするがな」
旧知の仲のおじさんと神父様が苦笑いする。
「んほほほ、じゃが、わしはまだ負けけん」
サハスラーラ老が、杖を構えると、ぼくに向かってきた。さすがに手強い……。

エピローグA

酒場で老人の背中が小刻みに震えている。その後ろから少年の影がさす。震えが止まった。
「父さん、オカリナが見つかったよ」
老人は振り返らずに言った。
「そうか。勇者殿の役に立ったか」
老人に近づくか、近づくまいか迷っている少年に、老人は険しい声で続けた。
「ほら、酒場は子供の来るところじゃない。わしはすぐ帰るから、家で待っておれ」
「はぁい」すねたように答えて、少年は家路に着いた。せっかく帰ってこれたのに……。
少年は、ちょっと不満だったが、元にもどれたことを考え、満足することにした。
酒場に残った老人は、グイッと飲みかけのグラスを干した。帰ってきた息子に優しい言葉をかけられなかった自分がなんともじれったい。しかし、涙を見られたくはなかったのだ。いつか息子もわかる時が来る……。

今、ハイラルに陽光の差し込まない場所はない。すべての人々がほがらかに、まっとうに自らの暮らしを楽しんでいる。
商人はあいかわらず奇妙な品物を「大将」に売り、泥棒は迷いの森で稼業にいそしむ。
占い師の予言によると、マスターソードを鍛えてくれた鍛冶屋は、その評判で大繁盛する

らしい。
ハイラル城では6人の娘たちが、ゼルダ姫にいとまを告げていた。それぞれ家族の待つ家に帰るのだ。あいさつを終えた娘たちは、迎えの者に互いの苦労をペチャクチャと話しながら帰っていく。最後に残った1人が、ゼルダ姫に聞いた。
「トライフォースを手にした勇者様の願いは何だったのですか……」
「わかりませんか？　このハイラルを見て……」
ゼルダ姫は優しくほほ笑み、どこか遠くを見るような顔をしながら続けた。
「勇者様は、すべてが元どおりのハイラルに変わることを望んだのです。そして、その平和が永遠に続くようにと……」
姫の眺める青い空に、真っ白な鳥が雄々しくはばたく。
その頃、迷いの森の台座ではマスターソードが永遠の眠りについたところだった。

終わり

エピローグB

まだらな雲から、何本かの光の筋がハイラルの地に差している。創造神の時代のような暁、そうだ、ハイラルは生まれ変わったのだ。

ふと目をあげると、6人の娘たちが迎えにきているのが見えた。どうしたのだろう。ゼルダ姫の姿がない。

ゆっくり娘たちに近づいていく。娘たちの表情は一様に暗く沈んでいる。

「どうしたんです。闇の世界は去ったのです。ガノンは滅びたんですよ」

「はい。それは、それはいいのですが……」

「ありがとうございました。でも……」

「でも？」

「ゼルダ姫が死んでしまったのです」

目の前が真っ暗になった。

「転送には膨大なパワーが必要でした。あなたを亀岩とピラミッドに届けるためにゼルダ姫は……」

「それは言わないはずでしょ、勇者様だって……」

「いいえ、言わせて。勇者様、あなたがオカリナさえ持っていてくだされば、忠告を聞き

入れ、順序良く必要なものをそろえてさえ……」
返す言葉がない。結局、ハイラルを救ったのは、ぼくではなかった。おじさんやゼルダ姫の魂が救ったのだ。ぼくはマスターソードの力を借りて、敵に勝った。その勝利を讃えるのに、誰が剣の名を連呼するだろう。ぼくはゼルダ姫の剣でしかなかった。命をかけて戦っていたのはゼルダ姫たちだった。
ぼくは1人、誰もいない家路に着いた。ほめ言葉などなくていい。帳消しだ。
淡い光が、ぼくの影を頼りなく細く長く足元から伸ばしている。

終わり

エピローグC

……それから、ぼくはハイラル城に招かれ、歓迎攻めにあった。ゼルダ姫と6人の娘たちに代わる代わるダンスをせがまれ、ハイラル中の人々に握手と冒険話を求められる。今までの戦いより辛かったかもしれない。が、それは嬉しい辛さだ。

サルキッキやゾーラも城に現れ、誇らしげに飲み食いしている。占い師や砂漠の商人は出店を作り、かなりの評判だ。なにせ、冒険を左右した道具や情報を売ったのだ。そんなすごい宣伝はない。

カカリコ村からも、たくさんの人が来ていた。その中にオカリナをくれた少年の父親はいなかった。結局、少年は木になったまま、ぼくに、それを救ける力はなかった。

宴は3日3晩続き、4日目の朝には三々五々人々は引き上げていった。城の人々に別れを告げ、ぼくは久しぶりに家に帰った。

家の中は出ていったときのまま。はねあげられた毛布。消えた暖炉の火。その前に苦湯を飲むカップがある。おじさんのカップだ。

ふと、木の机の上を見ると、酒のグラスが3つ。2杯は飲み干され、1杯は口がつけられていない。そのグラスの前に、おじの剣がある。

誰が来ていたのか、すぐに分かった。城に来ていなかった人物、神父様とサハスラーラ

老だ。彼らは勝利と解放に酔うことなく、おじの死を、ここで悼んでいたに違いない。
……ぼくは１人だ。栄光は短い。平穏は辛かった過去など、すぐに風化させてしまうだろう。勇者でも１人は淋しいのだ。

終わり

行動記録用紙

ハート

紋　章

勇気の紋章	
力 の 紋 章	
知恵の紋章	

アルファベットチェック

A	B	C	D	E	F	G	H

I	J	K	L	M	N	O	P

アイテム・魔法リスト

メモ

編集部から

光と闇の世界を舞台に繰り広げられる、勇者の冒険はいかがでしたか？　あなたは魔王ガノンを倒し、ハイラルを救うことができたでしょうか？

当編集部では、今後もゲームを素材にしたゲームブックを、次々と発表していく予定です。

つきましては、すでに発表しております「ゲームブックシリーズ」を含め、当シリーズに対するご意見、ご感想をお寄せいただければ幸いです。また、これからゲームブックにして欲しいゲームの希望などもお待ちしております。

〒162　東京都新宿区東五軒町3番28号　㈱双葉社CTR「スーパーファミコン冒険ゲームブックシリーズ」編集部　ゼルダの伝説　神々のトライフォース係まで、あなたの氏名、住所、年齢と、感想を書いていただいた本のタイトルを明記の上、お寄せ下さい。

お寄せいただいた方の中から、抽選でゲームブックの最新刊をプレゼントいたします。

企画・構成／富沢義彦　澤藤健　スタジオ・ハード
制作／スタジオ・ハード　森田猛
文／富沢義彦　澤藤健　冨永浩史
作画／伊藤伸平

ゼルダの伝説
神々のトライフォース

双葉文庫　スーパーファミコン冒険ゲームブックシリーズ　す 02-81

著　者　富　沢　義　彦
制　作　スタジオ・ハード
発行者　井　上　功　夫
発行所　株式会社双葉社

〒162　東京都新宿区東五軒町３番28号
ＴＥＬ東京(5261)4818（営業）
東京(5261)4837（編集）
振替　東京8-117299

印　刷　三晃印刷株式会社
製　本　㈱若林製本工場

ISBN4-575-76179-6C0193

（落丁・乱丁はお取りかえいたします）
定価・発売日はカバーに表示してあります

ゼルダの伝説

―神々のトライフォース―

富沢義彦

FUTABASHA GAME BOOK SERIES

GAME BOOK

ゼルダの伝説 神々のトライフォース

FUTABASHA GAME BOOK SERIES

双葉文庫

FUTABASHA GAME BOOK SERIES

双葉社冒険ゲームブックシリーズのご案内

スーパーマリオブラザーズ
スーパーマリオブラザーズ 2
スーパーマリオブラザーズ 3
スーパーマリオワールド
桃太郎伝説
桃太郎電鉄
桃太郎電光石火
桃太郎伝説スペシャル
桃太郎活劇
桃太郎伝説 II
プロ野球ファミリースタジアム
プロ野球ファミリースタジアム 2
プロ野球ファミリースタジアム 3
ファミスタ'90
ウルティマ
ウルティマ II
ヘラクレスの栄光
ヘラクレスの栄光 II
ファイナルファンタジー
ファイナルファンタジー II
ウィザードリィ
ウィザードリィ II
ウィザードリィ III
魔神英雄伝ワタル
魔神英雄伝ワタル外伝
がんばれゴエモンからくり道中
がんばれゴエモン外伝
悪魔城ドラキュラ
悪魔城伝説
イース
イース II
ゼルダの伝説
リンクの冒険
プロ野球？殺人事件！
貝獣物語

カバーイラスト／伊藤伸平
カバーデザイン／田部早苗

GAME BOOK
ゼルダの伝説
神々のトライフォース
富沢義彦／著
スタジオ・ハード編
双葉文庫
す 02-81
P450

ISBN4-575-76179-6
C0193 P450E

双葉文庫　定価450円（本体437円）

力、知恵、勇気、の紋章を持つ黄金の聖三角体「トライフォース」をめぐり、多くの血が流された「封印戦争」から幾世紀。再び、闇の世界を解放しようとする邪悪の者が現れた。その背後には、魔王ガノンの影が……。勇者よ、ゼルダ姫を助けだし、ハイラルに光をとりもどせ！

FUTABASHA GAME BOOK SERIES

マザー
女神転生
ファンタシースター
ファンタシースター II
少年魔術師インディ
少年魔術師インディ 2
少年魔術師インディ 3
ファンタジーゾーン
ファンタジーゾーン 2
ビックリマン
ビックリマン 2
ファミコン探偵倶楽部
ファミコン探偵倶楽部 II
邪聖剣ネクロマンサー
ファザナドゥ
ラストハルマゲドン
虹のシルクロード
じゅうべえくえすと
ウィロー
スウィートホーム
マルサの女
魔界塔士Sa・Ga
遊遊記
サンサーラ・ナーガ
ファイアーエムブレム
MADARA（マダラ）
じゃじゃ丸撃魔伝
忍者らホイ！
ジャングルウォーズ

ゼルダの伝説　神々のトライフォース
定価450円
1992年7月26日　第1刷発行

著　者／富　沢　義　彦
制　作／スタジオ・ハード
発行者／井　上　功　夫
発行所／株式会社双葉社
〒162 東京都新宿区東五軒町3-28